

工卜3J-72

77-260

77-260



理學士山崎直方  
理學士佐藤傳藏 共編

大日本地誌 卷三

東京博文館藏版

明治  
27 12 28  
丙交

### 緒言

吾博文館に於ける地誌編纂の事業は、漸くに其の歩武を進めて、爰に第三卷の上梓を見るに至れり。本書收むる所の地之を地文の現象に見るも、之を人文の發展に徴するも、頗る多方多面に亘り、地體の構造地形の變化複雜を極め、連嶂の蜿蜒たる、火山の秀然たる、或は急湍沫を飛して千尺の峽流をなし、或は巨川の汪洋として万頃の沃野を注ぎ、其盡くる所即ち大平洋の烟波淼々として天に連なるを見る。而して其間に横はれる高臺平原は、到る處其習俗を異にし、其歴史を殊にし、産業の性質亦其の特色を發揮して、中に本邦輸出品の大供給地をなすものに乏しからず。觀去り觀來れば、記すべく録すべきもの茫として又際涯を知らず。幾かに其十一を撰ひ、編纂の旨趣と方法とは、曩の二卷に則ち約一千頁に垂んとするものを得たり。唯、地域廣大探究未だ洽ねからず、文物多岐に涉りて編者の窺ひ能はざる所少なしとせず。加ふるに魯魚の誤亦蓋し少なきにあらず、此等は總て大方の訛正を得て、徐ろに訂正せんことを期す。

本書の編纂に關與せるものは、第二卷に於けると概ね異なる所なし。全體の編纂は吾人

監修の下に於てし其地文に關する條は吾人兩人の外に理學士大日方順三氏に負ふ所最も多く人文に關しては文學士齋藤隆三文學士大塚久兩氏の外に編者の執筆せる所少なからず。而して田山録彌氏の從軍せるが爲め武田櫻桃西郎氏之に代りて編纂を補け地圖の製作につきては太田健吉郎氏を頼す所最も多く此他伊藤良造前田勳遠藤重男の諸氏は校正其他の件に關して本書の編纂を補けられたること少なしとせず。又本書上梓の比に方りて恰も田山氏の歸京するに遭ひ其の補助を得て其出版の機を進捗せしむるを得たり。爰に謹て同人諸君に謝意を表す。

明治三十七年天長節

識者編

### 大日本地誌卷三(中部)目次

總論	一
第一編 地文	一
第一章 地形	一
概説	一
尾張國	二四
三河國	三四
遠江國	四九
駿河國	六四
甲斐國	一〇二
伊豆國	一二六
美濃國	一八三

飛驒國	二〇〇
信濃國	二二三

第二章 海洋並に海岸線

一 相模灣伊豆海並に其沿岸	二九六
二 駿河灣並に其沿岸	二九八
三 遠江灘及び其海岸	三〇二
四 伊勢海及び其沿岸	三〇五
五 海流及び潮	三一
近時に於ける重要な地變	三二
濃尾大地震	

第三章 地質

一 汎論	三一七
二 始原大統	三二一
片麻岩系 晶質剝岩系	

三 古生大統	三三八
四 中生大統	三四八

侏羅系 白堊系

五 御坂統及び三倉統	三五三
------------	-----

御坂統 三倉統

六 新生大統	三五六
--------	-----

第三系

七 噴出岩	三八〇
-------	-----

(イ) 深成岩

(ロ) 火山岩	三八七
---------	-----

八 地體構造	三九七
--------	-----

九 鑛泉	四〇一
------	-----

第四章 氣象

氣溫 氣壓 風向 降水量 霜雪 溫度

氣象	四二一
----	-----

高山氣象

..... 四三二

富士氣象

..... 四三三

御岳氣象

..... 四三九

第二編 人文

..... 四四三

第一章 沿革

..... 四四三

一 石器時代

..... 四四三

二 上古

..... 四五二

三 寧樂朝より平安朝に至る

..... 四六四

四 鎌倉時代

..... 四七三

五 南北朝時代

..... 四七九

六 諸族割據攻伐時代

..... 四八七

七 豐臣氏の時代

..... 五〇七

八 徳川氏の時代

..... 五一一

九 維新以後

..... 五二五

第二章 政治宗教

..... 五二七

一 行政

..... 五二七

二 司法

..... 五三四

三 軍事

..... 五三六

陸軍

..... 五三六

四 教育

..... 五四〇

初等教育 中學教育及實業教育 高等教育 圖書館及博物館 新聞紙

及雜誌

..... 五四七

五 宗教

..... 五四七

神社及神道 佛教 耶蘇教 迷信及信仰

六 交通

..... 五六六

設道 郵便電信電話 水運

第三章 産業

..... 五八八

- 一 農業.....五八八
  - 耕地 土壤 米 麥 食用農産物 特用農産物 蠶業 牧畜
- 二 林業.....六一八
  - 中部の林業 木曾伐木及送木の模様 天城御料林 三方御料林 大代御料林 七宗山御料林 瀬尻御料林 等
- 三 水産.....六三七
  - 漁獲物 遠洋漁業 製造物 水産養殖 製鹽
- 四 工業.....六五二
  - 製糸紡績 織物 陶磁器 七寶燒 漆器 化學工務品 製作工務品
- 五 鑛業.....七〇〇
  - (イ) 金屬鑛類.....七〇二
    - 金銀山 銀銅山 銀銅鉛山 銅鉛山 アンチモニー鑛山 錫鑛山 瀧津鑛山
  - (ロ) 非金屬鑛類.....七二二

### 第參編 地方誌

- 愛知縣.....七三九
  - 概説 豊橋町 岡崎町 有松町 鳴海町 大高町 熱田町 名古屋市
  - 清洲町 一宮町 津島町 蟹江町 犬山町 瀬戸町 龜崎町 半田町
  - 武豊町 常滑町 舉母町 足助町 其他
- 静岡縣.....七八一

- 石炭鑛山 重石鑛山 石油 硫黄 山鹽 石材 紙藥材 硯材
- 硝子原料 磁土 陶土 コス土 雜鐵物
- 六 商業.....七二七
  - (イ) 商業都會.....七二八
  - (ロ) 商業機關.....七三四
  - (ハ) 會社事業.....七三六
  - (ニ) 金融機關.....七三七

概説 富士山 沼津町 原町 吉原町 大宮町 蒲原町 興津町 清水町 下田町 熱海町 其他

山梨縣

概説 上野原驛 猿橋驛 大月驛 谷村町 日下部町 勝沼町 甲府市 昇仙峽 韭崎驛 日野春驛 小淵澤驛 市川大門村 楸澤町 富士川 奥延山 其他

岐阜縣

概説 岐阜市 長良川 加納町 笠松町 大垣町 關ヶ原村 高田町 養老公園 太田町 八百津町 兼山町 御嵩町 網場 多治見町 土岐津町 大井町 中津町 苗木町 岩村町 關町 萩原町 小段町 高山町 上有知町 八幡町 古川町 其他

長野縣

概説 小諸町 上田町 松代町 長野市 諏訪町 飯田町 伊那町 高遠町 松本町 大町 中野町 飯山町 其他

八三五

八六七

九一〇

欠

MISSING



寫眞銅版

- (一) 尾張國津島天王川。 全城山より衣浦を望む。
- (二) 三河國鳳來寺鐘樓。 全川合乳岩。
- (三) 遠江國天神山。 全三俣烏帽子岩。
- (四) 遠江國濱名湖。 伊豆國子浦海岸。
- (五) 駿河國御殿場より四方に富士を望む。 全田子浦。
- (六) 甲斐國荒倉より南方富士山を望む。 富士山頂の日の出。
- (七) 富士山經壁火口巖の一部。 富士山頂噴火を隔て、最秀點御ヶ峰を望む。
- (八) 富士山頂の一部。 富士山腹沙走り。
- (九) 富士山西麓入火(磐岩階道)の入口。 富士山西南麓白糸の滝。
- (十) 駿河國龍岩淵より北方に富士山を望む。
- (十一) 遠江國天龍川下流。 駿河國安倍川橋。
- (十二) 甲斐國御嶽新道仙娥瀑。 全昇仙峽。
- (十三) 富士川上流(其二)。 富士川下流。
- (十四) 駿河國沼津町及狩野川上流。 甲斐國御嶽富士川燈明場。
- (十五) 御殿場より河口湖を隔て、富士山遠望。 伊豆國桂川。
- (十六) 伊豆國修善寺。 全熱海開鳴噴泉。
- (十七) 美濃國長良川懸阿。 全長良川。
- (十八) 美濃國飛騨川。 飛騨國高原川沿岸。
- (十九) 飛騨山脈の高峰槍ヶ岳絶頂。 全槍ヶ岳。
- (二十) 飛騨乗鞍嶽より信濃御嶽遠望。 全乗鞍ヶ嶽。
- (二十一) 信濃國尾丸溪。 全白骨温泉天狗橋。
- (二十二) 信濃國御嶽上岩坊。 全御嶽山上。
- (二十三) 島居峠絶頂より木曾川溪谷原野を望む。 信濃國碓高川。
- (二十四) 信濃國淺間山頂上前掛山の熔岩流。 全火口巖の一部。 信濃國鴻の巣山。
- (二十五) 信濃國鹽尻峠。 淺間山遠望。
- (二十六) 全厚川。 姫川柳瀬橋。
- (二十七) 信濃國天龍峽浴場。 全龍角峰。

目次



(八十四) 信濃國天表奉命の御陵  
(八十五) 信濃國戸隠神社。

全城山公園。  
信濃國小谷鐘泉浴場。  
信濃國姥捨山。

(八十六) 信濃國別所温泉安樂寺  
全上光前寺三重塔。

信州布引山釋尊寺。

卷三 目次 終

大日本地誌 卷三

理學士 山崎直方 編  
理學士 佐藤傳藏



中部

茲に本誌前二卷に於て本州島の北半關東奥羽の地方を細説したれば今や之より進んで本州中部の地理を述べんとす。爰に中部と稱する地方は本州島の中央部にありて彼の南北日本の地形上の好境界たる富士火山脈より西方に延び敦賀灣と伊勢海の尖頭を結べる伊吹養老の連嶺に至るの間に於て日本海に瀕せる部分を除きたる地域を汎稱し、即ち太平洋岸にある尾張三河遠江駿河伊豆の東海諸國と其内側に位して海を見ざる美濃飛驒信濃甲斐の諸國とを合

地勢の一斑

地表の相貌

山嶽

み、愛知、静岡、岡崎、豊田、長野、山梨等五縣の治下にある所なり。中部地方は本州島中に於て最も幅廣き部分を占め、本邦地形の脊梁をなせる南北兩彎の主山系は爰に衝突して對曲を造るのみならず、更に之を横斷して走れる富士火山脈のあるありて北方より來れる那須火山脈と交錯す。されば此地方は單に其地體構造の複雑を極むるのみならず、其地表の相貌亦甚だしく多岐に涉り山野水流は各種の標式を具へて自然の彫雕は爰に其巧致を極むるを見る。北彎の山系は關東山塊、志山脈等の一部を露はすに過ぎざるも南彎の山系は飛騨木曾赤石等の山脈を起して三千米の高距を出入する連峰は蜿蜒長く連なり、其高山性の特色を具へて巍峨、天を摩する幾多の峯頭には夏季少日月を除くの外は常に白雪の皚々たるを戴き、時に近き過去の時代に於ける氷河存在の趾を遺すものありて山勢の雄渾峻拔なる本邦中また容易に其儔を求むべからず、外人は則ち之れを呼びて日本アルプと稱するに至る亦偶然ならざるなり。顧みて一方を望めば我日東花彩の中心を飾りて八面玲瓏たる富士の高根は圓錐形の尖峯秀然雲表に聳えて火山獨特の好標式を示し、

火山

河流

其系統に屬して畧ぼ南北の方向に走れる火山脈の中には或は孤峯の高く峙つもの、或は數個の火口相並びて連嶺の觀をなすもの、若しくは巨大の火口趾を存し又は廣大なる裾野を曳き往時に於ける噴火の激甚なりしを語るもの陸續相踵ぎ、其脈遠く太平洋に及びて幾座の火山島を基散し、活動の勢は今猶此等の諸島に於て盛なるものあるを見る。此等連嶺の横はる所、火山の蟠る邊、其附近の地盤は從つて高峻にして飛騨山地、信濃高臺の如きは宛も我邦のバミルと稱すべく、地勢自から本州の屋梁をなすが如き觀を呈し、源を此等の山中に發せる數多の溪流は或は南に或は北に次第に輻射して本州島の最も幅廣き部分を貫流し、爰に千曲、天龍、木曾等の如き本邦有數の巨浸を作り多くは其急傾斜の地を走るを以て激流奔湍に富み又山間深遠の地を穿ちて壯絶なる峽流をなすもの尠なしとせず、而して其下流漸く山間を離るゝに及び急に分岐して數多の河道を生じ大小種々の沖積平原を作り東海沿岸の地をなすものあり、彼の木曾川の下流に沿うて横はれる濃尾平野の如きは本邦中其面積の比較的大なると地味の極めて豊穰なるとを以て其名殊に著はる。

交通

此等平原地方は南面大平洋の蒼波を臨み季候和煦にして地産に富み、人生の便之に過ぐる者なきを以て夙に多數の住民を招致し殊に其比隣に於ける關東平野の人文發展して或は鎌倉幕府の開基となり、降て徳川幕府の繁榮を極むるに至りてより既に此地方は東西兩京交通の衝路に當り、其以前より疾に開けて本邦を縦走せる二大交通路の一なる東海道は概ね此海岸の平原に沿うて走るを以て、其行路は比較的容易にして長亭短驛五十三次の多數は我中部の地方に興り、又當時運輸の便は多くは遠州洋上七十五灘の危険を避けて之を陸路に求めたれば、幾多の貨物を荷ふて絡繹たる驛馬の嘶くは參勤交代絶間なき西國諸侯の鹵簿に聞こゆる警蹕の聲と相和し、さなきだに人文發展の素因に乏しからざる此地方は爲めに愈發達して遂に明治維新の盛時に際會し、首都の東京に遷り東海鐵道の完成し産業の又新たに勃興するもの等ありて、其繁華は頓に増加し沿海一帯の地方は其人口の密度に於ても優に他の地域に超越せるものあるを見る。一方に於て其内側に位せる山嶽の地方に於ては飛驒の如き、信濃の如き將た甲斐の如き其地形の然らしむる處人文の發達

地方的中心

の程度は之を前者に比すれば數歩を譲らざるべからざるの憾あり、信濃の如き中山道街道の之を横斷するものありと雖も其木曾の棧道を辿り和田碓氷其他幾多の難路を踏破するに至りては其險夷固より東海の坦道と日を同じくして語るべきにあらざりしなり。信越鐵道既に成り中央線の鐵道は東より西より相延びて將に相聯絡せんとするに到りて其面目一新の機漸くに熟せるも、猶今日に於ては此等山嶽の各地方が彼此相通じ習俗相和するの點に於て闕如する所なき能はず。山嶽地方の特性として人文の發達する所は纔に連嶺四圍の間に横はれる掌大の盆地に非ざれば則ち河流沿岸の帶狀平原なるのみ。山梨縣の命脈は地形上、一に其中央にある甲府盆地の上に懸るも其隣縣長野に到れば其廣大なる管内自から山嶽連亘の形に制せられて幾個の小區劃に分たれ、或は千曲川の流域に沿うては佐久平小縣盆地善光寺平を生じ、或は梓川の既域に於ける松本平天龍河畔に於ける伊那地方、諏訪湖を中心とせる諏訪盆地、若しくは木曾川齋谷の如き各箇々の小天地を造り、縣治の中心は長野にあるも長野市と長野縣全般との關係は必ずしも甲府市と山梨縣とのこと

くならずして、經濟習俗等此等小天地の中に別に松本上田等の中心を造り、長野も亦善光寺平の中心たるに過ぎざるの觀あり。舊來用ゐられたる北信南信等の名稱は強ち地理的位置を示すのみにあらずして其間自から人文上の意味をも含蓄するを覺ゆるなり。試みに南信伊那地方の中心をなせる飯田の街頭に就て之を見んか其習俗は常に百貨の供給を仰げる名古屋地方のそれを傳へて、彼の北信北端の古城市飯山が其街路の歩道には別に雪除けの庇を設け市區家屋の構造等既に全く範を越後に取れるに比し、兩々對照し來らばまた其間の消息を解するに足らんか、若し夫れ飛驒の如きに至りては等しく岐阜縣の管下にある美濃地方に比し其人文界の現象著るしく異なるあるを見るべく、交通不便なる深山幽谷の境にありては醇朴太古の民の如き村人が三々伍々山隈水涯纒かに聚落を構へて其間には今猶奇異の風習を存すること、その西方加賀の境に近き白川郷地方に見るが如きもの亦尠なしとせず。之を彼の駿遠尾濃の平原相連なり人文上の境界劃然たらず、其習俗の如きも關東風と關西風との間に於ける變化が極めて漸進的たるに比し其對配の轉た微妙なる

## 産業

を感ぜずんばあらざるなり。

産業の梗概は則ち如何、濃尾平野の農業盛にして美濃米の名聲ある爰に絮説するを要せず。駿遠の平原と丘陵地が其溫暖にして多濕なる季候の恩恵により今は本邦第一の茶園と化し、其製茶は信濃に於ける養蠶製絲の事業と共に盛名を海外に馳せ、木曾山中に蓄積たる御料の森林は本邦森林の白眉と稱すべきものにして天城の美林亦之に次ぎ、天龍河畔殖林の盛なるは又此地方の將來に一大富源を造るものと謂ふべし。濃尾の丘陵には花崗岩の分解によりて成れる粘土多く、従つて瀬戸多治見等の諸邑には陶器の産盛にして名古屋に於ける七寶燒、静岡に於ける漆器と共に重要な輸出品をなし、此の他製紙醸造等其の成績の見るべきもの尠ならず、静岡縣の水産は近年殊に長足の進歩を顯はせるものあるを見る。

## 都市

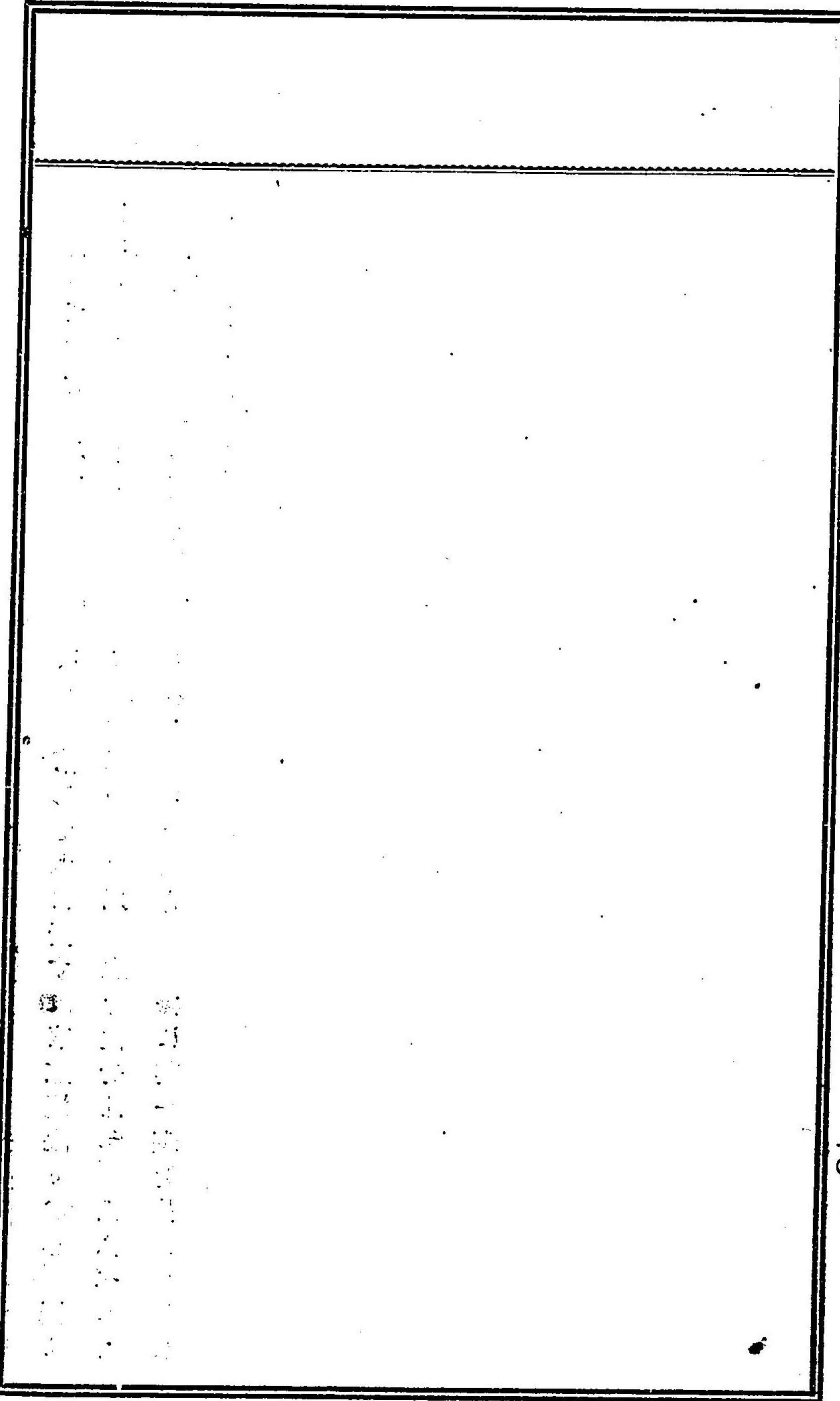
人文の發展は二三の局部を除きて之を通覽するに東北地方に比すれば著るしく良好にして人口の密度遙かに大なるのみならず都會の數亦少なからず、よく各種の産業の中心をなす名古屋市の如きは嘗て雄藩の城市たりしに止ら

ず今は東海中央關西等の鐵道の幹線爰に集中し、商工業極めて活潑にして其の人口既に二十餘万に上り繁華三都に亞ぎて一に中京と稱するに至る。唯、此中部地方は其海岸線の長さ割合には良好なる商港に乏しく、汽船の出入稍頻繁なるは漸くに清水半田等の兩三者に過ぎずして名古屋の港口たる熱田は大船を寄すに便ならず、下田の如きは其位置の多少僻遠なると後方に富饒なる生産地を欠けるとを以て地方的の商港たるの外は沿海航路の避難所となり又本邦の開國史に間々其名を見はすことあるに過ぎざるなり。

## 史的沿革

中部地方の史的沿革につきては説くべきもの亦尠なしとせず、殊に戰國群雄割據の時代に於ては此地方の大部分は實に其争鬪の舞臺として擧げられたるものなりき。織田氏の如き、豊臣氏の如き、將た最後の勝利者たる徳川氏の如き、皆此の地方に起りたる者なり。而して彼等が運命の決勝點たりし<sup>桶狭間</sup>の如き、關ヶ原の如き、或は甲越の雌雄を争ひたる<sup>川中島</sup>の如き、總て皆此地方の中において行客をして轉た懷古の情に勝へざらしむるもの亦鮮少なからざるなり。

仰きて山を望めば峻高極りなく、俯して水に對すれば悠遠限りなし、極りなきの山、限りなきの水、更に地理學の眼を以て之を觀せんか、致ふべきもの、究むべきもの更にまた盡くる所あるを知らず、纔に其一斑を拾ふて爰に本誌第三卷となす。



### 第一編 地文

#### 第一章 地形

##### 概説

中部地方は本州島の中央に最も廣大なる地域を占め、其南端は伊豆半島の最南にある石廊崎と遠江の海岸に突出せる御前崎(共に北緯三十四度三十六分)に位し、最北は信濃の北端天水山にして北緯三十七度二分に及び、子午線上の延長約二百七十杆に達し、又其東端は伊豆半島の東端川奈崎(東經百三十九度九分)より西端美濃近江越前の境に蟠まれる三國ヶ嶽(東經百三十六度十八分)に至り其子午線間の幅約二百五十五杆ありて全躰の面積約四萬平方杆餘にして本邦面積の十分一弱に當れり。

本地域の骨格を構造するものは南嶽北嶽の二大山系にして、此二者は本地域の東西に兩翼を作りて對曲の地形をなし、更に其間を横走して富士火山脈

位置

面積

南嶽北嶽



南嶽の山系

の横はるあり、今順次此等の山嶽を述べ兼ねて其附近の地形を概説せん。  
南嶽の山系 南嶽の山系に属する主要なる山脈は三條に分つを得べく、其最東に赤石山系あり、中央に木曾山脈あり、而して其西には此等と並走せる飛驒山脈の延亘するありて高原性を帯べる飛驒山地は更に其西方に連なり伊吹養老等の小山脈は猶其西南に延亘せり。

赤石山脈

赤石山脈 南嶽山系の外部をなせる一鏈の連嶺は、紀伊半島より伊勢の南部を掠めて一たび志摩の半島に盡くるも其餘脈は猶延びて伊勢灣内に横はれる蒼志列島を作り、再び三河の渥美半島に露はれて其の骨格をなし、進んで濱名湖の北を過ぎ、天龍川の峡谷に達するまでは概ね東北東より北東の走路を取り山勢未だ高峻ならず、所謂低山性の特色を呈するも、天龍川の東に聳ゆる秋葉山の邊より次第に東北北の方向に轉じ、山積亦著るしく膨大して駿遠中信の國境に沿ひ釜無天龍兩河の間に延亘し、漸く北して遂に次第に盛まり、諏訪湖畔に至りて盡く。されば其形よりして一に之を赤石楔狀地と呼ぶることあり、此山脈は實に褶曲より成れる高山脈の好模範たるものなり、

白峯山脈

其原形は既に内外幾多の變動によりて破壊せられ削磨せられしも、猶巍峨たる數條の連嶺は互に並走して其中央の主脈をなせるもの之を赤石主脈と稱し、其最秀點赤石山は三千九十三米の標高を示せり、此主脈の東に當り大井川の縦谷を挟みて並走せるものを白峯山脈と云ひ、高峻の度は更に主脈を超越して其最秀點北嶽は實に三千一百五十米の高さに及べり、白峯山脈の東には白川の齋谷を隔て、七、嶺七面山の山脈ありて高さ二千米に及べり。此等の山脈は其北部に於て次第に相癒合し更に延びて釜無山脈となり、別に花崗岩より成れる駒ヶ嶽山塊其間を破て露出し、高距三千米に達し釜無川の齋谷に向つて急斜せり。

伊那山脈

赤石主脈の西には藤澤三峯北入青木和田水窪の諸齋谷縦谷をなして殆ど一線上に排列せられ、此線の西側に更に一帯の山脈延亘するもの之を伊那山脈と云ひ、其西側は直ちに天龍川の齋谷に面せり。故原田博士は此一帯の縦谷を稱して赤石裂線と云ひ、南嶽山系の表裏兩面を分つものなりとし、伊那山脈は之を裏帯に編入せり。赤石山系が其構造上不均齊式に屬し、之を構造す

赤石裂線

木曾山脈

る地層の順序が裏面より表面に向ひ最古の始原紀層より三波川層古生層御阪層第三紀層と順次排列せらるゝは注目すべきことなり。

木曾山脈 渥美灣頭より東北に走り、三河に於ける高距千米に充たざる設樂加茂の丘陵地より、信濃に入り海拔二千八百米に近き駒ヶ嶽の連山を起し、木曾天龍の二流を分水し、猶延びて松本平の南端に至りて盡く。此山脈は其北端古生層より成れるもの、外其大部分は所謂領家片麻岩なるものと花崗岩とより成り、中央部以北は山勢雄大なるも南部は然らず、設樂丘陵地の中には別に第三紀層の發展するものありて、更に之を貫きて鳳來寺山其他の地點に於て火山岩の噴出せるものあり。

飛驒山脈

飛驒山脈 赤石山系と相對して本邦山嶽中最も雄渾の稱ある此山脈は飛驒信濃の國境に連なり、長く南北の方向に延び其餘脈猶美濃の東部に及べり。

由來此山脈は高原性を帯べる飛驒山地の東縁をなすものにして其東側は急斜して松本平と木曾川谿谷とに臨めり。此山脈の構造は赤石山脈の如く規則正しからずして、其基磐は片麻岩古生層より成れるも、之を破りて迸發せる花

カール

〇

崗岩石英斑岩玢岩等ありて、殊に最後に噴出せし新火山岩は更に此の連嶺の高處に凝積して御岳(三千一百八十五米)乘鞍嶽(三千一百六十六米)等の大火山を作り、其他種々の岩石より成れる穂高山鎗ヶ嶽鏡ヶ嶽鹿島大嶽白馬嶽等何れも三千米を出入する高山は尖峰危嶽峨々として雲に聳え、加之此主脈に沿うて其前山をなせる山脈の中にも常念坊嶽(三千一百二十四米)大天井山(三千一百五十五米)等の高峯聳立するものありて其壯觀また謂ふべからず。

此等の赤石木曾飛驒の諸山脈が雄渾の地形をなせるは甲府盆地伊那平若しくは松本平の原頭に立ちて瞻望するも亦容易に之を見るを得べし。一帯の連嶺巍然として屏風の如く急に其西端に峙ち麓より山腹には猶森林帯の蒼鬱として翠を罩むるあるも、其頂上に近き所、岩石の露出して磊々たる邊盛夏猶殘雪の皚々たるを認むべく、近づきて仔細に之を觀れば其奇峯參差たるの間には又高山特有のカールの生ぜるを見るべく、之れ實に氷雪の削磨によりて成れる特種の地形にして酒盃を半截せるが如き狀をなし、北信地方の獵夫は之を稱して「厩」と云へり、蓋し形の似たるを以てなり。

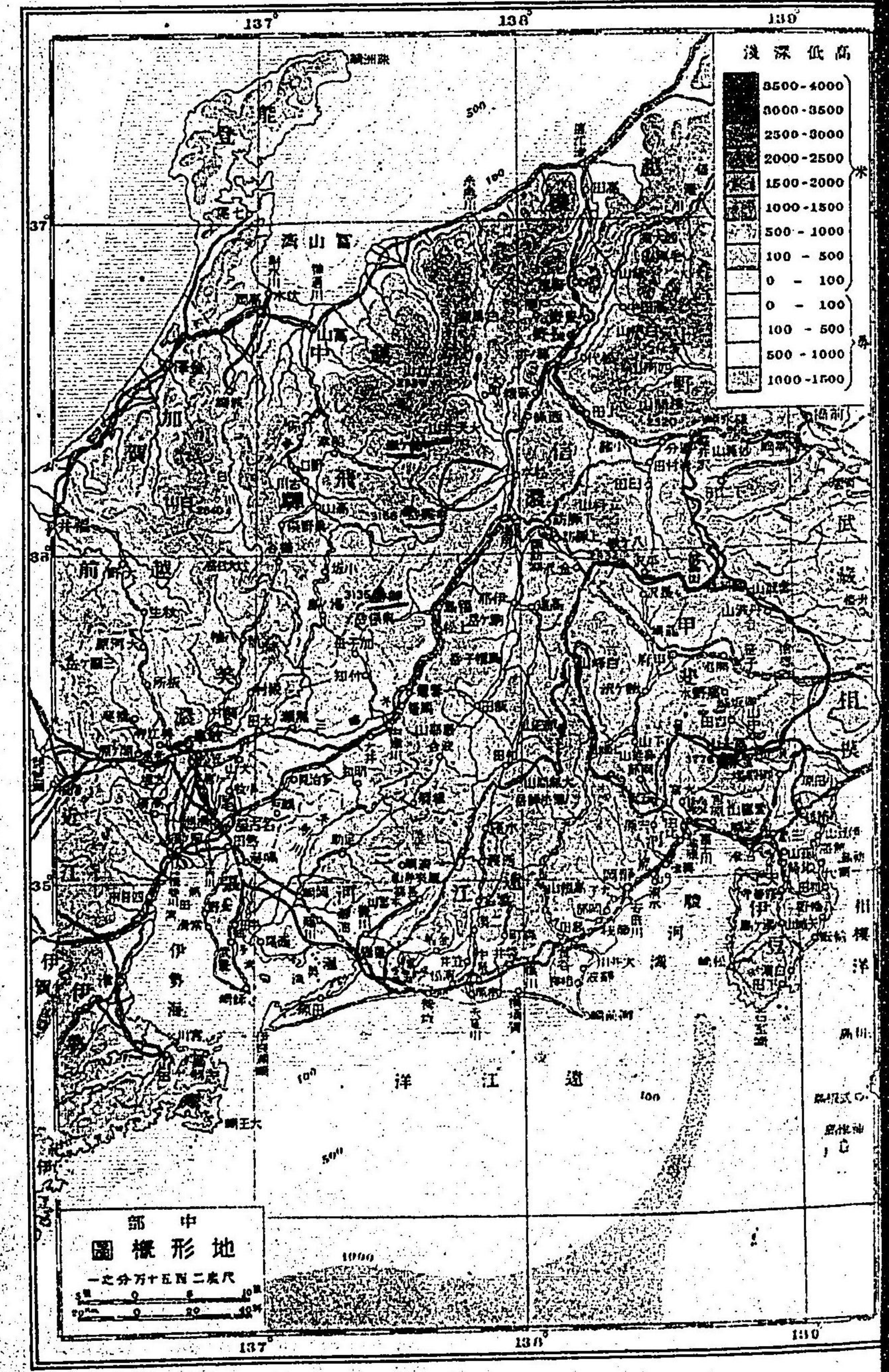
飛驒山地

アルプ山式の特徴を具へたる飛驒山脈より以西は山岳起伏せる飛驒山地にして、同一の地貌は延ひて美濃の北半を蔽ひ、其西隣近江なる琵琶湖盆地との間には伊吹山脈を作り、山脈南に延びて鈴鹿養老の二脈に移る所高距最も小にして爰に關ヶ原の狹隘地を造り、京畿地方より來れる中山道の街道は不破故關の落莫たるあたり、此の狹隘を過ぎて濃尾平原に通じ、東海鐵道の幹線亦此間を縫うて走るを見る。

北嶺の山系

顧て北嶺の山系を見るに其系統と云ひ連絡と云ひ南嶺の如く整然たるものあらず、此山系の原形は既に痛く打破せられて吾人は今纔かに支離滅裂たる断片を見るに過ぎざるなり。其断片の稍大なるものは即ち關東山塊にして、實に赤石山脈と相對して對曲の一翼をなすものなり。此山塊は其大部分は關東地方に屬するものにして、其詳細は本誌第一卷に於て之を述べたりき。而して此山塊は猶關東地方より延びて甲斐信濃の一部に及び、其武蔵との三國の境なる甲武信嶽に於て二千四百五十八米の標高を示し、其西南金峯山に於ては二千五百五十一米に達し、此附近に於て其最も高峻を極むるを見る。

關東山塊



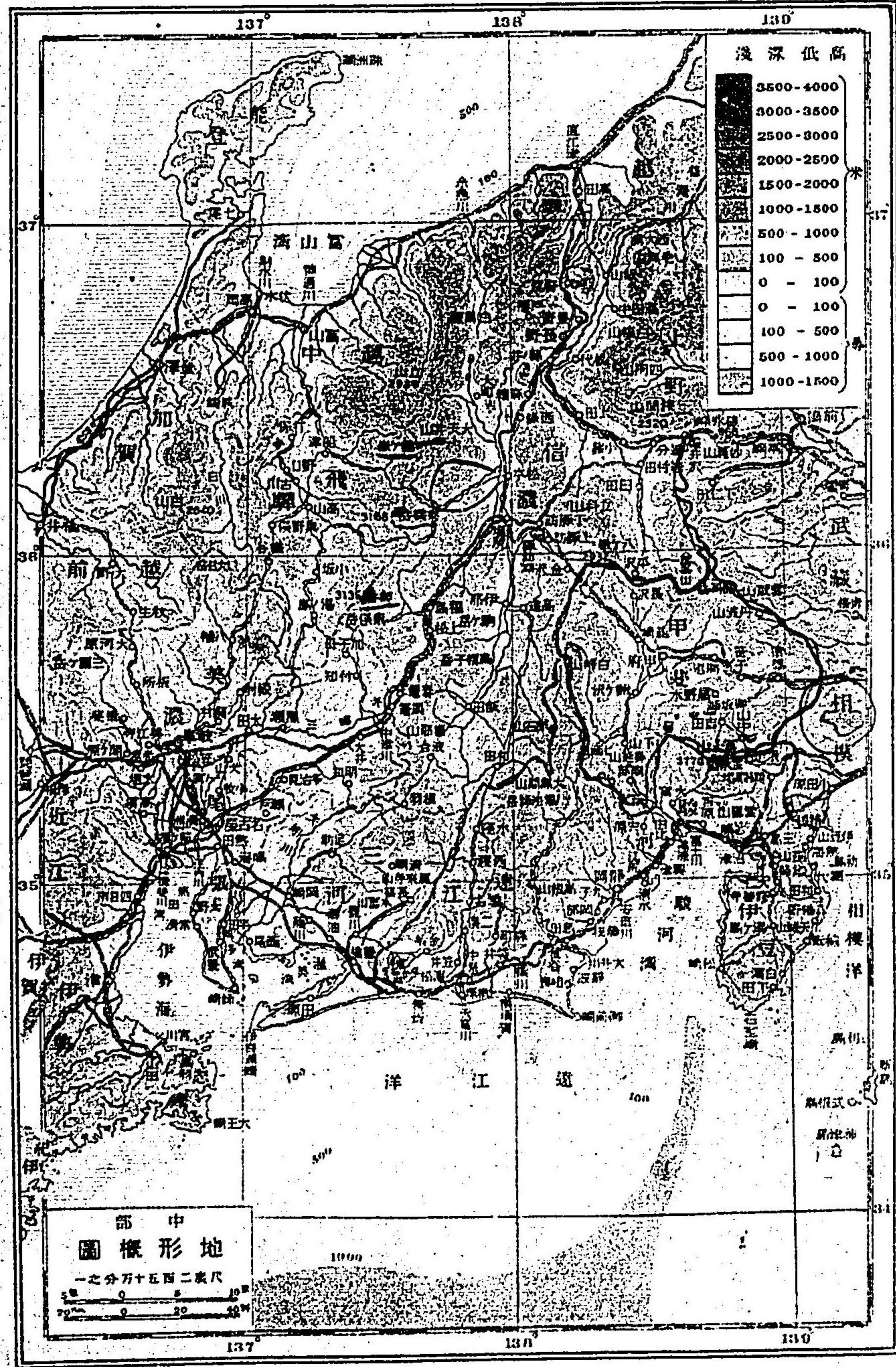
飛驒山地

アルプ山式の特徴を具へたる飛驒山脈より以西は山岳起伏せる飛驒山地にして、同一の地貌は延ひて美濃の北半を蔽ひ、其西隣近江なる琵琶湖盆地との間には伊吹山脈を作り、山脈南に延びて鈴鹿養老の二脈に移る所高距最も小にして爰に關ヶ原の狹隘地を造り、京畿地方より來れる中山道の街道は不破故關の落突たるあたり、此の狹隘を過ぎて濃尾平原に通じ、東海鐵道の幹線亦此間を縫うて走るを見る。

北嶺の山系

顧て北嶺の山系を見るに其系統と云ひ連絡と云ひ南嶺の如く整然たるものならず、此山系の原形は既に痛く打破せられて吾人は今纔かに支離滅裂たる断片を見るに過ぎざるなり。其断片の稍大なるものは即ち關東山塊にして、實に赤石山脈と相對して對曲の一翼をなすものなり。此山塊は其大部分は關東地方に屬するものにして、其詳細は本誌第一卷に於て之を述べたりき。而して此山塊は猶關東地方より延びて甲斐信濃の一部に及び、其武藏との三國の境なる甲武信嶽に於て二千四百五十八米の標高を示し、其西南金峯山に於ては二千五百五十一米に達し、此附近に於て其最も高峻を極むるを見る。

關東山塊



第一版

山塊の地形

此山塊の地形に就きて其最も興味あるは其西端千曲川上流に面せる部分なり。此山塊は其東縁關東平野に面する所において急に斷絶せるが如く、又西縁に於て急に斷絶し千曲川の水は極めて明瞭なる地形上の境界線をなし、即ち川の東部に於ては古生層を基盤とせる此山塊は山岳參差急傾斜を以て直に河涯より起り時に海瀨驛以南に於けるが如く全く絶壁をなし往々峽流をなすに至るも、一面西岸を顧るときは八ヶ嶽の裾野徐ろに起りて地勢次第に隆まるを見るべく、千曲川は實に此山塊邊縁の斷層線に沿うて走るものたるを認むべし。(後章參照)

御阪山脈

對曲をなして相對峙せる兩山系の間に於て更に弧狀をなして連亘せる一聯の山脈あり之を御阪山脈と云ふ、甲府盆地の南に横はりて富士火山の北を擁し御阪峠に於て其高距一千五百七十米に及べり。此山脈次第に東南に轉じ關東地方に亘りて道志山脈をなし、又一方西南に折れて富士の西麓を擁するものを天守山脈と云ひ其一峯毛無山は高距一千九百四十五米に及べり。此山脈は主として御阪層第三紀層及び其間に介在せる玢岩輝綠岩より成る。御阪山

富士火山脈

脈と富士裾野との間には天水を湛へて山中河口西精進本栖等の湖水を作れり。以上の山脈の外猶火山の噴出多くして其最も主要なるものは南北兩嚮の間に横はれる陥落地帯に沿うて噴出せる富士火山脈にして、即ち遠く太平洋中のマリアンナ群嶋に起り、伊豆七島伊豆半島に連なり、數多の火山を噴出し北二十度西の方向に本州島を横斷し、終に日本海の海岸に及ぶものなり。此の大火山脈は實に大小幾多の火山の相連綴して線狀をなし排列せられたるものに外ならざるも、研究の便宜より地形上相接近し其性狀相肖たるものを一括して更に數個の火山彙に分ち、其本州島上にあるものにては天城函根富士八ヶ嶽妙高等の名稱を與ふることあり。而して函根妙高の二者を除くの外は我が中部地方に羅列して殊に本火山脈の覇主たる富士山は三千七百七十八米の高距を以て直に駿河灣頭に聳え白扇倒懸の奇觀を呈し、天城は伊豆半島の大部を占め、八ヶ嶽は信濃より甲斐に亘りて本地域の中央に蟠まれり。

淺間火山彙

富士火山脈の外猶那須火山脈は東北より延び來りて信濃に入り、活動今猶歇まざる淺間の火山彙を起し、此火山彙の西北には四阿白根の諸火山を噴出

山嶽の邊縁

し、又信濃上野越後の境に跨りて毛無火山彙の廣大なる火山區域の横はるあり。此の他火山脈としては飛驒山脈に沿うて噴出せる乗鞍御嶽の諸火山あること既に上に述べたるが如し。

中部地方に於ける山嶽の主要なるもの概ね上の如し、而して此等の山嶽に沿ひ其邊縁をなして丘陵地をなすもの木曾山脈の南端に著るしく、尾張の南方に突出せる知多半島の如きも亦總て第三紀層の低き丘陵より成り、遠江の東部より駿遠の境大井川の下流に至る邊は又一面丘陵地を作り、富士火山脈の北部善光寺平と松本平との間に横はれる一帯の地域も亦所謂犀川沿岸丘陵地なるものをなせり。

平原

平原 本地域の中、山嶽重疊、從て平原の見るべきものは唯、大河の沿岸、其の河口若しくは平低なる海岸の地方に止まり、其最も著るしきものは即ち濃尾平野にして、木曾長良揖斐三川の下流に生ぜる沖積層より成り、土地極めて低平にして其南端伊勢海に濱する所は洲渚長く連なるを見る。夏秋の交豪雨屢襲來して此等の諸川暴かに漲るときは忽ち平原の中に汎濫して洪水の

東海沿岸

災を來すこと尠なしとせず。平原の東部は第四期古層發達して標高稍隆まり  
低き臺地をなして漸次第三紀の丘陵地に連なれり。

海岸平原

東海沿岸の地に於ては三河より遠江に連なり一帯の平原横はるを見る。而  
して此の平原は高低二種に分つを得べく、其の臺地をなせるものは三河の東  
南にある高師原及び天白原あり、遠江にありては天龍川下流の東西に磐田原  
三方原を作り、相良地方には布引原牧野原の横はるあり、低原は更に其麓に  
横はれる沖積層より成り、濱松の市街の如きは恰も此臺地と低原との界に横  
はれり。此の臺地は何れも過去に於ける海岸低地たりし者次第に隆起して今  
日の地形を造りしものなり。彼の三方原磐田原の臺地の如きは要するに天龍  
の巨浸が會て搬出したる砂礫より成り其山間を出て、海岸に堆積せし扇狀地  
に外ならざるなり。爾後汀線次第に下降し天龍川は更に此扇狀地を浸蝕し始  
め更に其外側に新たに扇狀地を造るに至り海岸線次第に前進し此古扇狀地は  
海岸より次第に退却し左岸の臺地は磐田原となり右岸の臺地は三方原となり  
しなり。吾人若し試みに秋葉の山頂に立ち四近の地形を察せんか北方赤石主

盆地

脈の峨々たる高山性の地貌は次第に移りて秋葉附近の低山性の地となり、更  
に遙かに其の南に横はれる三方磐田の臺地が楔狀をなして極めて緩慢なる傾  
斜をなし、過去に於けるベネプレインの址を示し遂に海岸の低原に畢るまで  
山嶽平原の地貌一目瞭然たるものあるを見るべし。駿河に入り其海岸又若干  
の平野を伴ふを認め富士の麓には別に廣大なる裾野の横はれるを見るなり。  
甲斐・信濃飛騨の如き山國に於ても甲府諏訪高山の標式的盆地ありて、面積  
の大小こそ異なれ孰れも山間の平原を造り、又犀川・梓川等に沿へる松本平、  
天龍川に沿へる伊那平、若しくは千曲川に臨める佐久平善光寺平の如き何れ  
も此等の諸流と其の支流との作りし者にして、松本平・伊那平の西部の如きは  
峻急なる飛騨山脈木曾山脈より落つる幾多の溪流が山を離るゝに臨んで何れ  
も廣大なる扇狀地を造り彼此相連なりて數里に亘れる者あり。又此等の外に  
宏大なる火山淺間・立科・八ヶ嶽等の如き其の廣漠なる裾野を曳く者亦少なしと  
せず、而して此等の盆地と云ひ平野と云ひ何れも其の海拔の高距を算ふれば、  
諏訪盆地は八百米に及び、佐久平の如き松本平の如き四五百米の間に出入す

河流

るを見るべく、世人の時に稱して信濃高臺と稱する亦故なきにあらざるなり。  
 河流 中部地方は日本の屋梁なり、衆水四方に輻射し比較的大河をなすもの少なからず、其の日本海斜面にある者は信濃川を最とし、源を甲信の境に發し信濃の東部を貫通し大支流犀川を併せ遂に越後に入る。之に次いで信濃西北の衆水を集めて越後に入る姫川あり、飛驒の溪流は一部は宮川に集り越中に入りて神通川となり、一部は白川となりて又越中に入り射水川となる、一方に於て太平洋の斜面には巨浸甚だ多く木曾川は信濃より出て、飛驒木曾兩山脈の間を注ぎ、美濃に入りて飛驒南半の水を集めて來れる益田川を容れ、濃尾平野を流れて伊勢海に入る。此の他此の平野を流るゝ河流の大なるものには美濃地方の山地より來れる揖斐長良の二流あり、木曾山脈より出て、南流し三河灣に入るものには豊川矢作川あり、天龍川は遠く諏訪湖より發し赤石木曾兩連嶺半面の水を集め初は縦谷をなし後には斜に赤石山系を穿ちて峡谷をなし遂に遠江に出て、海に入る。大井川安倍川は共に赤石山系の東部に成れる縦谷にして富士川は甲府盆地に集れる諸流を併せて駿河灣に入る。

田切

此等の河流を見るに何れも源を高峻の地方に發し比較的急傾斜の地を流れ來るを以て多くは激流奔湍をなし、其舟筏を通ずるは比較的中流以下短距離に過ぎずして、彼得天龍川の如き富士川の如き輕舸一駛急流を下るも之を溯るには幾倍の時日と努力とを要せざるべからざるの憾あり、殊に此等の諸川が一旦山間を出て、平原に出づるや俄に汎濫して幾條の流路を生じ、砂礫を遺して其の幅數料の長さに亘れる廣漠なる礫積を作り、所謂「荒れ川」の特色を呈するを常とす、大井川天龍川の如き實に其の標式たるものなり。又此等の諸流は其走路の地形に應じて複雑せる段丘を伴ふもの多く、千曲川天龍川富士川木曾川の如き其の著大なるものに乏しからず。天龍川の上流伊那平を流るゝに際し其の右岸木曾山脈より來れる支流は深く扇狀地を刻みて河涯の斷崖をなせること屢火山の裾野に於て見るものと等しく、旅客は坦々たる平原を進むに際し屢急に此深壑を上下せざるべからざるの不便あり、伊那地方に於ては斯の如き豁谷に命ずるに「田切」なる稱呼を以てし大田切余田切小田切等の名あり、而して此稱呼は獨り此地方のみならず越後の西部妙高山



湖沼

の裾野にも同一の地形に用ゐらるゝを以て吾人は之を地形學上の術語として使用するの便を認むるものなり。  
湖沼の著るしきは諏訪盆地の中に生ぜる諏訪湖、班尾山下の芙蓉湖、北信に聯珠狀をなせる木崎青木中網の三湖、富士の北麓には熔岩流によりて分たれたる山中河口西精進本栖の諸湖あり、南麓には潟湖たる浮島沼あり、而して遠江の海岸には濱名湖あり、其の南岸の一部嘗て地震の爲めに破壊して海と通し今は海灣の形をなせり。

### 尾張國

總説……三頁。 山 嶽……三頁。 知多半島……三頁。 平 原……三頁。 水 系……三頁。  
木曾川……三頁。 庄内川……三頁。 溝 渠……三頁。 天白川……三頁。 湖 沼……三頁。  
海 岸……三頁。 島 嶼……三頁。

總説

尾張國は本巻地誌區域即ち中部の西南隅にありて、西は伊勢國及び美濃國と界し、北方は全く美濃國に擁せられ、東は三河國に接し、南は總て伊勢海に臨む。東西の幅凡そ四十軒にして國の東南部には知多半島南方に向つて長

山嶽

く伊勢海中に斗出せるを以て、南北の長さは三十軒乃至七十六軒に達し、廣袤約千五百八十平方軒を占め、愛知縣の所管たり。  
國の西半は即ち濃尾平原の一部をなすものにして、海拔十數米に達せざる廣野は遠く亘りて其の間に著るしき高低なく、東半は主に第三紀層及び花崗岩并に古生層等より成れる低き丘陵地にして、國境に連なれる高峰と雖も僅かに五百乃至七百米に過ぎず。従つて國の地形は東方の國境に於て最も高く、其の西徐々に低夷して第三紀層の丘陵地となり、遂に濃尾の大平原となる。是を以て國內垂直的の肢節甚だ少なく、峻嶒嶮峰の如きは全く之れを見るに由なく、地形甚だ單調なり。

國の東北美濃國との境界に連亘せる山脈は花崗岩並びに古生層に屬する粘板岩硬砂岩角岩及び第三紀層に屬する礫岩砂岩凝灰岩等より成り、高距三百乃至五百米を保ちて西北より東南に蜿蜒し、山勢一般に緩慢にして丘陵性を帯び、嵯峨突兀たる趣を欠く。此の山脈の西北の起點に於ては高さ平均三百餘米にして、東南に趨くに從ひ漸く隆くなり、内津村の北方に於て黒平山四

百二十五米)を起し、東南に彌勒山(五百三十二米)を起す。これより東南は山勢再び低くなり、遂に土岐川の溪谷に於ては僅かに七十米を出でざるに至る。これより東南は丘陵又起伏して、東南に至るに従ひ次第に高くなり、遂に尾張美濃三河三國に跨れる三國山となる。三國山は信濃美濃三河等の諸州に跨れる木曾山脈の末端にありて、花崗岩より成り、高さ七百餘米、實に國內第一の高峰にして、其南には同じく花崗岩より成れる猿投山(六百九十五米)あり。これ等の山嶽は緩傾斜をなして次第に西方に低くなり、愛智東春日丹波等諸郡の東半部を占むる丘陵地をなせり。此の丘陵地は主もに第三紀層の礫岩凝灰岩砂岩礫礫浮石粘土等より成り、高距平均百米内外にして、著るしき高低を見ず。其の中稍高く秀てたるは北方にありて、古生層より成れる小富士山(三百二十六米)本宮山(三百五十五米)及び小牧の東方に在りて第三紀層より成れる小牧山等とす。小富士山は又尾張富士と稱し、其の形容大に駿河の富士に類似し、海拔高距は大ならざれども、平野に近く屹立するを以て、山頂の眺望開豁にして、尾三濃信飛諸州の諸山線亂起伏して眸裏に掛まり、その東

知多半島

平原

麓には入鹿池碧を湛へて鑑の如く、風光甚だ佳なり。本宮山は小富士の南に接して起り、小牧山更に其の南方に在りて、曾て長湫の役に徳川家康の據りたる所とす。此の丘陵地をなせる第三紀層は、往々石炭層を挿み、又比較的其の新期に屬する粘土層は、陶磁器の原料として各所に於て採取せられ、つあり。此の丘陵地は遙かに南方に連亘起伏して知多半島を作れり。知多半島は國の東南部に於て南方に斗出し、西は伊勢國と相對して其の間に伊勢海を擁し、東は三河國との間に知多灣(其の北部を衣浦といふ)を抱く。東西の幅凡そ六乃至十軒、南北の長さ約三十二軒を有し、高距百米内外に過ぎざる緩慢なる丘陵地にして、其の大部は層向西北より東南に走り、東北或は西南に傾斜せる砂岩泥板岩礫岩粘土及び浮石層より成る。半島の南端を師崎(一に幡豆崎といふ。三河國渥美半島の伊良湖崎と相對して、三河灣の門口を扼するものにして、巉巖磊嵬海濱に突起し、怒濤之れに激して甚だ壯觀を極む。國の西半部を占むる平原は、遠く美濃國に亘りて、所謂濃尾平原の一部をなす。濃尾平原は東西凡そ三十五軒、南北約四十軒、面積總て千〇五十平方

糶、我が國有數の大平原にして、木曾川長良川及び揖斐川等之れを灌溉し、木曾川以南以東の地は即ち尾張國に屬す。其の廣さ東西二十乃至二十五糶、南北凡そ三十二糶、面積約五百九十餘平方糶に及び、殆んど尾張國全糶の半に達し、其の海拔高距は平均二十米を出でず、土地極めて平坦にして、一望漠々平野遠く連なり、其の間丘阜の眼を遮ざるもの絶えてなし。地は概ね第四紀新層に屬する砂礫粘土等の厚層より成り、地味膏腴にして田園よく開け、木曾川庄内川及び之れ等の支流其の間を緩流し、溝渠縦横に通じ、道路亦四通入達して、灌溉交通の便最も宜し。従つて市邑及び人口の密度著るしく大にして、名古屋の大都市は其の東南に横はり、其の他熱田枇杷島清洲一ノ宮稻置小牧津島蟹江等の名邑各所に散在し、人口の密度は本邦に於て最も大なるものゝ一に居れり。

濃尾平原の有史的變遷に就いては、口碑傳説に存するもの一にして足らずと雖も、概ね全く信を措くに足らず。人或は古昔の記録等により、千有餘年の往時にありては、北は岐阜、西は美濃國赤坂養老より、東方尾張國稻置町

水系

木曾川

瀬戸村に至るまでは、海水灣入したりとの説を唱ふれども、其の根據頗る疑はしく、畢竟するに濃尾平原は木曾川長良川及び揖斐川等の冲積作用によりて形成せられたるものなりと雖も、其の大部の成生は、尙ほ遠き過去にありしものにして、唯、河口附近少許の平地は極めて近代に成りしものなり。

此の他尙ほ境川天白川及び玉野川等の沿岸には少許の平地あり。國の地形概して東北に高く、西南に低きを以て、國內の河川は一般に西南流して平野の間を曲折し、遂に伊勢海に注ぐを常とす。河は一般に流勢緩にして、灌溉交通の便に富む。而して溝渠縦横に其の間を走るを以て、水系稍錯雜の狀を呈せり。

木曾川は國の北西境を劃するものにして、其の水源遠く信飛の山嶽より來り、西南流して美濃國を貫き、尾張國稻置町の東北約六糶の地より、始めて濃尾の國境をなし、西南西流すると約二十二糶にして、美濃國笠松に至る。之れより西南々に轉じて、尙ほ國境を流る、こと凡そ十四糶、尾張國十町野村に於て河流二つに岐れ、一は尾張國內に入り、佐屋川と稱し、南流して津

島町の西を過ぎ、本流は國境を南に流れ、尾張國神明津に於て、北方美濃の地を流る、長良川を容れ、更に尾濃勢三州の境に於て、美濃の揖斐川と相接す。之れより河流は東南に轉じて尾勢の境をなし、古川村に於て先きに分岐せし佐屋川の水を合し、尾張國前ヶ須新田に於て、三分して加路戸川鍋田川及び筏川となり海に注ぐ。國境を流る、こと凡そ六十二軒。其の上流濃信の地にあつては急流奔湍多しと雖も、國境に入り、古生厨の丘陵地を貫きて、濃尾平原の間に出づるに及びては、兩岸開豁にして沃野數十軒に亘り、水勢緩にして舟楫の利、灌溉の便最も大なり。然れども上流地方より齧らし來る土砂は、こゝに來りて堆積するを以て、河床に砂礫洲の發達頗る著るしく、殊に稻置笠松間に於ては最も甚だしく、稻置の西十軒の地に在りては、礫洲の幅二軒餘に及び、河水は網狀をなして其の間を流る。従つて河床年々隆起して氾濫の害亦多く、堤防の修築に巨額の資を要すといふ。又其の末流海に朝する所に於ては、數多の三角洲を作り、我が國河口三角洲中の著るしきものとす。尙ほ其の詳細は美濃國の部に叙せむとす。

庄内川

溝渠

庄内川は上流を土岐川といふ。源を美濃國土岐郡の山間に發し、西南流して尾張國に入り、玉野川或は勝川の稱あり。第三紀層の低き丘陵地を流れて北方より來る内津川大山川等の諸水を容れて後平原に出で、勝川村を過ぎ、名古屋の北二軒の地に於て、東方より來る矢田川を合し、益西南に流れて、名古屋の西北に接せる枇杷島小田井間を通過す。川は之れより南に轉じて、遂に熱田灣に注ぐ。長さ凡そ三十餘軒、其の中國內にあるもの約二十軒とす。其の中流玉川村宇玉野近傍に於ては、奇岩水中に起伏し、奔湍甚だ急激、兩岸の老松偃蹇翠を弄して噴沫と相映じ、山光水色甚だ明媚なりといふ。木曾川と庄内川との流路を連絡する溝渠の重なるものには凡そ二あり。一は稻置町に起り、南走して小牧町を過ぎ、比良村近傍に於て、庄内川より導ける一溝渠新川に連なるものにして、長さ凡そ十八軒あり。一は同じく稻置川の西に起りて西南に赴き、小折町を過ぎ數多の溝渠と連絡し、南方に轉じて清洲市場の二邑間を流れ、其の南に於て新川に合するものなり。其の長さ凡そ二十四軒を有し、幼川或は五條川の稱あり。

天白川

其の他溝渠の著るしきものには、木曾川の下流に於ける日光川及び庄内川より導ける新川堀川等とす。日光川は津島町の北三軒餘の所に於て、木曾川の支流なる佐屋川より岐れ、東南に走りて幾多の小溝と連絡を保ち、西福田村に於て海に入る。長さ凡そ十六軒あり。新川は名古屋の北約四軒の地に於て、庄内川の上流なる玉野川より岐れ、本流と略同じ方向を有して其の西隣を流れ、小田井村を過ぎ、庄内川の河口に於て相合せり。長さ約二十二軒とす。堀川は名古屋の北飯田村に起り、西南に流れて名古屋市に入り、其の西端を南走し、熱田町に於て海に朝す。長さ十軒に過ぎず。

天白川は尾三の境上なる低き丘陵地に發源し、西南に流れ島田村に於て高針川を合し、鳴海町の西を過ぎ、南柴田新田に於て熱田灣に注ぐ。長さ僅に十軒とす。此の他境川は尾三の界をなして西南流し、知多灣に入る小流なり。知多半島は東西に狭く、之れに起伏せる丘陵は畧南北に連なれるを以て、川は概ね東或は西に流れて直ちに海に朝し、何れも細流たるに過ぎず。其の中稍大なるを、半田町に於て知多灣に入る英比川とす。

湖沼

海岸

國內湖沼の大なるものは絶えてなければ、國の東部及び知多半島に蜿蜒起伏せる第三紀層の丘陵には、無數の小池點々散在して、其の數幾十百なるを知らず。これ概ね溪流の源頭三方岡阜に圍まれたる所に於て人工を施し、其の一方を閉塞し、雨水を貯へ、以て灌漑の用に供する爲めに作りたるものなり。其の周圍、小なるものは百米内外にして、大なるものと雖も二軒を出づるは甚稀なり。此の中最も大なるものを入鹿池とす。國の東北隅に在りて丹波郡に屬し、小富士山の東麓に横はる。寛永五年開鑿せるものにして、不規則の形をなし、周圍凡そ十二軒餘あり。三面翠巒を圍らし、一面に堤防を築く。單に灌漑の利大なるのみならず、碧水清く風光甚だ佳なりとす。此の他東春日伊郡の濁池、今池、長池及び愛知郡の牧池、岩王池、勅使池等は稍大なるものとす。

海岸は國の西南に知多半島の大突起ありと雖も、概ね出入少なく、甚だ單調を極めたり。濃尾平原の海に枕む所は木曾川、庄内川、其の他諸流の河口の爲めに多少の出入をなせども、敢て著るしきものにあらず。又境川の海に入る

島嶼

所は海灣細く奥に入れり。而して海濱一般卑濕の地多く、又遠淺の所多し。知多半島は南方に斗出すること凡そ二十軒、西に伊勢灣を擁し、東に知多灣を作れども、其の半島の海岸は頗る平にして灣入に乏しく、多くは沙濱なれど又懸崖をなせる所少なからず。而して半島の先端師崎附近には低き斷崖あり。知多半島の南端、師崎の東南海上約四軒にして一島あり、名づけて篠島といふ。花崗岩より成り、東北より西南に長く、不規則の出入に富み、周圍凡そ六軒、面積約四平方軒を占む。海岸斷崖多く、繫舟の便宜しからず。唯、西に海岸に僅かに小舟を寄すべき所あるのみ。篠島の北凡そ三軒にして又日間賀島あり。東北より西南に長く、周圍凡そ五軒にして、面積凡そ六平方軒を有す。第三紀層に屬する黝灰色の凝灰質泥板岩より成りて岡阜狀をなし、田園稍開けたり。

三河國

三河國

總説……三頁。木曾山脈……三頁。弓張山脈……三頁。南北設樂郡の山嶽……三頁。

總説

鳳來寺山……四頁。神田山……三頁。乳岩山……三頁。御殿山……三頁。鴨山……三頁。平原……三頁。岡崎附近の平原……四頁。豊橋附近の平原……四頁。水系……三頁。矢作川……三頁。豊川……三頁。湖沼……三頁。海岸……三頁。

三河國は尾張の南に位し、北は美濃及び信濃と界し、東は遠江國に接し、南方一帯海に瀕す。其の形多少菱形を呈し、東西凡そ六十五軒、南北亦略之れに等しく廣袤三千三百四十三平方軒を有し、尾張と共に愛知縣に屬す。

國の地勢概して山嶽多く、所謂山地 (Mountain-land) と稱すべきものにして、國の北方には信飛二國に蟠まれる木曾山脈に屬する諸山嶽重疊し、東南には甲信遠の諸州に連亘せる赤石山脈の餘波なる弓張山脈國境をなして東北より西南に連なり、國の東北隅には又此の二山脈の間に挟まりて北設樂南設樂地方の山嶽丘陵起伏せるを以て、國の地形概して東北に高く、西南次第に低下して遂に海に臨めり。

國の北方に連亘せる山嶽は主として花崗岩片麻岩及び雲母片岩等古期の岩石より成り、其餘脈南に延びて次第に低き丘陵をなし、國の中部に廣く蟠まり、其の西縁に沿うて矢作川北より南に流る。弓張山脈は古生層より成り

て、木曾山脈との間に豊川の溪谷を挟み、此の二山脈の間にある北設樂南設樂の諸山は主もに第三紀層より成る。而して概言すれば木曾山脈に属する諸山は多くは傾斜緩にして山頂鈍く、弓張山脈の諸山は之れより稍急峻にして、南北設樂の第三紀層山嶽は更に峭峻を極め、山相各部に於て異なるを以て、各別に之れを述べし。

國の北方及び中部に蜿蜒蟠踞せる山嶽丘陵は即ち信濃國に連亘して本州脊梁の一部をなせる木曾山脈の餘勢にして、信濃の地に在りては純然たる山脈をなし、其の趨勢概ね赤石山脈と並行して、東北より西南に連なり、天龍木曾兩川の間に高峻なる山嶽を作れども、本國內に在るものは甚だしく削磨作用を受けて溪谷縦横に通じ、山脈は幾多の支脈に分れ、或は個々獨立の狀をなして群山の觀を呈せり。之れを構成せる花崗岩片麻岩は甚だしく分解崩壊し、又著るしく浸蝕の作用を蒙り、山嶽多くは峻峻の趣を失ひて鈍圓狀をなし、山頂廣くして往々高原性を呈せる所あり。加ふるに山は甚だ樹木に乏しく、往々禿禿にして滿山赤灰白色をなし、以て他の諸山嶽と異なる特殊の

木曾山脈に属する山嶽

相貌を有するものありて、岡崎附近よりは明かに此の特相を認め得べし。

これ等群山は其の高距一般に信濃のものに比して甚だ小に、最高のもので雖も僅かに千米内外に過ぎず。概して東北に高く西南に趨くに従ひ次第に低くなり、國の中部に於ては五百米内外の丘陵地となり、益々低夷して遂に渥美灣頭に盡く。今其の主要なる巖體を擧ぐれば、國の東北隅に二本塚山千百餘米あり、花崗岩より成り、其の北信濃三河の境上には漆間山千二百六十八米あり。所謂領家片麻岩より成り、實に國內第一の高峯とす。漆間山の西方牧の島嶺九百七十四米を隔て、離山聳え、其の南には上津具村の小盆地海拔六百八十米を挟んで其の東西に白鳥山及び碁盤石山あり。白鳥山は片麻岩及び雲母片岩より成り、高さ凡そ九百米、山頂に直徑約六米許の小池あり。雨水の浸蝕作用によりて生ぜしものにして俗に神池といふ。滿山樹林荆棘深く閉ざして登攀容易ならず。碁盤石山は黒雲母花崗岩及び片麻岩より成り、高さ千百九十九米、附近の諸峯に拙んで聳え、滿山森林茂く山容頗る清秀なり。碁盤石山の南方、南北設樂郡の境には花崗岩より成れる鞍掛山あり。高さ

白鳥山

九百七十五米、北は平山明神山に連なり、東は神田山等に接す。其の西南設樂郡の北境には龍頭山(千〇三十四米)高く聳え、龍頭山の北方北設樂東加茂二郡の界に近く、段戸山(千〇五米)八ッ嶽(千〇六十二米)等蟠まれり。東加茂郡は其の大部花崗岩の山地にして、平野なけれども土地比較的平にして高原性を帯び田園よく開け、驛邑亦多く此の間に散在せり。而して山嶽の稍、高きは西南隅にある炮烙山(六百九十一米)六所山(五百七十五米)及び東北隅にある駒山等なり。

三國山

三河信濃美濃三國の界には三國山あり、濃信の界をなして南走せる山脈の一部にして其の高距大ならず。其の西遠く濃尾三の境にも亦三國山あり、高さ七百餘米、其の西南三尾の界に猿投山(六百九十五米)あり。

木曾山脈に屬する山嶽は國の中部即ち南設樂郡の西南部額田郡及び其の以南に於て益、低くなり、其の中稍、著るしきは南設樂郡新城町の北にある御嶽山(六百三十米)及び郡の西境にある本宮山ホノミヤ又本茂山モトノシロと云ひ高さ七百八十六米)巴山(七百二十米)等とし、尙ほ海岸に近く寶飯郡に宮路山五井山、幡豆郡に三ヶ峯

弓張山脈

(三百二十餘米)茶臼山(二百六十九米)等あり。

弓張山脈は即ち赤石山脈の一部にして國の東南隅に存し、三遠の國境に蜿蜒せるものなり。主として輝岩角岩輝綠凝灰岩砂岩石灰岩等より成り、其の層向概ね東北東より西南西に向ひ、山脈の趨勢も畧、之れと一致して東北より西南に走れり。山勢一般に高峻ならずして、其の海拔高距も平均僅かに五百米内外に過ぎざれど、木曾山脈の諸山に比すれば傾斜稍、急にして、山頂亦彼の如く鈍きものなく、溪谷好く發達して山側平滑ならず。加ふるに乾濕其の宜しきを得て、樹木荆棘相繁茂し、滿山蔚然たるを以て容易に彼此の別をなすことを得。本山脈中最も高さものは弓張山にして八名郡大野村の東方に聳え、高さ六百九十三米に達し、其の南に隣して城の山(六百七十六米)及び大森山(五百〇一米)あり。大森山の西南には更に淺間山(四百八十二米)及び富森山(五百七十一米)等を起す。富森山の西方には宇利嶺(百四十七米)、北麓には狩宿嶺(三百三十三米)あり。一は遠江國三ヶ日村一は同國氣賀村より共に三河國豊川河岸の新城に通ずるものとす。富森山より西南は山嶽次第に低くなり、本坂

弓張山



石巻山

嶺三百四十四米長彦嶺三百十九米を經、神石山(三百二十八米)に於て遂に第四紀層の平原に盡く。此の主山脈より岐れて豊川の岸邊に起れる小丘に船着山(三百九十八米)風切山(三百八十六米)及び石巻山(三百十九米)等あり。石巻山は山頂の眺望頗る開豁にして濱名湖の明鏡を瞰下し、又渥美灣及び灣口を扼せる伊良湖崎及び灣内に散點せる姫島大島小島佐久島等悉く双眸の中に萃まり、加ふるに山腹に温泉あるを以て夏季は遊客多しといふ。又北麓(北麓)の近傍に石灰洞窟數個あり、俗にこれを蛇穴といふ。又國の東南隅に起りて西南西に斗出する渥美半島には弓張山脈の餘波にして古生層より成る藏王山(二百三十六米)衣笠山(二百六十米)日暮山(百七十九米)大山(三百十五米)等第四紀層の臺地中に島狀をなして隆起せり。

南北設樂郡の山嶽

南北設樂郡に起伏せる第三紀層の山嶽丘陵は木曾山脈弓張山脈の間に介せる盆地に沈積して成れるものにして、主もに流紋岩質凝灰岩砂岩泥板岩凝灰質泥板岩及び礫岩等より成り、又此れ等を貫きて噴出せる諸種の火山岩あり。地勢概して北方に高く南方稍低くなり、其の海拔高距は大ならざれども、

風來寺山

山勢一般に急峻にして、山側には溪谷少なく、殊に火山岩より成れる風來寺山(明神山)神田明神山の如きは最も急傾斜をなして奇抜なる山相を呈し、往々數十乃至數百米の絶壁をなして聳立せり。これ岩石極めて脆弱にして崩壊し易きに因るなり。然れども山嶽重疊の間にありて尙ほ河畔に廣さ二三軒の小盆地をなせる津具田口巢山神田川合及び本郷の諸村の如きあり。今稍著るしき山嶽に就いて記述すべし。

風來寺山は又桐生山といふ。第三紀層の丘陵中に起り、其の最高峯を瑠璃峯と稱し、海拔六百八十四米。全山流紋岩玻璃及び流紋岩より成り、山麓に泥板岩泥灰岩の露出あり。山勢急峻にして奇岩錯峙、往々數十米の絶壁をなせる所ありて山巔亦參差突兀たりと雖も遠くより之れを望めば多少截頭圓錐形をなし、水成岩より成れるものと自ら其の山相を異にせり。山の南腹に風來寺(第二圖甲)の古刹あるを以て其の名普ねく世に知られ、又た三河隨一の名山と稱せらる。其の藥師堂の南には三個の大岩塊聳え、中央にあるを尼の行者といひ、こゝより一溪谷を隔て、其の東に白色の大峭壁あり、峨々として

其の高さ百餘米、之れを白岩といふ。又其の西南麓大野町よりの登路に當りて行者越の嶮あり。流紋岩玻璃の絶壁にして高さ八十米に達す。山は岩石峨々たりと雖も頗る草木の繁茂に適し、杉檜等の巨木鬱然として森林をなし、盛んに材木を出し、又檜より線香を製造せり。風來寺山の西側に煙崑山といふ小丘あり、高距凡そ三百米、流紋岩及び凝灰岩より成り奇岩峭立、風景甚だ奇抜なり。

神田山

神田山は風來寺山の東北八軒の所に聳え、北設樂郡に屬し、山頂は稍平坦にして高さ千二百米に達し、此の附近の最高峯たり。山體は概ね凝灰岩及び砂岩より成れりと雖も、山頂には流紋岩の露頭あるもの、如く數十米の絶壁をなせり。全山樹木好く茂り四時蒼々たり。山の東南には之れに近く神田明神山あり。又北に接して月山の小丘あり。

乳岩山

神田明神山の南、川合村の北二軒にして乳岩山(第三圖乙)と稱する一小丘あり。高さ約四百四十五米、凝灰岩及び集塊凝灰岩より成り、山頂には凝灰岩の崩壊によりて生ぜる洞穴及び石門あり。洞穴は半圓塔狀をなし、高さ二十

御殿山

米幅十五米にして、天井よりは鐘乳石の垂下せるを見る。石門は洞穴の北に在りて高さ十五米幅十米、頗る奇觀とす。御殿山は神田山の東北に在りて、月山を挟み宇月村の北方に位す。山形截頭圓錐狀をなし、其の高さ約八百四十米。主もに流紋岩より成り、樹木鬱蒼たり。

鴨山

御殿山の西方には又流紋岩より成れる峨々たる二峯東西に相並びて聳立せるあり。東にあるを平山明神山といひ、西にあるを鹿島山と稱す。甲は其の高さ千〇七十米に達し、乙は之れより低く僅かに八百餘米に過ぎず。平山明神山の北約五軒、上津具の南に方りて又鴨山と稱する一峯あり。海拔八百八十九米にして其の基底は雲母片岩片麻岩より成れりと雖も、山頂は泥板岩凝灰岩等より成る。全山森林よく繁茂し、其の北麓には片麻岩の懸崖を奔下せる一瀑布あり。之れを水無瀬の瀑といふ。

平原  
岡崎附近の平

國內の平原は之れを分ちて岡崎及び豊橋附近の平原となすを得べし。岡崎附近の平原は碧海幡豆及び額田の諸郡に跨り、矢作川及び其の支流によりて

灌漑せられ、東西凡そ十五軒南北約三十軒にして面積四百九十五平方軒を占む。第四紀層より成り、土地甚だ低平にして海拔高距平均十數米に過ぎず。東は花崗岩片麻岩の丘陵に接し、北及び西は第三紀層の低き丘陵に連なり、一般に東北に高く西南次第に緩斜して遂に知多灣に臨めり。田園よく開け國中最も重要な生産地にして人口の密度亦大に、岡崎西尾刈谷知立舉母等の郡邑此の中に横はれり。此の平原の南方二川山原間地方は第四紀層の臺地にして、北方には緩傾斜をなせども南方は急斜して海に臨み、海岸には懸崖をなせる所多し。

豊橋附近の平原

豊橋附近の平原は豊川及び其の他の諸細流の灌漑する所にして、寶飯八名渥美等の諸郡に跨り、北及び東に山を負ひ南西海に瀕す。海拔高距平均僅かに十數米にして廣袤約二百八十平方軒を有す。第四紀層より成りて、其の新層に屬する部は地味豊沃にして農業上須要の地を占むれども、本宮山麓より豊川驛に亘れる豊川原及び豊橋町の南方に横はれる高師原の如き第四紀古層の塩礫砂礫等より成れる地は多くは荒蕪にして、唯、矮松雜樹の成育せるに過

水系

矢作川

ぎず。然れども由來山嶽に富みて平地少なき三河國にありては、此の地亦岡崎附近の平原に次ぎて重要な地位を占め、豊橋町は豊川に沿うて平原の中央に横はり、其の他御油新城等の諸名邑其の北隅に在り。已に述べたるが如く國の地形概して東北に高く西南に低きを以て、河流の方向も亦之れと一致して多くは源を東北の山中に發し、西南流して三河灣に注げり。而して其の中大なるを矢作川豊川の二流とす。

矢作川(矢矧川)は源を木曾山脈中の一峰にして濃信の國境にある阿賀瀧山に發し、南流して美濃三河二國の境に來り、こゝに東方離山附近に發源する一支流を合す。之れより川は國境を劃し山嶽の間を紆回曲折して西方に走り、宇有馬附近より西南に轉じ、東西加茂郡の界をなし、宇西廣瀬附近に於て始めて第四紀層の平地に出づ。此處に至るまで流域は全く木曾山脈に屬する花崗岩の山地にして、川は群山の間を盤旋し、兩岸に殆んど平地を貽さず。之れより以下兩岸少しく開け、丘陵巒嶺稍遠く、舉母町を過ぎ、之れより南に折れ、下渡合に於て東加茂郡の山地より來れる足助川を容るゝに及びて河流

矢作川の支流

豊川

稍廣くなり、兩岸の平地亦甚だ廣濶となる。之れより川は益、南して岡崎矢作の間を過ぎ、其の南に於て東方本宮山近傍より來る大平川を合せ、西南に轉じ、岡崎の西南約十軒の地に於て分れて二流となる。其の南流して上横須賀を過ぎ海に注ぐものは本流にして之れを古矢作川と稱し、西南流して海に入るものは人為の開鑿に係り、單に之れを矢作川と稱す。川の全長凡そ八十五軒、其の下流岡崎附近の平原に出づるに及んでは漕漑舟楫の便少なからず。

矢作川の支流中其の稍大なるものを足助川及び大平川とす。足助川は東加茂郡内花崗岩の山地に於ける諸溪流を合し、足助を過ぎ、西南に流走し、下渡合に於て本流に合するものにして、長さ僅かに二十軒とす。大平川は南設樂額田二郡の界に連亘せる本宮山、巴山等に發源し、額田郡の略中央を貫きて片麻岩地を西流すること約二十四軒。岡崎の南方に於て矢作川に入る。大平川は矢作川豊川と共に三河に於ける大河にして、國名亦之れに基づけるものなりといふ。されど大平川は他の二川に比して甚だ小なり。

豊川は木曾山脈に屬する山嶽と弓張山脈との間を西南に流走するものにして、

て、上流を三輪川といひ、源を北設樂郡神田明神山の南麓に發し、諸溪流を合し、南流して川合を過ぎ、之れより西南に轉じ大野町を過ぎ、其の西南約五軒の地長篠に於て、北方碁盤石山に發源して片麻岩花崗岩及び第三紀層の山間を南流し來れる瀧川を合す。之れより兩岸稍開け第四紀層の平地を西南に流れ、新城町の南を過ぎ、吉祥山本宮山の間を過ぎて後南方に轉じ豊橋町に出で、之れより西に折れ、遂に渥美灣に注ぐ。河口に小砂洲あり。河流の長さ凡そ五十軒、大野以下舟楫の便あり。其の上流南北設樂郡の丘陵地にありては、兩岸概ね硬軟種々の凝灰岩及び流紋岩より成り、河岸屢數十乃至百米の峭壁をなし、或は川床數米の階段狀をなして水流は爲めに幅廣き瀑布をなし、甚だ壯觀を呈す。湯谷の大瀧の如き即ち是れなり。又變朽富士岩流紋岩等の岩脈河中に突起すること井代の馬の脊岩(流紋岩)の如きあり。又長篠新城間に於ては河岸段丘著るしく發達し、乘本長篠日吉新城等の諸邑は此の上にあるものとす。新城町附近より以下は兩岸概ね平地にして流勢稍緩なり。

此の他國の西境には境川あり。三尾の境に起伏せる第三紀層の丘陵地に發

湖沼

源し、西南流し刈谷町に於て知多灣に注ぐ。其の東には逢妻川あり。尚ほ御油町の近傍を流るゝ御所川、豊橋町の南方を西流する梅田川等あれども、何れも細流にして記するに足らず。

國內湖沼の大なるもの絶えてなく、唯岡崎附近の平原の北方に低く横はれる第三紀層の丘陵地内には數多の小池沼あり。多くは灌漑に供する爲め人工を加へて作りたるものにして、何れも周圍二軒に過ぎず。又渥美半島の畧中央に蘆池と稱する周圍僅かに二軒半の小池あり。

海岸

海岸は稍出入に富み、國の東南隅より西南西に突出せる渥美半島は尾張の知多半島と相對して其の間に三河灣を擁し、灣は更に細く北方に凹入せる知多灣及び東方に彎入せる渥美灣の二區に分る。知多灣に臨める海岸は概ね低平なる沙濱にして出入少なし。渥美灣の東岸は即ち豊橋附近の平原にして甚だ平坦なれども、灣の北方には丘陵近く海岸に起伏し、灣の南方を擁する知多半島の南岸太平洋に面せる所は出入全くなく、海岸は極めて滑かにして殆んど北六十五度東に走れる一線を劃すれど、斷崖をなせる所多く、平坦の砂

遠江國

總説

濱は僅かに西方の小部分に過ぎず。然れども半島の北岸渥美灣に瀕せる所は比較的出入に富み、二小灣入あり。一は田原町の東北にあるものにして、灣口に砂嘴及び數多の洲渚を有し、一は昌村の北に在りて砂嘴東西より起り灣口を扼す。渥美半島の先端には一帶の砂濱東北より西南々に連なること凡そ十軒、其の西南々の盡頭を伊良湖岬といふ。風光頗る明媚にして、又傍に三石と稱する巖崖あり。波浪之れに激して白沫を飛ばし、舟人の甚だしく危険とする所なり。

遠江國

總説 四頁。山嶽…三頁。赤石山脈…三頁。弓張山脈…三頁。其の他の山嶽…三頁。  
平原…三頁。水系…三頁。天龍川…三頁。大井川…三頁。太田川…三頁。  
郡田川…三頁。馬籠川…三頁。濱名湖…三頁。海岸…三頁。

遠江國は三河の東に位し、北は信濃國に接し、東は赤石山脈の一部と大井川とによりて駿河國と界し、南方は一帶太平洋に臨む。南北の長さ凡そ八十軒にして、東西の幅は北方に於て甚だ狭く僅かに八軒に過ぎざれども、南方

に至るに従ひ次第に廣くなり、最も廣き所は七十五料に達し、面積約二千八百八十四平方料を占め静岡縣に屬せり。

地勢一般に山嶽丘陵多く、殊に國の北部に於ては赤石山脈に屬する諸山連亘して最も高峻を極め、其の餘脈は更に西南に延びて所謂弓張山脈となり、大に峻嶮の度を減じて三河との國境に連なれり。赤石山脈の南方には所謂三倉層及び其の他の第三紀層より成れる山巒起伏重疊して國の東南部を領し、南方に至るに従ひ次第に低くなり、緩慢なる丘陵地となり遂に平坦なる臺地となり低原となる。かくの如く國の地形北に高くして南に低きを以て、河流も亦此の方向に従ひ南走して太平洋に朝宗せり。

山嶽  
赤石山脈

赤石山脈は地質構造上日本南緯の外帯に屬するものにして、西は天龍川の水源より其の中流なる中部村屈曲點に至るまでの一線と豊川溪谷とより成る分界線より東は富士川釜無川及び宮川等を連ぬる一線間に重疊排列せる山嶽の總稱にして、其の主脈は略東北々より西南々に走り、甲信駿遠の諸州に連亘せり。山勢一般に峻嶮雄大にして信濃の地に在りては最も高く、遠江國に

入りて尙ほ海拔高距は二千乃至二千五百米に達し、本邦中稀に見る高峻なる地方とす。而して其の餘脈は遙かに西南に延び、三河渥美半島に於ては丘陵状となり、遂に海に没せり。之を構成する岩石は晶質剝岩片麻岩の外に主として古生層なる粘板岩砂岩輝綠凝灰岩角岩にして何れも舊期の成生に係り、これ等岩層の層向は略山脈の方向と一致して東北々より西南々に走り、南方に至るに従ひ次第に東北—西南に偏し、所々に背斜向斜の大褶曲をなせり。此の山脈中最も高峻なるものは駿河の西北隅にある白峯山中の一峯北嶽三千百五十一米にして、之れより山脈南方に延び駿信の界にある赤石山(三千〇九十三米)を経て、駿信遠三國の境に高さ二千八百八十米の一峯を起す。之れより主脈は西南々に走りて本國內に入り、峻嶮嶮峯相接して聳起し、天龍大井の二大川を分水し、國の北部は全く其の領する所となり、更に西南に延びて稍低夷し、天龍川中流の屈折部より西南は弓張山脈と稱せらる。今其の赤石山脈に屬する高峯を擧げんに、信遠の境上には海拔二千米内外の連嶺東北より西南に走りて池口嶺(二千二百四十米)梶谷嶺(二千二百二十一米)黒倉山(千五百

九十米等を起し、黒倉山の西には花崗岩より成れる熊伏山(千七百九十三米)を越え、兩者の間に北方信濃の和田より南方遠江の水窪(ミヅカ)に通ずる青崩嶺(千百十五米)あり。之れより連峰尙ほ西南に延びて天龍川の岸池の平嶺(八百十二米)附近に及べり。これ即ち天龍川と其の支流なる水窪川との間に連なれるものにして所謂青崩山脈と稱せらる。此の東南には水窪川の溪谷を隔て畧之れと並行して東北々より西南々に連なり、水窪川と氣田川との分水界をなせる所謂山住山脈といふものあり。北は榛原周智二郡の境に近く蟠踞せる高峯奥黒法師嶽(二千四百八十八米)前黒法師嶽(二千〇十一米)に走り、西南に延びて次第に低く三森山(千三百米)山住山(千二百米)となり、之れより西南々に轉じ、山住嶺(千四百四十四米)を経て不動山(千三百〇七米)龍頭山等を起し、益々低夷して遂に秋葉山(八百六十六米)光明山(四百五十七米)に盡く。秋葉山は天龍川氣田川の會點に近く起り、山甚だ高からずと雖も、有名なる秋葉神社山上に鎮坐せるを以て其の名殊に著はる。

奥黒法師嶽よりは又一連の山峯南北に蜿蜒して氣田川及び大井川の分水界

をなせるありて、北は所謂青崩山脈の梶谷嶽に連なりて平均二千米内外の高距を保ち、南は次第に低くなりて岩嶽千六百四十三米を起し、愈々高峻の度を減じ、秋葉嶺を経て遂に所謂三倉層より成れる山嶽に連なれり。

奥黒法師嶽の東方には大井川の支流なるスマタ川の溪谷を隔て、南北に走れる一連山あり。北方赤石山より來り、駿遠の國境をなして正南に走れるものにして、大井川の上流なる田代川及びスマタ川の二縦谷各、其の東西を限れり。海拔高距は二千五百米内外に達し、山勢頗る峻峻にして恰も屏障を築けるが如く、奇峯削立して頗る雄渾の光景を呈せり。而して此の中稍著るしき峯頭を大無間山(二千三百三十一米)及び遠駿信の境にある一峯(二千八百八十米)とす。

赤石山脈の天龍川屈折部より西南に蜿蜒せるものは特に弓張山脈と稱せらる。

弓張山脈は赤石山脈の西南端をなすものにして、山脈の趨勢少しく主脈と異なり、概して東北より西南に走りて三遠の國境をなし、濱名湖の西岸に及

び、其の餘脈は斷續して三河の渥美半島に延けるものなり。之れを天龍川東北の赤石山脈に比すれば山勢著るしく峻峻の度を減じて高山性を失ひ、北方に於ける最高峯と雖も僅かに千三百米許にして、西南に赴くに従ひ次第に減じて六七百米となり、終に其の終端に於ては三百餘米の小丘となれり。地勢一般に丘陵性を帯び峨々たる峻峯をなせるもの少なく、其の北部は三波川層に屬する綠泥剝岩及び石英千枚岩等より成り、南部は古生層に屬する種々の岩石より構成せられたり。この山脈中の最高峯は即ち其の北端にありて天龍川畔に聳立する平澤山(千三百〇七米)にして、其の西南には之れに次げる白倉山(千〇四十五米)あり。共に何れも品質剝岩より成れり。之れより西南に向いて國境に連なれる諸山嶽に就いては已に三河の部に於て述べし如く引佐郡の西北境にある弓張山(六百〇三米)、城の山(六百七十六米)及び大森山(五百〇一米)等を稍、高きものとす。大森山の南には淺間山(四百八十二米)ありて、其の西南狩宿嶺(三百三十三米)を隔て、富幕山(五百七十一米)を起せり。之れ等の諸山は何れも緩慢なる小丘に過ぎざれども、其の山麓は高さ凡そ五十米の急斜せる側

面をなすを常とし、山地の終縁なるが如き觀あり。之れより以南は山勢益低く、富幕山の西方にある宇利嶺(百四十七米)を経て後は山脈の走向西南に轉じ、本坂嶺(三百四十四米)長彦嶺(三百十九米)等を過ぎて後遂に神石山(三百二十八米)に終れり。

弓張山脈の主脈より岐れ豊田引佐二郡地方に於て西北より東南に蜿蜒せる丘陵は蓋し浸蝕作用によりて生じたる所謂山枷(Talweg)といふものにして、其の中稍、高きを豊田引佐二郡界にある觀音山(五百四十三米)、氣賀町の北方にある龍ヶ峯(三百三十一米)三嶽(四百四十米)等とす。

赤石山脈の南方にありて所謂三倉層及び其の他の第三紀層に屬する砂岩泥板岩等より成れる山嶽丘陵は國の東南部に連亘起伏して其の大部を占め、地層の層向は概して東北―西南若しくは東西を指せども、山嶽の趨勢には一定の律なきもの、如く雜然として重疊群起せるの觀あり。而して北方に於ては稍、高峻にして、高さ八百米以上に達するものあれども、南方に至るに従ひ次第に陵夷して二三百米の緩慢なる丘陵となり、遂に第四紀層の丘陵臺地とな

三倉層及び其  
の他の第三紀  
層の山嶽



れり。この地方は平野全くなければ、土地よく開け田園乏しからずして驛邑亦少なからず。其の山嶽中稍、高きものを春野山(八百四十米)及び大日山(八百五十米)とし、共に周智榛原二郡の境上にあり。春野山の西南々には菰張山(五百二十米)本宮山(四百九十四米)等太田川に接して聳え、山は何れも小なれど傾斜急にして險なり。大日山よりは山嶽榛原郡の西境を東南々に連亘して多少脈状をなし、以て大井川太田川の分水界をなせるものありて、八高山(八百七十米)粟ヶ嶽(五百三十米)等を稍、高きものとす。又八高山に接して其の西南に帶山(六百三十二米)東南に大代山(六百三十二米)等あり。

掛川金谷間の街道以南は高距愈減じ、地は第三紀層及び第四紀層より成りて、百米内外の極めて緩慢なる丘陵若しくは臺地となれり。此の中稍、高きを高穂山(二百三十九米)とし、又相良町の西北約三軒の所には第三紀の石灰岩より成りて急傾斜をなせる男神山女神山の二小丘あり。満山樹木殆んどなく白皚々として頗る奇景をなせり。臺地は此の地方に於て發達著るしく、多少輻射状をなせる河川の間に挟まりて頂點を北方に有せる三角形をなし、其の縁

平原

水系

端は峭壁をなすを常とす。此の臺地の著るしきものは北方金谷附近より南方高橋の近傍に至る布引原(又金谷原)にして、主もに第四紀古層に屬する礫岩壩母粘土等より成り、南北の長さ約十六軒、東西の幅凡そ二分の一乃至四軒に達せり。

國內の平原は殆んど天龍川下流の兩岸に開けるものゝみにして、天龍川太田川馬籠川及び都田川等に灌溉せられ、主もに第四紀の新古兩層より成りて東西凡そ三十六軒、南北約十五乃至二十軒、廣袤六百二十五平方軒を占む。國內に於て田園最もよく開け、人口亦稠密なる地方にして、濱松見附袋井掛川森町氣賀等の名邑此の中に在り。然れども第四紀古層に屬する壩母砂礫等より成れる低き臺地は屢、不毛の地に屬し、唯、矮松の叢生するに過ぎざることあり。都田川馬籠川間にある三方ヶ原及び天龍川太田川間に挟まりて見附町の北方に横はれる磐田原の如き即ち是れなり。其の他大井川下流の沿岸に僅少の平地あれども特に記するに足らず。

國の地形概して北方に高く南方に低きを以て城内の諸川多くは源を北方の

## 天龍川

山間に發し、南走して遠江洋若しくは駿河灣に注げり。而して其の最も大なるを天龍川とし、國の中央より少しく西に偏せる地を直南に走り、之れに次ぐを駿遠の國境を流るゝ大井川とす。其の他太田川都田川馬籠川等あり。

天龍川(第十一圖甲)は源を遠く信濃の諏訪湖に發し、赤石山脈の北部なる釜無山脈と木曾山脈との間を南流して南信地方に谷盆地(Thalbecken)を作り、飯田町の南方數軒の所に於て赤石山脈に衝突し、此の山脈を斜に貫き、谷底狭くなりて所謂天龍川の峡谷を作る、天龍峡谷は飯田町の南八軒許なる下久堅附近に始まり、信濃に屬する花崗岩片麻岩領家品質剝岩等の地を流れ、三遠信の國境に近く彎ゆる八嶽山の近傍より始めて三遠の界に入る。こゝに至るまで河流の長さ凡そ百軒にして峡谷の長さは約二十三軒とす。之れより尙ほ峡谷をなして花崗岩片麻岩等の峻嶒峻峯の間を縫ひ、紆餘曲折して國境を南に走ること約十八軒、これより全く遠江國に入り、中部に於て西北三河國北設樂郡の山間より來る大入川を合し、一大屈折をなし、品質剝岩の山地を穿ちて東に走り、西渡に於て北方青崩嶺近傍に發源し、領家村を過ぎ本流と並行

なる縦谷をなし、南流せる水窪川を容れ、これより又南に流る。天龍峡谷の最も急流をなせるは遠江に入りてより中部驛に至るの間にして、西渡瀬尻附近も亦甚だしく、川は山嶽相壁まれる間を奔流して其の幅僅かに六十乃至百米に及ばず。而して水量多きを以て激流矢の如く、兩岸の絶壁削立して高さ數十乃至數百米に達し、鬱々たる森林之れが髪をなし、奔湍白浪其の岸を囓むて行く。若し扁舟に賃して此の急流を下れば、水聲は滔々として耳を聳し、白沫は飛んで全く衣袂を沾ふすべく、兩崖の怪岩奇壁相踵いて應接に遑なく、豪宕の趣と凄壯の觀とを兼ね其の勝取て木曾の峽流に譲らずとす。本國內に入りて峽谷をなすこと凡そ三十餘軒、赤石山脈と弓張山脈との間を流れ、平澤山白倉山等の東麓を過ぎ、秋葉山の西麓千草に於て、東北より來る氣多川を合す、之れより兩岸の巒嵒稍低くなり、川は益々南流し二俣驛(第三圖乙)に於て始めて第四紀層の平原に出づ。こゝに至るまでは兩岸山嶽重疊して平地殆んどなく、川の方向は概して正南を指せども屈折紆曲甚だ多く、川幅も著るしく大ならずして水勢甚だ急なり。従つて兩岸には村落甚だ少なく、僅に山腹

## 大井川

に於て數戸の人家點々たるを見るのみ。然れども二俣以下は全く平原の間を流れ、川幅著るしく廣くなり、砂礫洲甚だ多く水は網狀をなして其の間を流れ、全く其の面目を一變せり。二俣より南走すると約二十五軒、掛塚港の南方に於て海に入る。河口に小砂洲あり。掛塚の北數軒の所に於ては東海道鐵道の此の川を横ざるありてこゝに一大鐵橋の架せるを見る。河流の全長凡そ百八十軒、其の中本國内に屬するもの約六十一軒とす。而して信濃國飯田町の南より河口に至る百餘軒の間急流を奔下する舟楫の便あり。

大井川は遠駿の國境を流る、大河にして、其の上流は駿河國にあり田代川と稱せられ、源を甲斐駿河の界なる白峯山附近に發し、赤石山脈と白峯山脈との間に縱谷をなし、駿河國を流るゝこと約六十軒にして、大無間山の南方にある字長島附近より駿遠の界に入り、古生層より成る山嶽の間を紆曲して西方に流る。かくて長島の西南約八軒なる字澤間近傍に於てスマタ川を併容せり。スマタ川は北方信遠の境上にある池口嶽(二千二百四十米)附近に發源して、奥黒法師嶽前黒法師嶽等の東麓及び大無間山の西麓の諸水を併せ縱谷を

## 太田川

なして南流するものなり。本流はスマタ川を容れて後西南々に轉し、下長尾附近より更に南方に走る。之れより以下は三倉層に屬する泥板岩砂岩の山地を流れ、屈曲盤旋頗る甚だしく、殊に字久能臨及び神尾附近に於て其の著るしきを見る。神尾以下川は東南に折れ、島田金谷二驛の間を過ぎ、川尻近傍に於て駿河灣に入る。神尾より以上の地にありては兩岸山巒重疊して平地殆んどなければども、之れより以下は兩岸稍開け、川幅著るしく廣くなり、遠駿に跨りて第四紀層より成れる扇狀の平野を貫流せり。河流の全長凡そ百三十軒、其の中國境を流るゝ凡そ七十軒とす。河身礫洲甚だ多く殊に島田金谷以下は其の著るしきものなり。沿岸平地少く水勢亦急なるを以て、灌漑の便水運の利に乏しく、天龍川に於けるが如き急流を下る扁舟の便もなし。島田金谷より以下は曾て河筋の變遷屢ありたりといふ。東海道鐵道は島田金谷間に於て此の川を横ぎり、ここに一大鐵橋の架せるあり。

太田川は天龍川の東に在り略之れと並行して正南に流るゝものにして、其の上流を三倉川といふ。源を周智郡の春野山附近に發し、所謂三倉層に屬す

る泥板岩及砂岩の山地を流れ、菰張山の西麓を繞り、三倉層の名の因つて來りたる三倉村を過ぎ、本宮山の東麓を南走し、森町に至る。之れより川は平野の間に出て、數多の小支流と合し、袋井見附の間を過ぎ、字八幡の近傍に於て東方の丘陵地より來れるハラノヤ川を合し、福田町の東南に於て海に入る。長さ凡そ三十四軒を有し、灌漑の利少なからず。

都田川

都田川は上流を久留米木川といふ。源を三遠の國界なる弓張山脈中の一峯弓張山に發し、古生層より成れる丘陵の間を東南に流れ、久留米木村を過ぎ、觀音新田の東方に於て南に轉じて平野の間に出て、再び西南西に折れて萬城寺山(二百六十四米)と三方ヶ原との間を流れ、氣賀町を過ぎて濱名湖に注ぐ。長さ凡そ二十五軒あり。其の支流は何れも西方の丘陵地より來るものにして、神宮寺川伊平川(伊平川)獺淵川(獺淵川)名川等あり。

馬籠川

馬籠川は源を三ヶ方原の東北にある丘陵地に發し、天龍川と都田川との間にある第四紀層平野を南流し、三方ヶ原の東縁を過ぎ、濱松天神町間を貫きて後字江島に於て海に注ぐ。長さ凡そ十八軒あり。

湖沼

濱名湖

此の他國の東南隅にある臺地には國安川新野川比木川及び勝間田川等あり。何れも細流たるに過ぎずと雖も灌漑の利を與ふること甚だ大なり。

國內湖沼の大なるものは唯、濱名湖あるに過ぎず。

濱名湖は國の西南隅にあり(第四圖)。東西凡そ七軒、南北十二軒に達し、廣袤大約八十九平方軒を占む。湖岸屈曲頗る多く、幾多の小彎入をなし、其の西北三ヶ日驛近傍に瀝狀をなして凹入せるを特に猪鼻湖と稱し、東北氣賀町に向つて彎入せるものに引佐細江及び寒山寺浦等の名あり。湖岸の地は氣賀三ヶ日近傍に於て甚だ平坦なれども、其の他の所に於ては峭壁をなせる所多く、殊に東岸には三方ヶ原臺地の末端陡崖をなして湖水に臨み、第四紀層の好露出を示せり。是れ此地方には常に西風多きを以て、之れに因りて生ずる波浪の浸蝕作用に基づくと云ふものあり。湖上頗る風景に富み、其の明媚なる琵琶湖と並び稱せらる。湖口は之れを今切といひ幅凡そ三百米許、直ちに外洋に通ず。蓋し此の湖もと猪牙湖と稱せられ、往時は外海と隔絶し、一河によりて海に通ぜしものなれども、明應七年八月二十五日及び永正七年八月二十

七日等數度の海嘯の爲めに海岸崩壊して、遂に今日の狀を呈するに至りしなり。今は東海道の鐵道此の近傍を過ぎ、東は舞坂より西は新居に至る凡そ四軒の間鐵橋を以て今切を横斷せり。湖中多く海苔蛤を産す。

濱名湖の東、濱松町の西方に二小湖あり。北に在るを佐鳴湖といひ、南にあるを高塚池と稱す。一は東北より西南に長く、一は東西に長くして何れも周回四軒許とす。又御前崎の半島狀をなせる所にして相良町の西南約八軒の地に佐倉池といふ一小池あり。周回二軒に過ぎず。

海岸は極めて平滑にして變化に乏しく概ね砂濱の地なり。海岸線は天龍川口及び御前崎によりて三弧線に分つを得べく、天龍川口以西及び天龍川口御前崎間は略東西に走り、御前崎以東は急に變じて東北々の方に走れり。御前崎は國の東南隅に於て西北より東南に向ひ突出せる長岬にして、東方伊豆の石廊崎と相對して其の間に駿河灣を擁せり。

駿河國

海岸

駿河國

- 總 説……六頁。
- 山 嶽……六頁。
- 赤石山脈……六頁。
- 白峯山脈……六頁。
- 岩淵近傍乳房山……六頁。
- 毛無山脈……六頁。
- 富士山……六頁。
- 總 説……六頁。
- 富士火口……七頁。
- 火口壁……七頁。
- 火口棚……七頁。
- 小内院……七頁。
- 寶永爆裂火口……七頁。
- 彌 野……七頁。
- 輻射谷……七頁。
- 側火山……七頁。
- 熔岩隧道……七頁。
- 富士火山の地質……七頁。
- 愛鷹山……七頁。
- 火 口……七頁。
- 足柄山脈……七頁。
- 平 原……七頁。
- 水 系……七頁。
- 田代川……七頁。
- 安倍川……七頁。
- 瀬戸川……七頁。
- 富士川……七頁。
- 四井川……七頁。
- 黄瀬川……七頁。
- 須 川……七頁。
- 湖 沼……七頁。

總説

遠江國の東に隣れるは即ち駿河國にして、東は相模伊豆に接し、北は甲斐國と界し、南方一帶駿河灣に臨む。東西の長さ約五十五軒、南北凡そ二十乃至六十餘軒に達し、廣袤凡そ三千百六十六平方軒を占め、静岡縣に屬す。地勢一般に山嶽丘陵に富み、平衍の地は僅かに海濱の小區域に過ぎず。國の地貌は東西兩部に於て著るしく異なり、西半部即ち富士川以西にありては、幾多の山脈相接して北より南に並趨し、大井川オホイ川・糠川ヌカ川・安倍川等之に沿うて南走し、概して北に高く、南方は次第に低夷して丘陵地となれり。而して富士川以東は以西の地の如く數多の山嶽を有せざれども、富士愛鷹の二火山嶄然として崛起し、廣大なる裾野を曳き、其の西には毛無山脈南北に走り、東には

山嶽

足柄山脈相模との國境を劃し、東北部には一脈東西に亘りて、三國山天神山等を起せり。而して平地は僅かに富士の南麓海濱の地及び其の東方箱根火山と富士火山との間にある裾合谷黄瀬川沿岸に存するに過ぎず。

國の西北部にある山脈は即ち赤石山脈の一部にして、主として古生層に屬する粘板岩砂岩輝綠凝灰岩ラヂオリア板岩及び角岩等より成り、嶮嶮峻峻を相接して重疊し、其の間平地絶えてなく、人烟甚だ稀疎にして交通頗る不便を極む。然れども其の南方は次第に低くなりて、中生層若しくは第三紀層の丘陵に終る。赤石山脈は信濃の東境より駿遠の境上を北より南に走る一大山脈にして、國の西北境をなす部分に於ては常に二千米以上の高距を保ち、北は三峰嶽に起り、南走して荒川嶽間の山となり、更に赤石山及び大無間山に連なり、一たび大井川の齧谷に絶たる。赤石山は群中の最秀峯にして、大井川の上流田代川の水源地に在り、高さ三千〇九十三米、山勢最も峻峻を極む。大無間山は其の南方に聳えて高さ二千三百三十一米、遠江との界に在り。其の南方は次第に高峻の度を失ひ、大井川を越えて天狗寺嶺千二百六十米とな

赤石山脈

白岩山脈

り、遂に南方の丘陵地に連なる。

赤石山脈の東方には田代川の縦谷を隔て、一山脈又北より南に走るあり。これ即ち所謂白岩山脈と稱するものにして、甲斐の駒ヶ嶽に起り、南走して甲斐の界をなし、先づ北嶽(三千百五十一米)荒川嶽(三千百二十九米)農鳥山(三千〇四十二米)等の峻嶮を起し、常に二千米以上の高距を保ちて益南し、安倍川の水源地に於て二脈に分る。一は安倍川の西方を正南走するものにして、安倍郡の大部を占め、平均千米内外の連嶺なれども、一帯の隆起點たるに過ぎずして、特殊の峯頭を見ず。一は甲斐の界に沿うて東に折れ、安倍嶺千四百四十四米(近傍より東南々に轉じ、更に其の南方の安倍嶺千四百五十一米)に於て一支脈を南方に分岐し、庵原安倍の二郡境をなして、駒引嶺龍爪山(千〇四十一米)等を生じ、本脈は東南に連亘して徳間嶺(八百十九米)椿嶺(四百五十八米)富士見嶺等となる。

富士見嶺の東方、山比川の一水を隔て、岩淵の西方に一丘陵地あり。山比山・高山・妙見山等何れも三百米内外の高距を保ちて、西南より東北に連なり、

岩淵近傍の乳房山

西南部の丘陵

主として第三紀層を被覆せる集塊泥流より成り、これを貫きて橄欖輝石富士岩の露出あり。平林學士によれば、これ等の諸丘は小乳房山の相連なり、線状丘 (linear cones) をなすものにして、何れも多少圓錐形をなし、傾斜急にして二十度以上に達せり。火口址の稍明なるものは、唯、山比の北にある尻の池のみにして、楕圓形をなし、長徑四十米、短徑十六米、深さ七米を有し、底は平坦にして平時水なきも、雨ふれば輒ち一小池をなすといふ。

毛無山脈

國の西南部にある丘陵地は大井安倍二川の間に介在して、泥板岩砂岩等より成り、稀れに石灰岩及び凝灰岩を混ゆ。數多の峯巒相接して群起し、特記するに足るものなく、唯、高根山は其の北隅にありて高さ千〇八十三米に達し、重要な分水界をなし、其の南方にある千葉山(六百五十米)、東南にある朝比奈山(七百三十六米)等稍著るしきものなり。朝比奈山の東方には輝石富士岩より成れる高草山(四百八十三米)あり。

更に峠を轉じて國の東半部を見るに、富士山の西麓を擁して、南北に蜿蜒たる一山脈あり。これ即ち毛無山脈にして、主に所謂御坂層と稱する凝灰岩

富士山  
總説

層狀玢岩粘板岩砂岩及び第三紀層に屬する泥板岩砂岩等より成り、所々に閃綠岩の露出せるを見る。北方甲斐の御坂嶺に起り、南に連亘して甲斐の界をなし、本栖湖の南に於て龍ヶ嶽となり、更に毛無山(千九百四十五米)天子嶽(天子嶽等を生ぜり。天子嶽は閃綠岩より成り、平林學士によれば恐らく一の餅盤(Laccotie)ならむといふ。而して毛無山の東方には即ち本州第一の高峯、國內第一の名山富士山の聳起せるあり。

富士山(第五圖、第六圖、第十圖)は駿河甲斐に跨れる一大火山にして、高さ三千七百七十八米。山容秀麗、峰頭常に雪を戴き、恰も白扇を倒懸せるが如く、巍々として東海の天に聳ゆ。古來其の名稱に就いて種々の説あり。或は秦の徐福不老不死の仙藥を探りたる所なるにより、不死といひしに起るといひ、或は海内無二の高山なるにより不二と稱し、或は四時白雪を戴くにより白皚といひ、其の他諸説甚だ多しと雖も、星野文學博士の考證によれば、フヂといふ語は東洋諸國に於ては火の意味に用ゐらるゝものにして、往時噴火の作用尙ほ熄まざる時名づけられたるもの、漢字の音を借りて富士と稱せらるゝに至

りしなりといふ。登路は數條之れに通ずるありて、其の著るしきものを、東側の御殿場口須走口、東南の須山口、西南の大宮口表口及び北側の吉田口甲斐等とす。何れも全路を十合に分ち、合毎に石屋を設けて以て登山者の休泊に供せり。

富士山はナウマン(Naumann)氏の所謂 *Fossa magna* 或は故原田博士の富士帶と稱する一大地構線に沿うて噴出したるものにして、南は伊豆の諸火山及び大島利島三宅島等の火山島と相連なり、北は茅ヶ嶽及び八ヶ嶽等の諸火山と關聯して、所謂富士火山脈なるものを作り、南北日本の境界をなすものなり。更に近く其の四邊の地貌を考ふるに、西は毛無山脈を以て限り、北は御坂山脈に接し、東は黄瀬川を隔て、箱根山塊南北に亘り、南は愛鷹山を擁して駿河灣に臨む。其の形完美なる單圓錐形をなし、(かのケンフン(Kämpfer)氏が *mons excelsus et singularis* といひたりけむ如く)、其の嶄然として雲を凌ぎ群山を睥睨せるの状は、其の美妙なる輪廓と相待つて秀麗雄大の觀を呈し、實に本邦第一の名山たるに恥ぢざるべし。(又試みに其の峰頭に起ち、以て四方を

## 富士火口

下瞰すれば、本邦中央大部分の形勢は悉く一眸の中に萃まり、遠山近水は蜿蜒透迤として脚下に趨走し、南太平洋は大瀛萬里杳として涯りなく、伊豆の諸島は雲煙漂渺の間に點々として青螺を點じ、近くは駿遠豆三等の岬灣の出入亦一々指點し得べく、雄渾壯絶の景また實に海内無比と稱すべし。宜なるかな騷客は適かに之れを望みて其の美を賞し、遊士は親しく之れに攀ぢて以て天下の大觀を快とするあるをや。而して近づいて仔細に其の山體を檢するに及びては秀麗なる富士山も亦火山成生の理に漏れず、其の頂上には火口を有して内部の構造を暴露し、山側には寶永爆裂火口を開き、又幾多の側火山を生じたるを認むべし。今各局部に就きて其の地形を詳述すべし。

富士火口(第七圖甲乙)は山頂にありて略圓形をなし、直徑六百餘米、其の内壁は懸崖削立して怪巖奇石嵯峨出沒し、殆んど降下すべからず。唯、僅に南方淺間神社の傍より巨岩累積の間を匍匐潛行し、辛うじて其の底に達するを得べし。火口底は平坦にして圓形をなし、直徑七十餘米、其の海拔高距は三千五百五十六米にして、火口壁の最高點劍ヶ峯より低きこと二百二十米とす。現



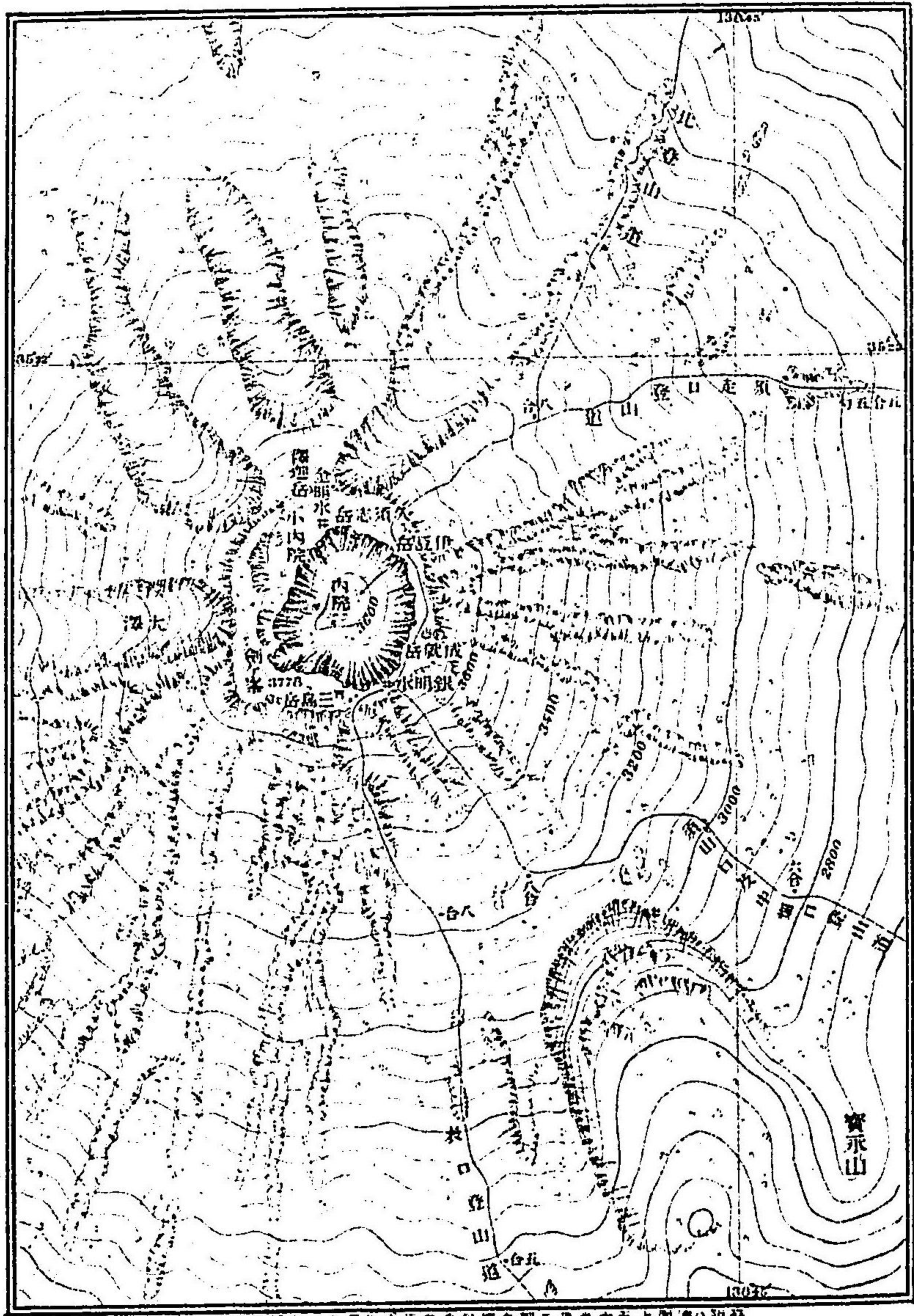
火口壁

時は涓滴の水をも貯へざれど、往時は曾て火口湖をなせしもの、如く、富士大縁起中には彼中央有大窪、湛池水、其色如青藍の句あり。又口碑の傳ふる所に據れば昔時は火口尙ほ深くして、火口壁より瞰下するも其の底部を明視する能はざりしといふ。然れども四壁の岩塊は絶えず崩落して之れを埋め、遂に現今の状態を呈するに至れり。實にや今日火口壁に佇立すると少時に及べば、容易に踵々として岩石の落下するを認め得べく、又更に身を火口底に投ずれば、赭色灰色或は黒色を呈して累々たる岩塊は、頭上を壓し、將さに墜ちんとして僅かに支持するを見、頗る人の心膽を寒からしむるあるべし。

再び火口壁頭に立ちて四周の光景を觀察せんに、劍ヶ峯(第七圖乙)の高峯は火口の西南部に秀立して熔岩の累層より成り、海拔高距三千七百七十八米に達し、儼然として本州に於ける高山峻嶺の覇をなせり。今時計回轉の方向に従つて四周の地形を略述せむとす。

劍ヶ峯の北方に隣して一條の深壑長く西方の山腹に及べるあり。これ即ち大澤にして、幅は僅かに二百餘米に過ぎざるも、長さは數軒、深さは百米を

富士火山上附近地形圖



大日本地誌 卷三 七二

超え、細徑其の東端を通ず。之れを過ぐれば即ち俗に馬の脊と稱する所にし  
て、左右急斜して道は頗る狭く、恰も馬脊に似たり。其の北一巨岩の突起せ  
るを釋迦嶽或は白山嶽と稱し、高距三千七百五十三米、火口の西北壁に位す。  
其の東方には久須志嶽あり。火口の北壁にして、東方本社を安置し、吉田口  
及び須走口の登山者の先づ達する所なり。久須志嶽の東南には帽子状をなせ  
る熔岩の大塊を戴ける伊豆嶽あり。之れより火口の東壁を傳うて南行すれば、  
稍平坦なる養の河原に出づべく、こゝに噴汽洞ありて地上隨所より蒸氣を噴  
出し、四近の岩石を霏爛して赭褐色に變じ、或は泡沸石を生ぜるを見る。其  
の南に成就嶽あり。これより西に回れば火口壁は遂に三島嶽に終る。大宮口  
須山口及び御殿口の登路は即ち成就嶽と三島嶽との間に到るものにして、淺  
間神社の本社こゝに鎮座せり。所謂芙蓉八朶の峰とは劍ヶ峰釋迦嶽久須志嶽  
伊豆嶽成就嶽駒ヶ嶽淺間嶽及び三島嶽を稱するものにして、何れも火口壁の  
一部熔岩塊の突起せる部分にして、其の海拔高距殆んど相等し。  
火口の西部より北部に亘り、弦月状をなせる平地あり。山頂より低きこと

小内院

約四五十米、平坦なる一臺地にして、延長七百米、其の幅最も廣き所に於て百餘米に達す。これ即ち所謂火口棚と稱するものにして、火口の周壁自己の重力に堪えずして陥落したるものなり。俗に内輪廻りと稱へ火口を一周するものは此の火口棚の内縁を辿り、又外輪廻りと稱するものは遠く外側の山背を繞るものなり。火口棚の中釋迦嶽の南に方りて一小窪地あり。深さ僅かに十米許、これを小内院といふ。ライン氏は此れを以て一小火口なりとし、鈴木博士石井學士も亦此の考を抱かれしも、的確なる證據の存せざるに因り、平林學士は陥落の際に生ぜし凹所に過ぎずとせり。

火口の南北兩壁に相對して銀明水及び金明水の二泉あり。積雪融けて火山礫砂の中を流れ、此處に湧出せるものにして、其の大き僅々盆大に過ぎざれども、水は清冽にして齒に徹し、千秋萬古滾々として盡きず溢れず、人以て靈となせり。

寶永爆裂火口は又新内院と稱し、東南の山腹にありて、寶永四年紀元二千三百六十七年十一月二十二日爆裂したるものなりといふ。其の形脈の如く、

寶永爆裂火口

壱野

南北の長徑千八百米、東西の短徑凡そ八百米にして、火口底は火口壁の一小隆起點寶永山より深きこと三百餘米に及び、所謂富士中道廻り道は此の中を通過す。四壁直立して傾斜四十度を超え、殊に北壁は懸崖削れるが如く全く昇降するを得ず。火口内には幾多の岩脈相群りて直立し、恰も屏障を列ねたるが如く、或は相並行し、或は相交又せり。其の他又砂礫の堆積より成りて高さ十米に過ぎざる一小丘の横はるを見る。火口の四周及び火口底には爆裂當時の噴石堆積し、又瓦斯噴出の勢強大なりし爲め、多少上昇し來りたる岩漿は悉く箇々分離せられて高く奔騰し、奇形なる火山彈を作り、其の大きいさは數糶より大は七八十糶に達するものあり。其の形の似たるを以て土人又之れを鯉節石或は茗荷石と稱す。是れ實に富士火山最近の噴出に係る熔岩にして、岩石は元來純黒なるものなれども酸化して少しく紫褐色を帯び、稍多孔質鑛鏝狀をなせる玄武岩なり。

富士山山側(第八圖)の傾斜は其の山頂附近に於ては頗る急にして三十二度乃至三十四度に達すれども、少しく下れば二十五六度となり、中腹に至れば十

七八度に減じ、之れより次第に緩慢となり、遂に廣大なる裾野をなせり。其の傾斜は四面に於て略均一なれども唯東側に於ては寶永爆裂火口より噴出せる火山砂礫の爲めに稍緩斜をなせる傾きあり。其の裾野の發達は頗る著るしく、本邦の火山中甚だ稀に見る所にして、南は遠く駿河灣頭の吉原附近に達し、北は甲斐の河口湖西湖附近に及び、東は黄瀬川の溪谷に至りてこゝに箱根火山の裾野と相會し、西は國界をなせる毛無山天子嶽の連嶺附近に布けり。火山の坐積東西約三十八軒、南北凡そ四十軒を有す。富士火山の秀靈なる其の容姿も一は裾野の優美なるに基づくものにして、悠々として遠く延びたる輪廓は嶄然として雲を凌ぐ其の秀峰と相對して標式的火山の特相を表はし、又壯大優麗の觀を呈するものなり。山頂附近の地約三十平方軒の間は火山砂礫の荒地にして之れを燒野と稱し、毫も草木を生ぜざれども、其の以下山腹の地には之れを圍繞して一大森林の環帶あり。俗に之れを木立と稱し、其の幅は二乃至八軒にして、西部一帯の地殊に西北及び西南部に於ては其の發達頗る著るしく、落葉松樅山毛櫸等の巨木蔚然として數軒の間に連なり、天日

## 輻射谷

爲めに暗く、跋涉頗る困難を極むといふ。然れども東麓は概して少なく、特に御殿場方面は森林帯の幅僅かに二軒に過ぎず。これ蓋し此の地方を被ひたる寶永爆裂の噴出物は分解未だ完からずして、植物の生育に適せざるに因るなり。森林帯の外部は即ち葎茸茅草の一大曠野にして、茫漠として幅十軒餘に及び、これを葎野と稱す。

富士火山は有史時代に於ても尙ほ屢噴出作用を逞しうし、削磨作用未だ著るしからず。加ふるに山體の大部は火山砂礫を以て被はれ、水は容易に粗鬆なる表部を透過し、伏流となりて裾野の末端に湧出するもの多く、山腹以上には山側を開鑿して輻射谷をなせるもの甚だ少なし。輻射谷の稍稱すべきは劍ヶ峯の北に起りて西方に走れる大澤にして、其の上部は平時水を欠きて所謂空谷をなし、兩崖の峭壁高さ百餘米に及び、こゝに噴出物累層の好露出を示し、岩塊は絶えず崩落して蕪々の音をなせり。其の他中腹以下に大滑澤鬼ヶ澤滑澤木花澤不淨澤櫻澤等あれども特に記するに足らず。

富士火山の山側には數多の側火山を生じ、平林學士の研究によれば、其の

## 側火山

數實に三十有九の多きに達す。然れども母體の壯大雄偉なるに反し、其の形何れも甚だ小にして、僅かに山腹の小疣たるに過ぎず。且つ多くは樹林鬱茂の間に在るを以て、人の注意を惹くこと稀なり。而して其の排列の狀は一見錯雜の狀を呈すと雖も、精細に之れを視れば富士火口を中心として、數條の輻射狀及び共心圓狀の裂罅に沿うて生じたと明にして即ち左の如し。

西北側 第一側火山線(輻射狀) 片蓋山大室山  
第二側火山線(輻射狀) 内輪山白山野頭山弓射塚天神山長尾山。

第三側火山線(共心圓狀) 丸山西丸山白山佐原山丸山太平山。

第四側火山線(共心圓狀) 罫塚白塚檜塚西白塚東白塚西黒塚平塚次郎右衛門塚赤塚。

第五側火山線(輻射狀) 高山淺黄塚東白塚。

第六側火山線(輻射狀) 腰切塚西黒塚御釜塚東黒塚。

第七側火山線(共心圓狀) 籠子山東黒塚猿山。

第八側火山線(輻射狀) ニッ塚赤塚。

西南東南側

第一側火山線

以下少しく此れ等の側火山に就いて記述すべし。  
第一側火山線(輻射狀)は西北側にありて甲斐國に屬し、片蓋山大室山之これに屬す。

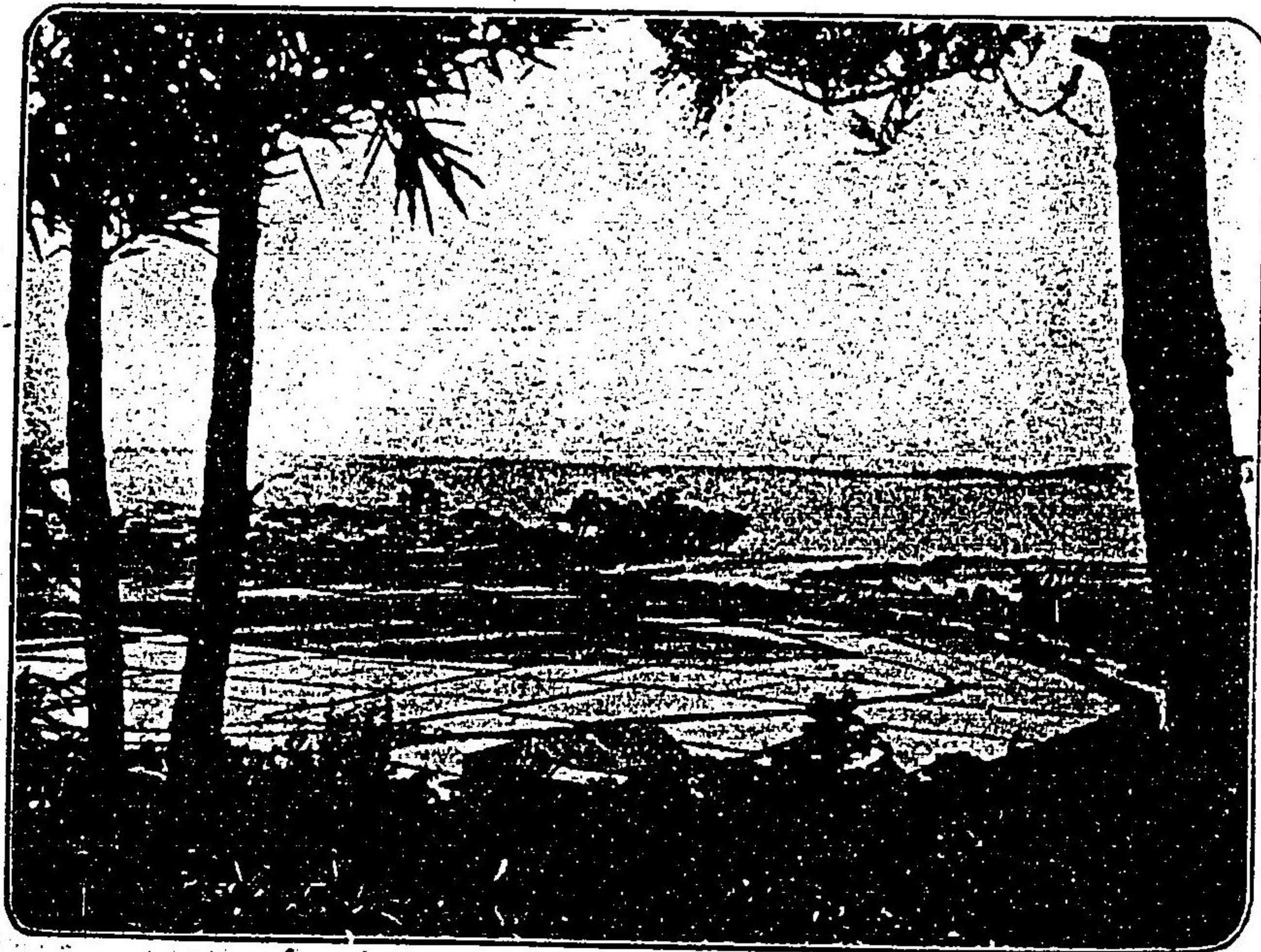
片蓋山

片蓋山。完全なる圓錐形をなし、傾斜急にして二十五度内外に及び、比較高距は百米に過ぎず。其の北西兩側面には森林繁茂すれども、南面には之れを欠き、唯、火口の周邊を縁取るのみなるを以て南方より遠く之れを望めば恰も茶碗の片蓋に似たるを以て此の名ありといふ。山頂には播鉢狀をなせる美麗なる火口ありて、其の直徑凡そ二百米、四壁急斜して深さ六十五米に達す。黒褐色多孔質の火山礫全山を被覆せり。

大室山

大室山。前者の西北二軒の所に在り。側火山中最大のものにして、比較高距三百七十五米を有し、完美なる圓錐形をなせり。火口は山頂に在りて西南に向つて開き、東北より西南に長き楕圓形をなし、長徑五百米短徑凡そ三百五十米に及び、深さは二百二十米に達す。満山樹林茂く、殆んど岩石の露出を見ず。

川王天島津國張尾(甲)



む望を浦衣りよ山城國張尾(乙)

(第一圖)

第二側火山線  
内輪山  
白山  
野頭山  
弓射塚  
長尾山

第二側火山線幅射状は前側火山線の東隣に在りて、同じく甲斐國に屬し、内輪山・白山・野頭山・弓射塚・天神山及び長尾山の六丘此の中にあり。  
内輪山。片蓋山の東南に在りて白山及び佐原山と相接して起てり。山頂には深さ僅かに十米なる圓形の火口を有せり。白山これに接して其の北に在り。高さは僅かに八十米、頂上には橢圓形の火口ありて、其の長徑凡そ百米、深さ十五米に及ぶ。此の二丘何れも密林之れを蔽ひ、跋涉頗る困難なり。  
野頭山。片蓋山の東に當り、弓射塚・天神山等と相接して在り。形甚だ扁平にして傾斜も亦極めて緩慢なり。山頂には二個の火口ありて、其の形畧相等しく、楕圓状をなして、直徑三百米、深さ六十餘米を有す。其の西北にある火口は之れを氷池と稱し、四時雪を貯へ、其の噴出せる黑色鏽狀の熔岩は西北に向つて流れ、舌状をなして一杆半の所に達せり。弓射塚は野頭山の東北に在りて高さ二百三十米。山頂は扁平にして火口址を存せず。恐らく乳房山なるべし。  
長尾山。弓射塚の北方に位し、其の間に入穴鳴澤兩村間の細徑を夾む。片

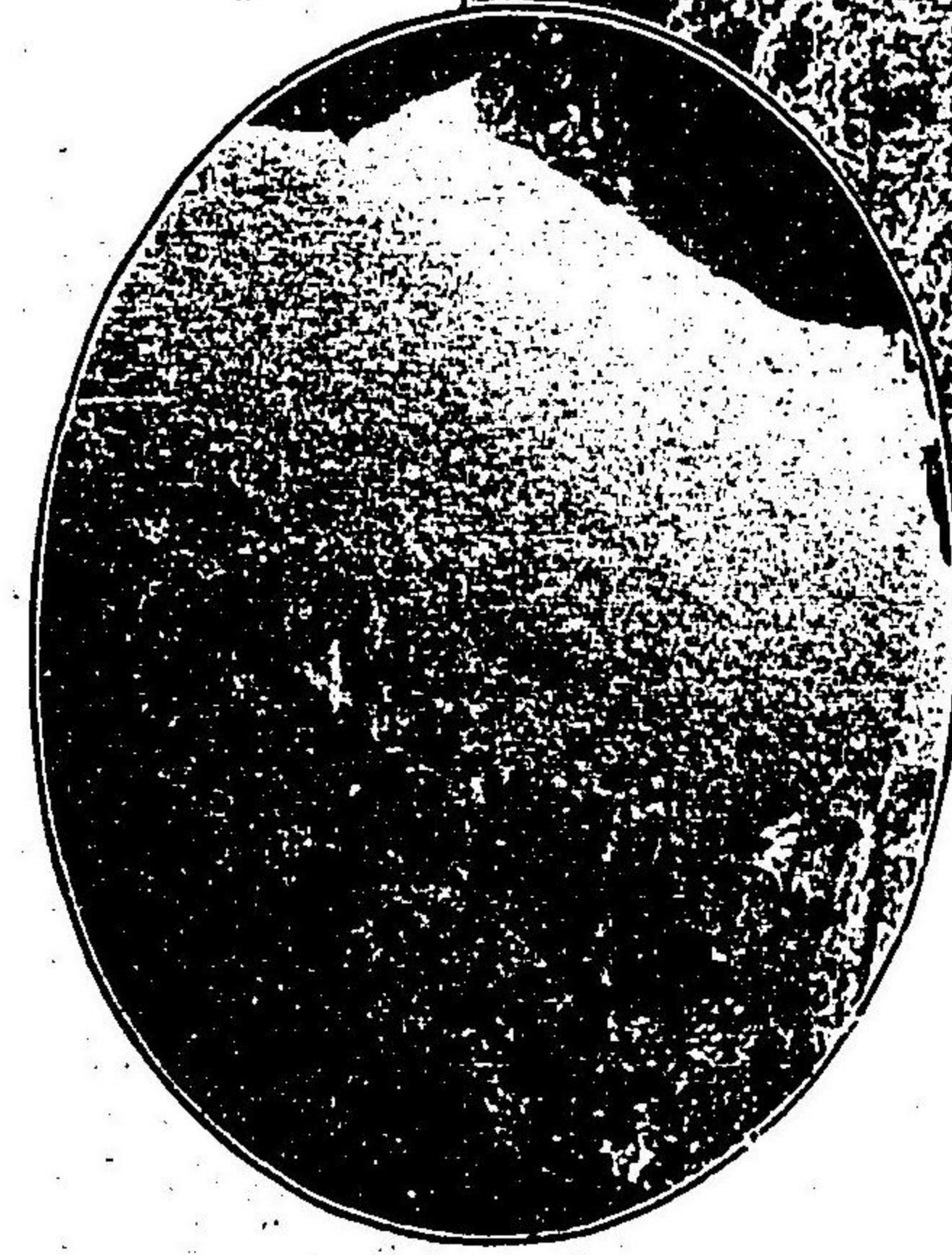
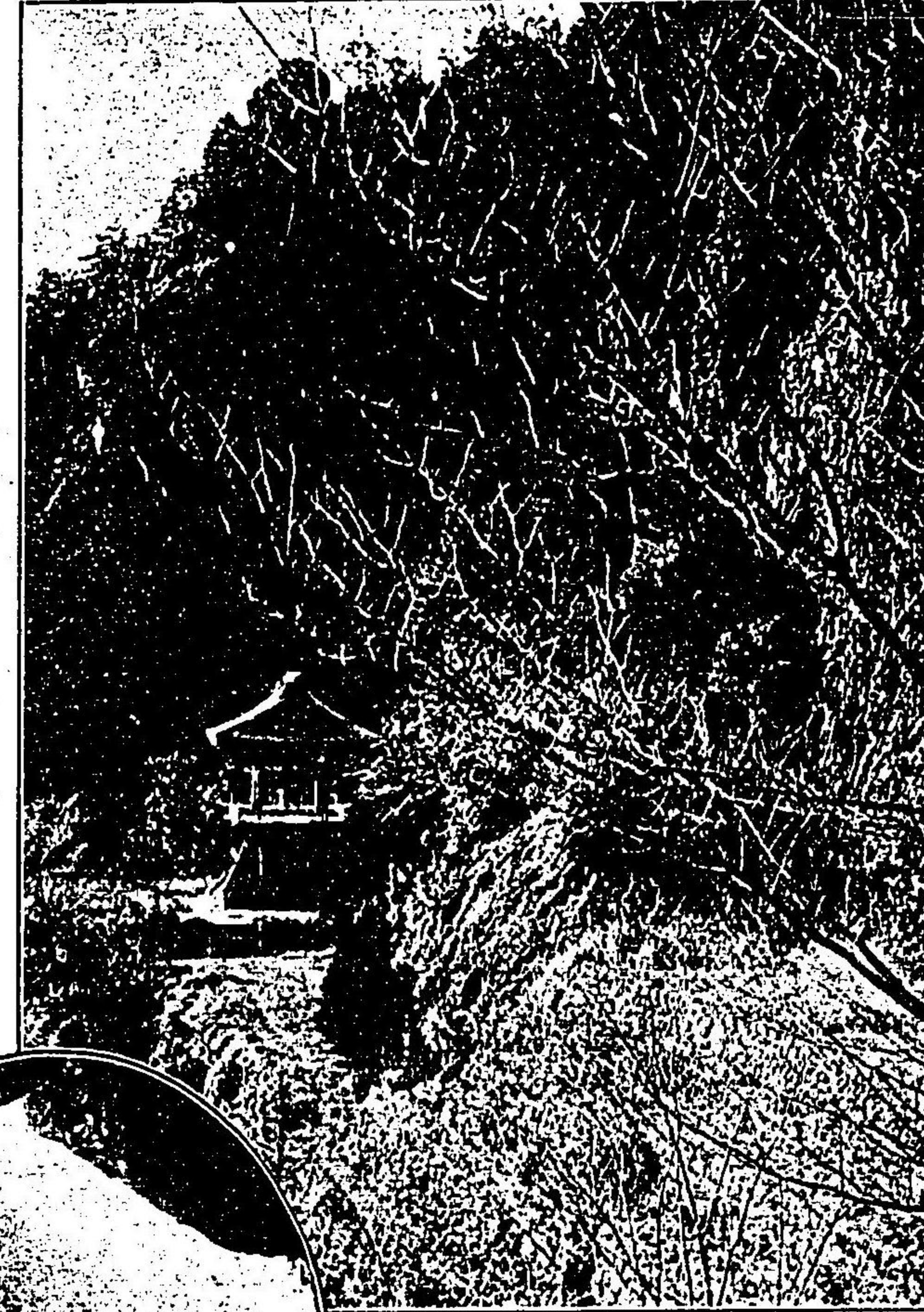
山 神 天 國 江 遠 (甲)



山 子 帽 鳥 俣 二 國 江 遠 (乙)

(第 三 圖)

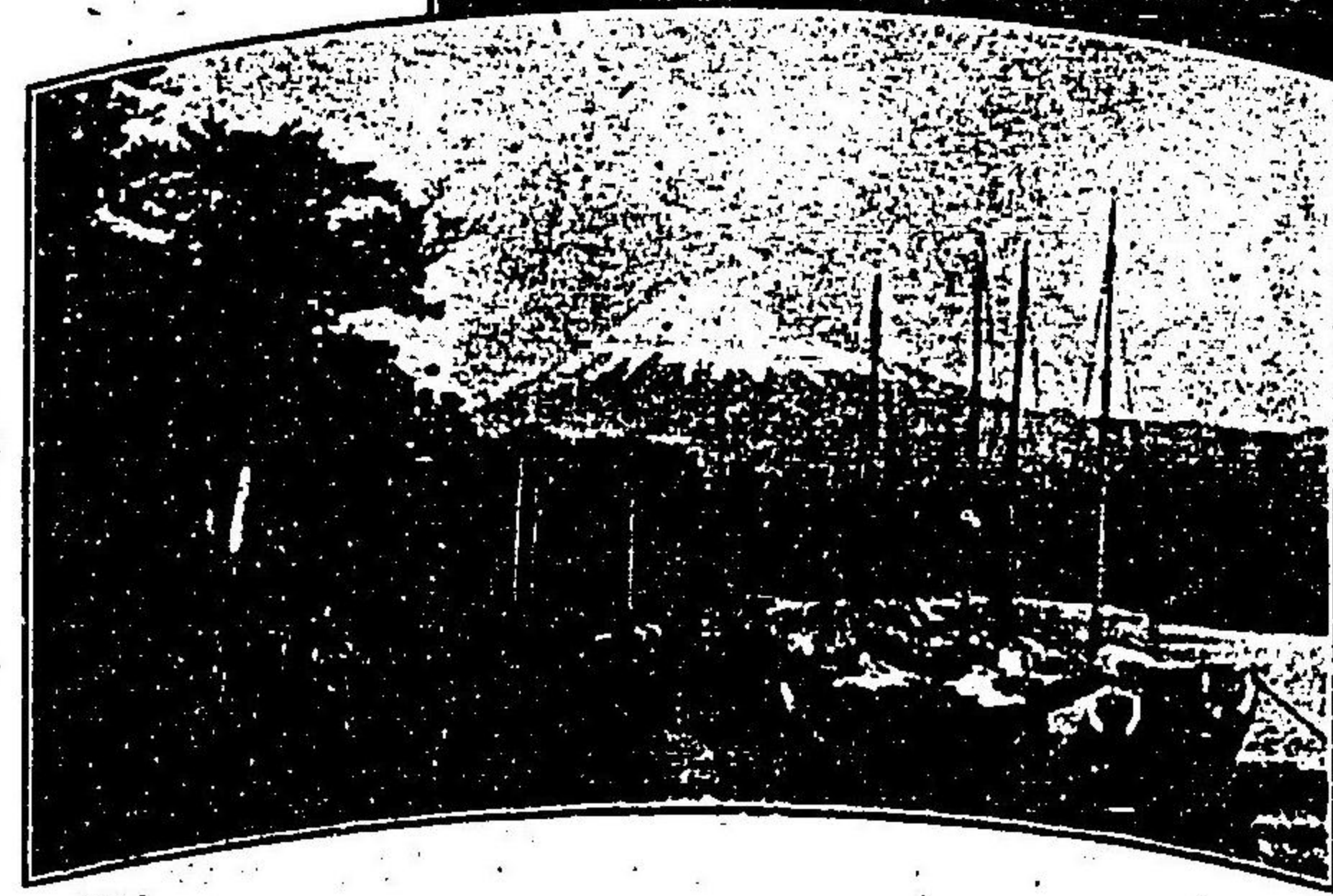
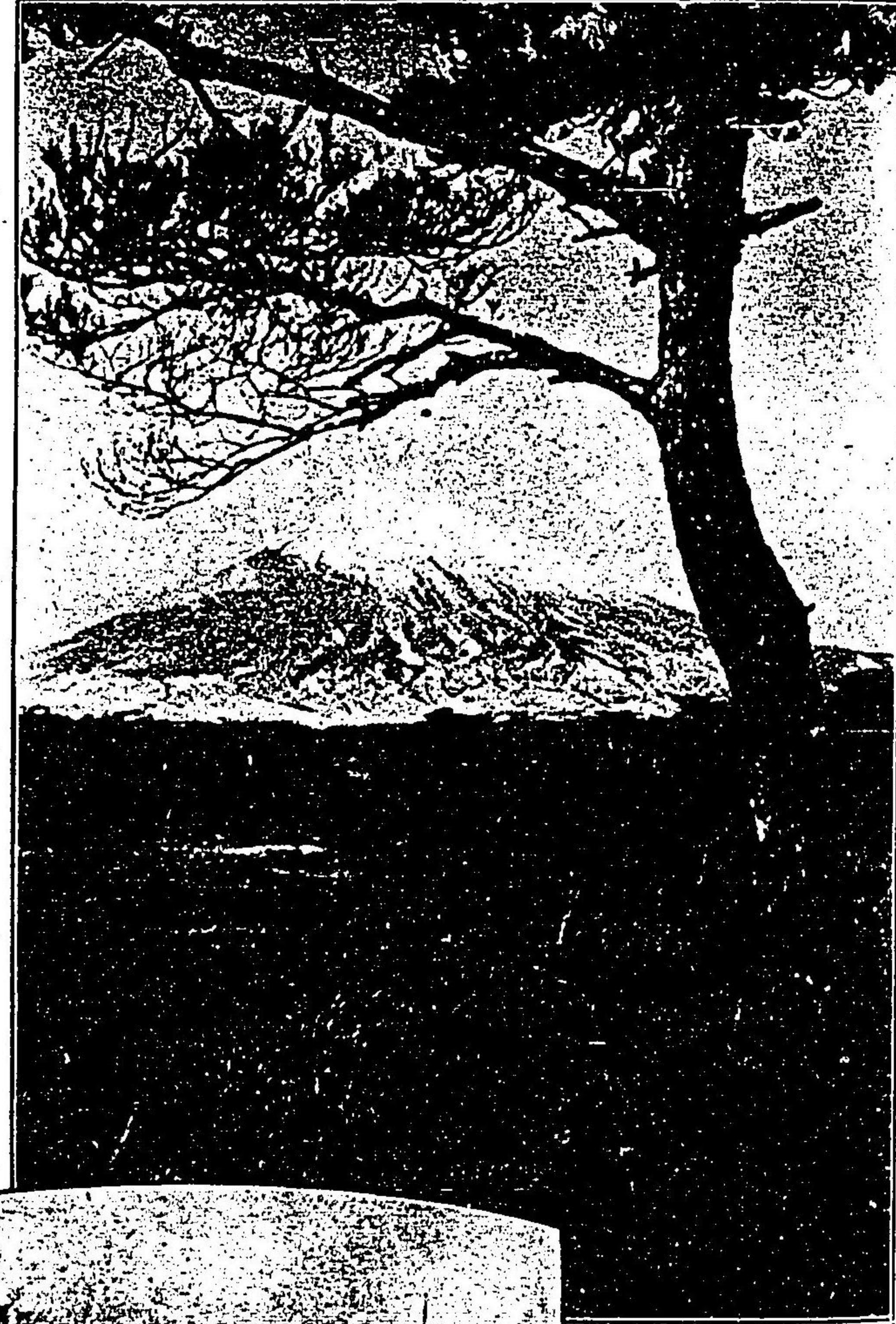
樓 鐘 寺 來 風 國 河 三 (甲)



(乙)  
三 河 國 川 合 乳 岩

(第 二 圖)

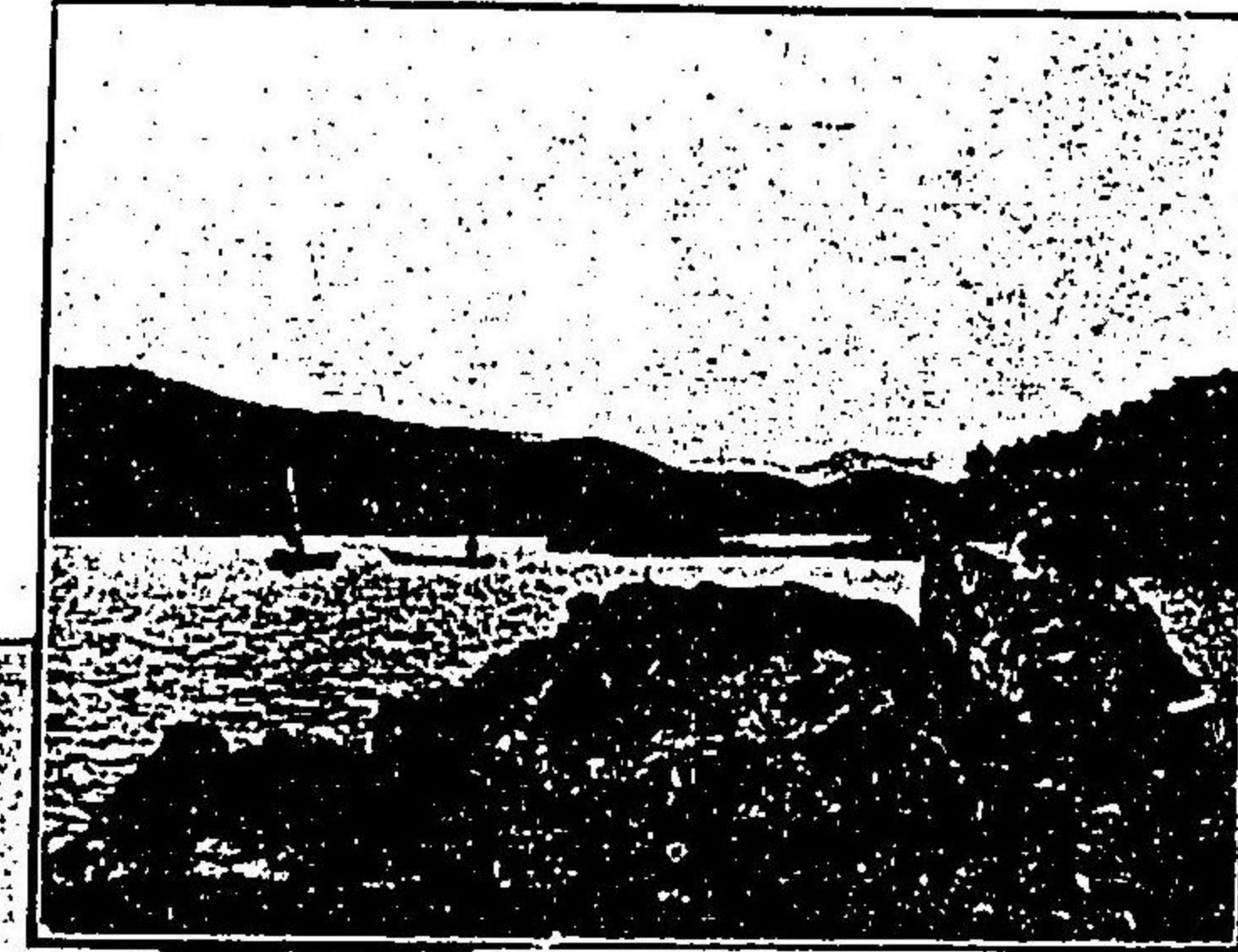
駿河國御殿場より西方富士山を望む (甲)



(第五圖)

駿河國田子浦 (乙)

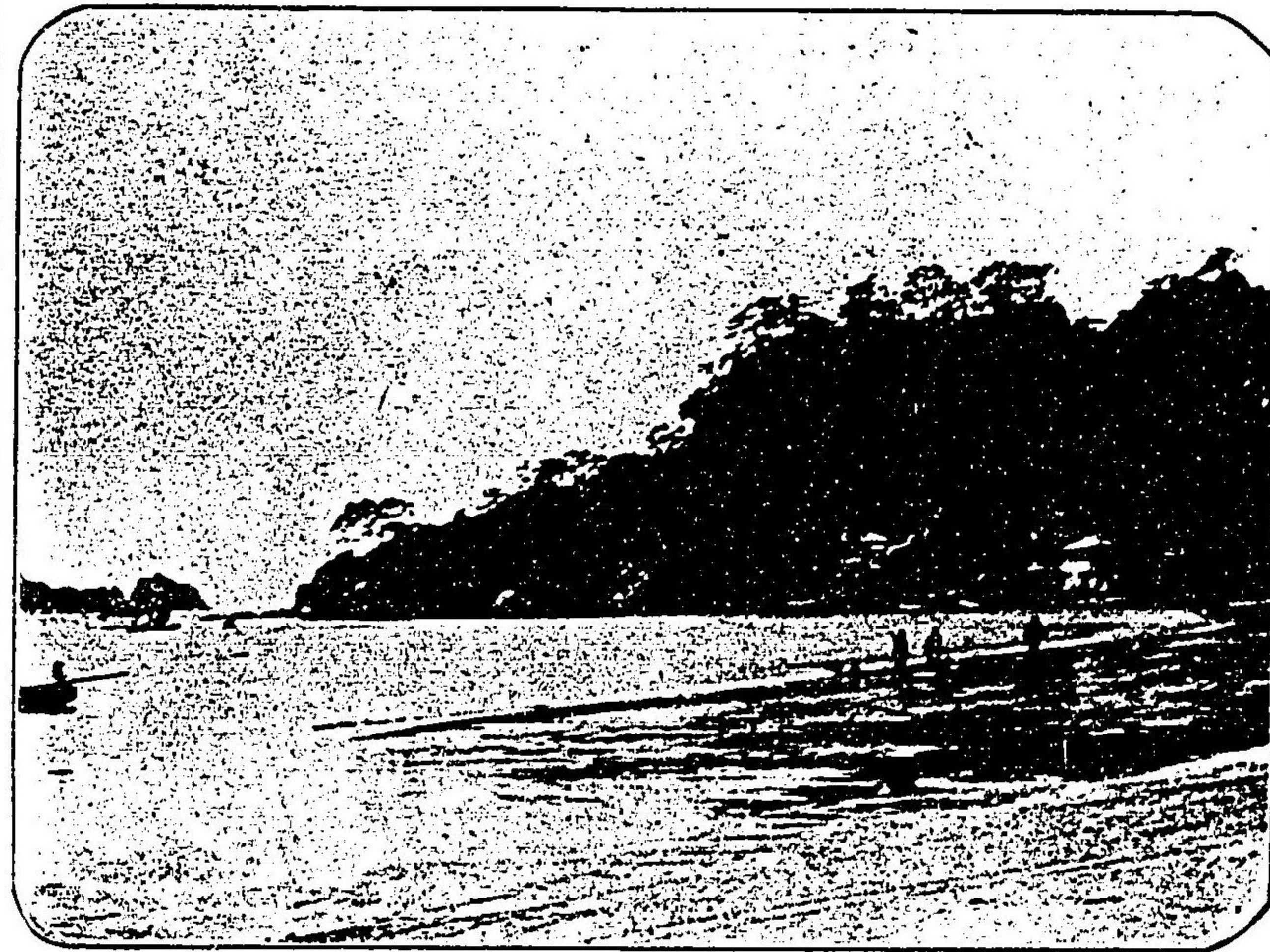
遠江國濱名湖 (甲)



其一



其二

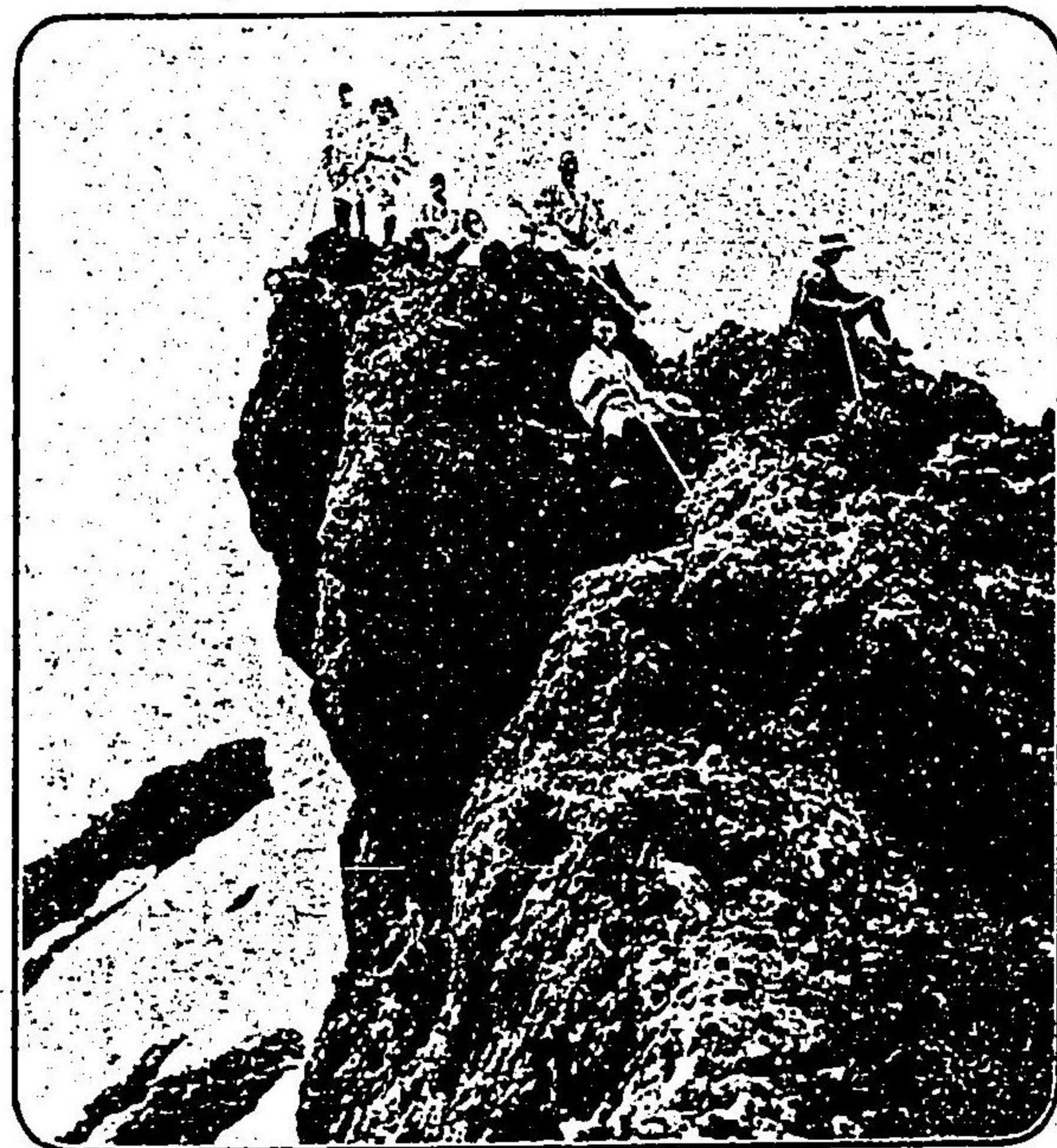


(第四圖)

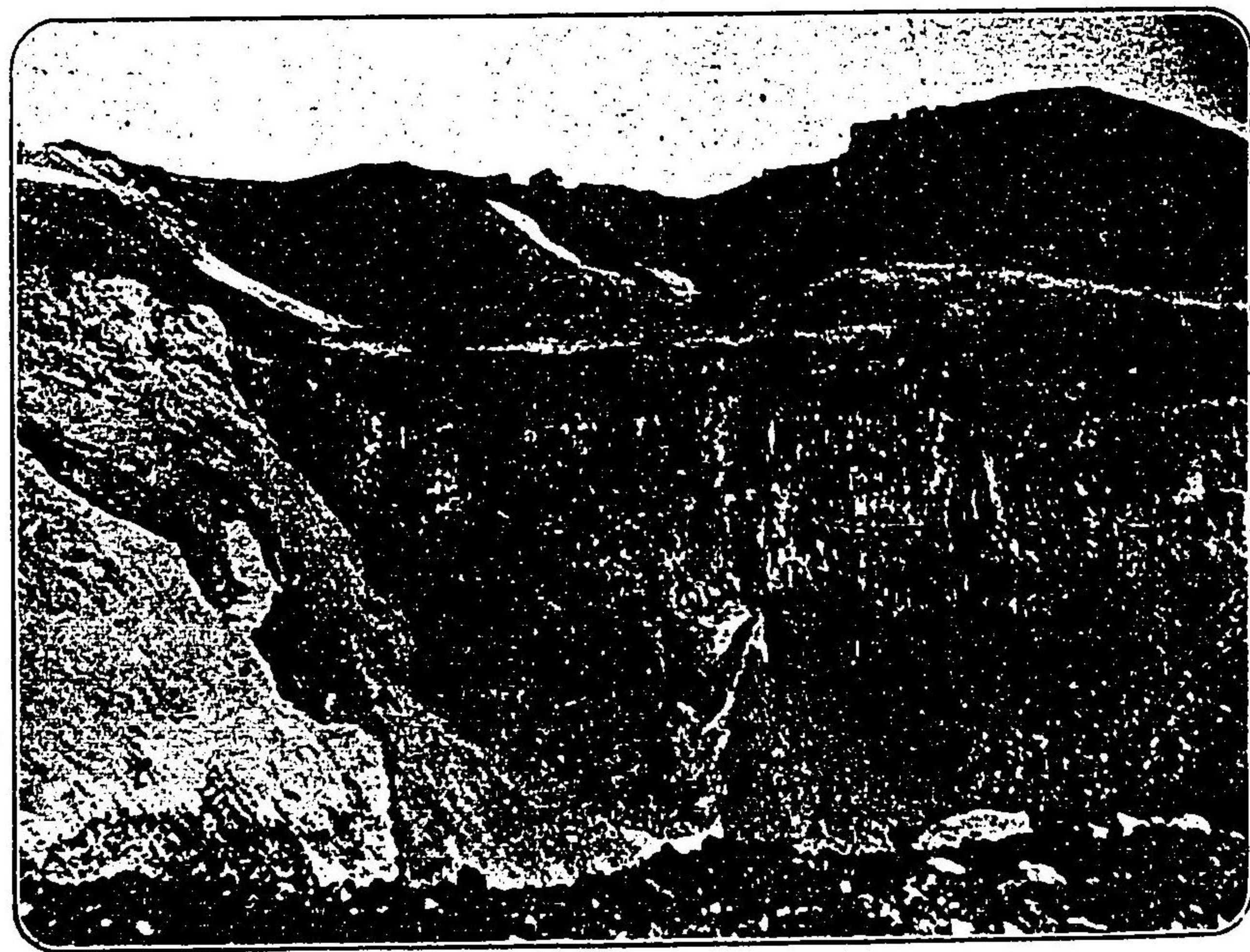
伊豆國子浦海岸 (乙)



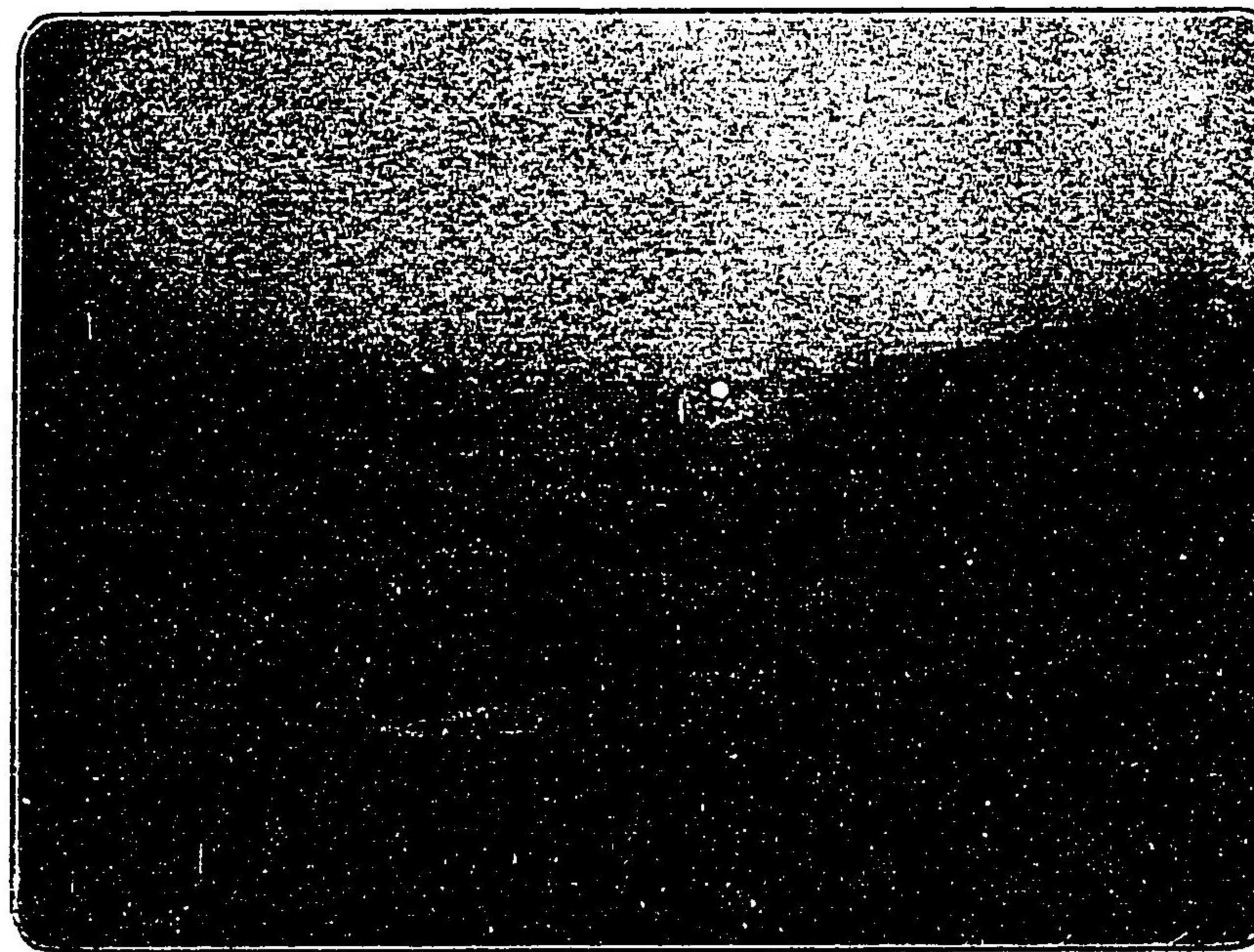
富士山絶頂火口壁の一部 (甲)



甲斐國荒倉より南方面富士山を望む (甲)



富士山絶頂火口を隔てて最も秀麗な峯を望む (乙)



富士山頂の日の出 (乙)

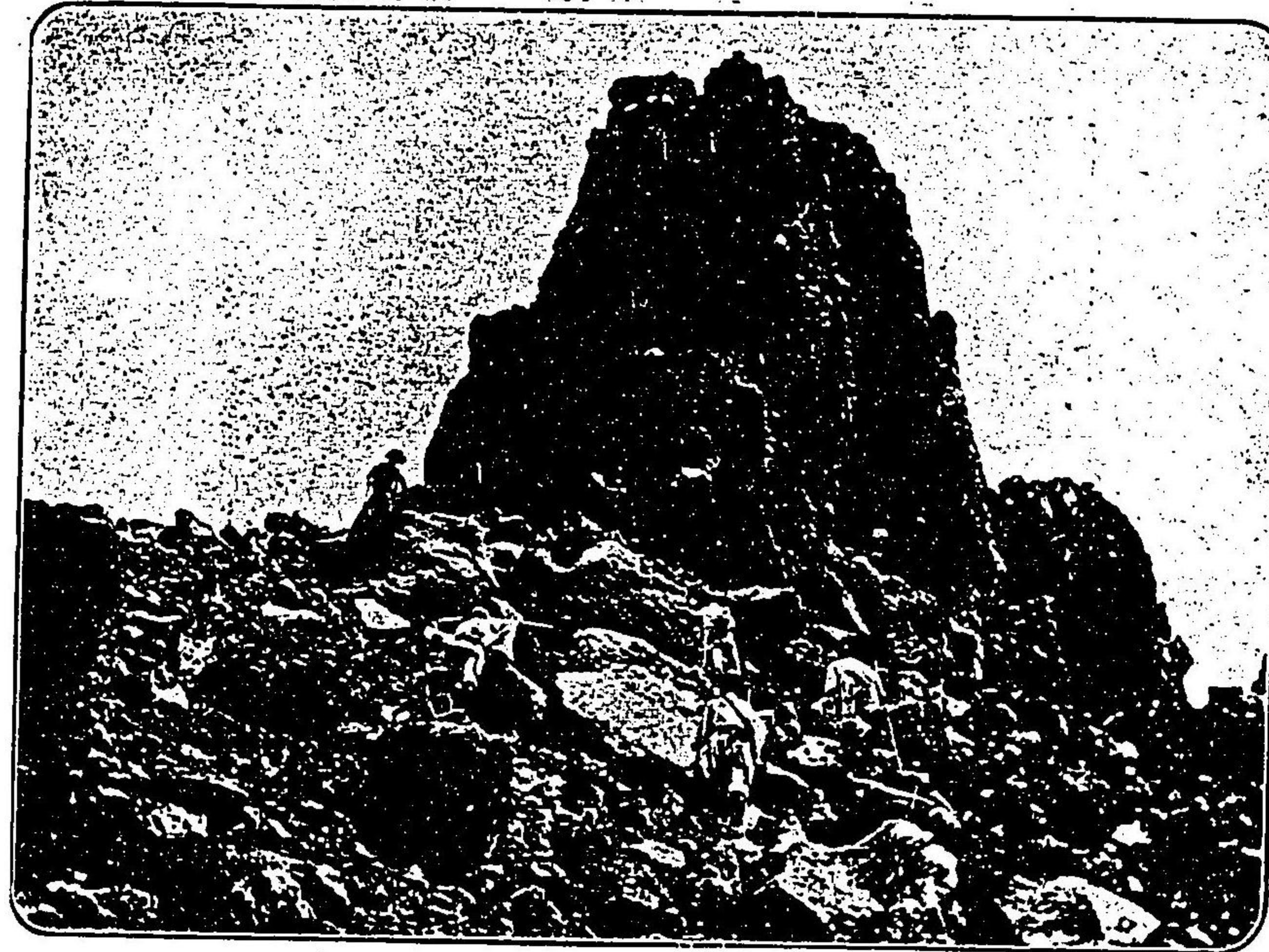
(第七圖)

(第六圖)

富士山西麓穴人岩壁道入口 (甲)



富士山頂の一部 (甲)

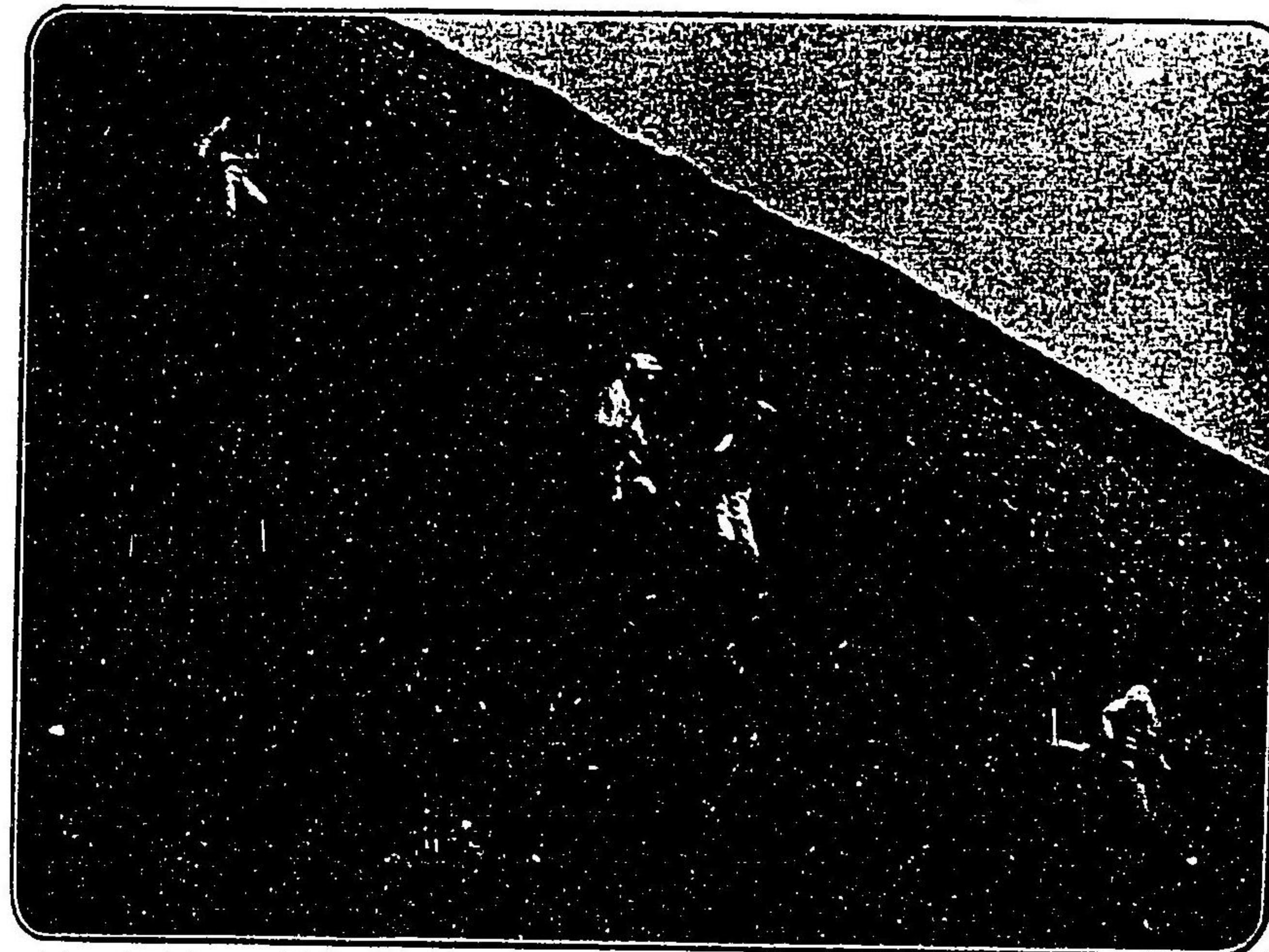


(第九圖)



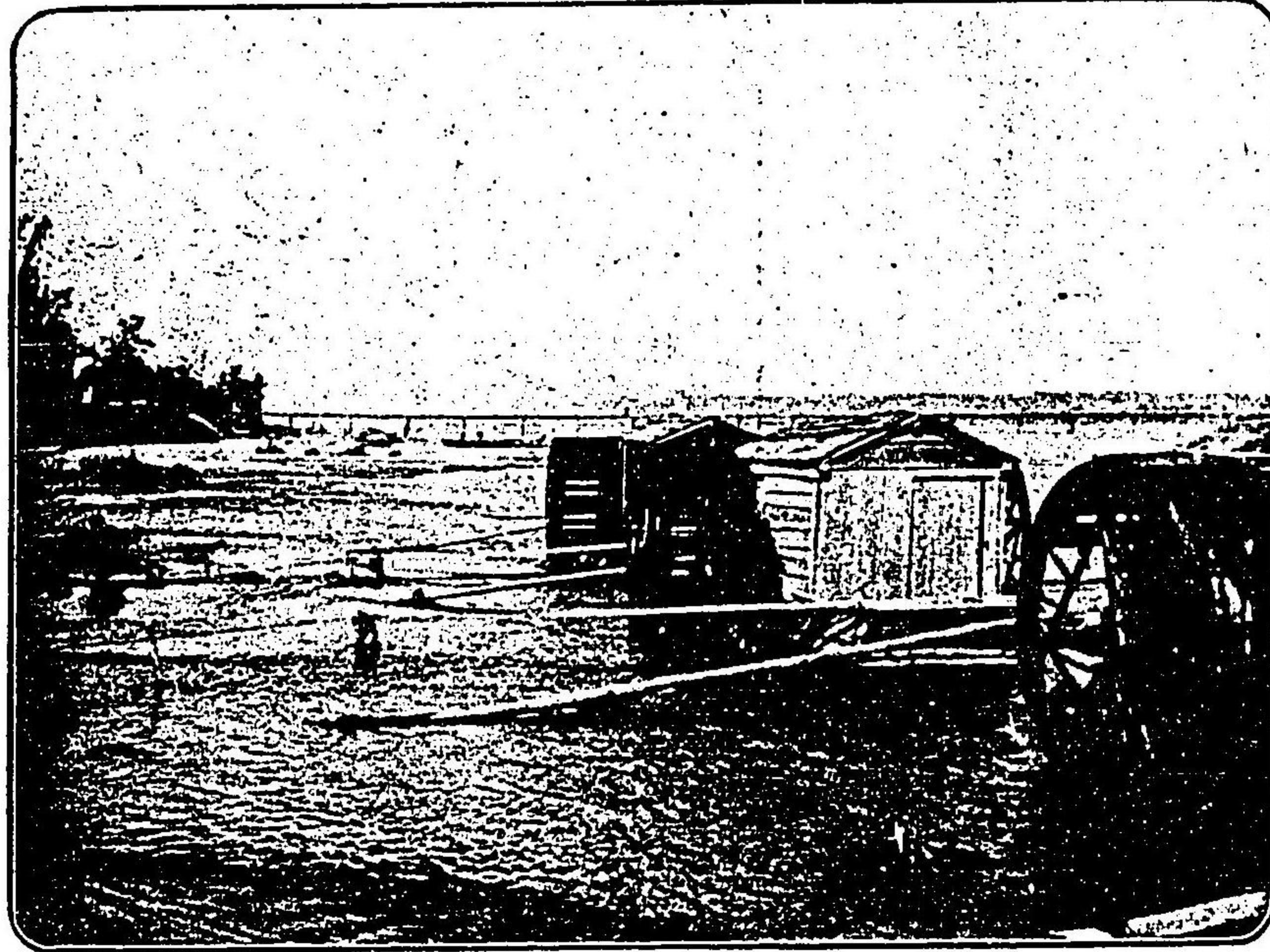
富士山西南麓白糸の瀧 (乙)

(第八圖)



富士山腹沙走り (乙)

流下川龍天國江遠 (甲)



橋川倍安國河駿 (乙)

(第十一圖)



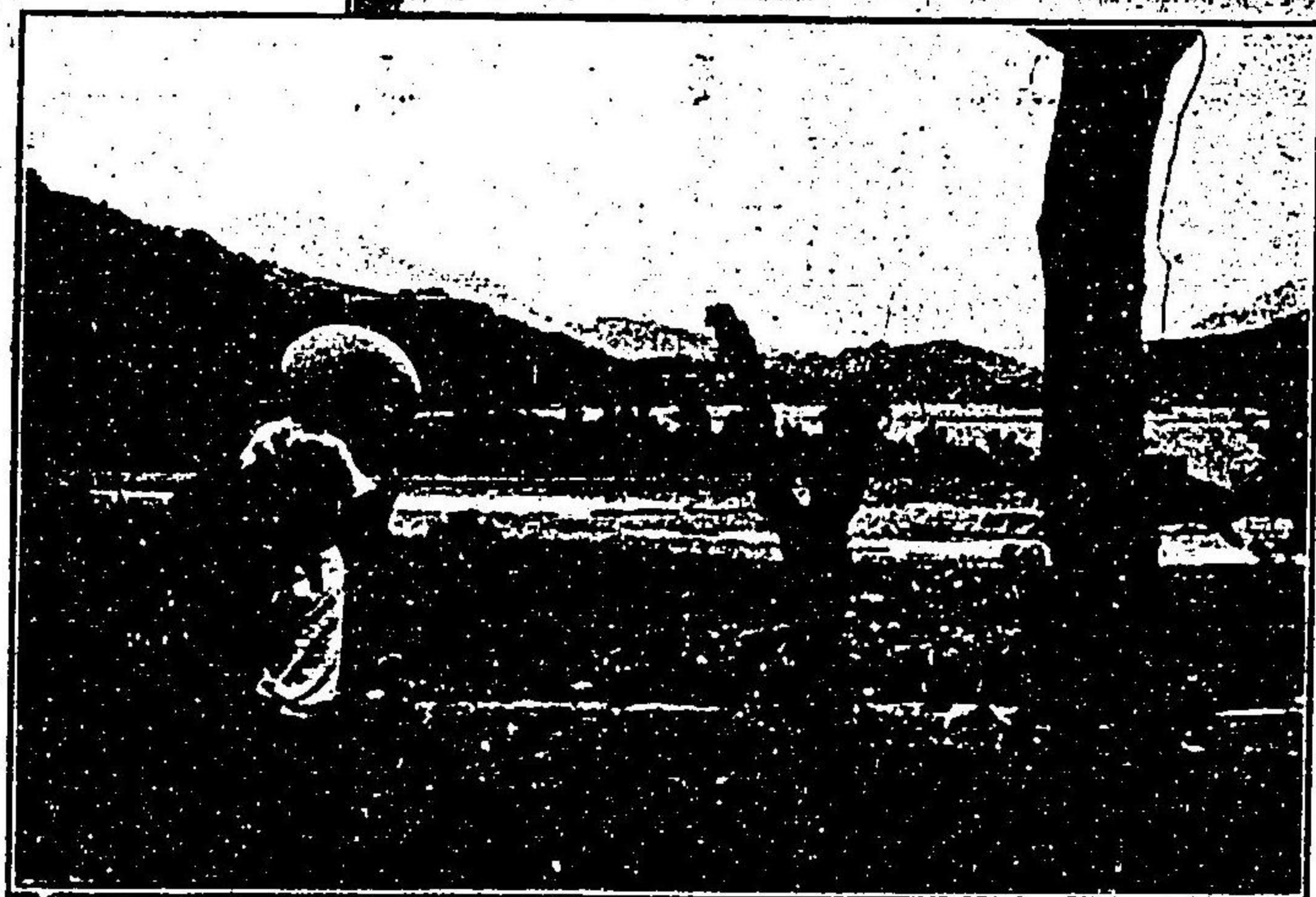
む望を山士宮に方北りよ淵岩龍國河駿

(第十圖)

一其流上川士富 (甲)



(乙)  
其  
二



流下川士富 (丙)

(第十三圖)

瀧娥仙道新嶽御國斐甲 (甲)



峽仙昇國斐甲 (乙)

(第十二圖)

望遠山士富へて隔を湖口河りよ峠坂御 (甲)



流下川野狩び及町津沼國河駿 (甲)



(第十五圖)



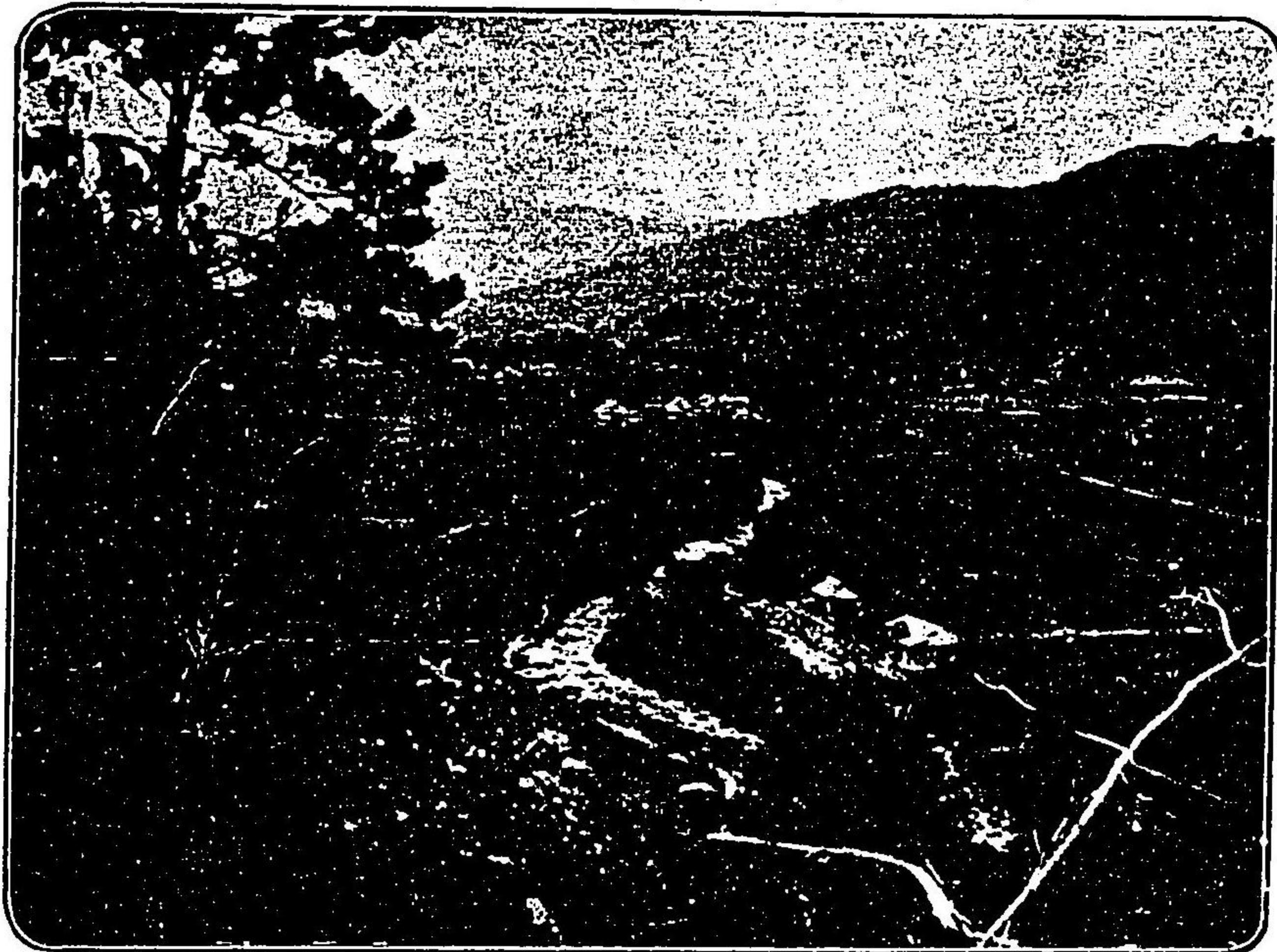
川桂國豆伊 (乙)

(第十四圖)



場船渡川士富澤鰍國斐甲 (乙)

寺善修國豆伊(甲)

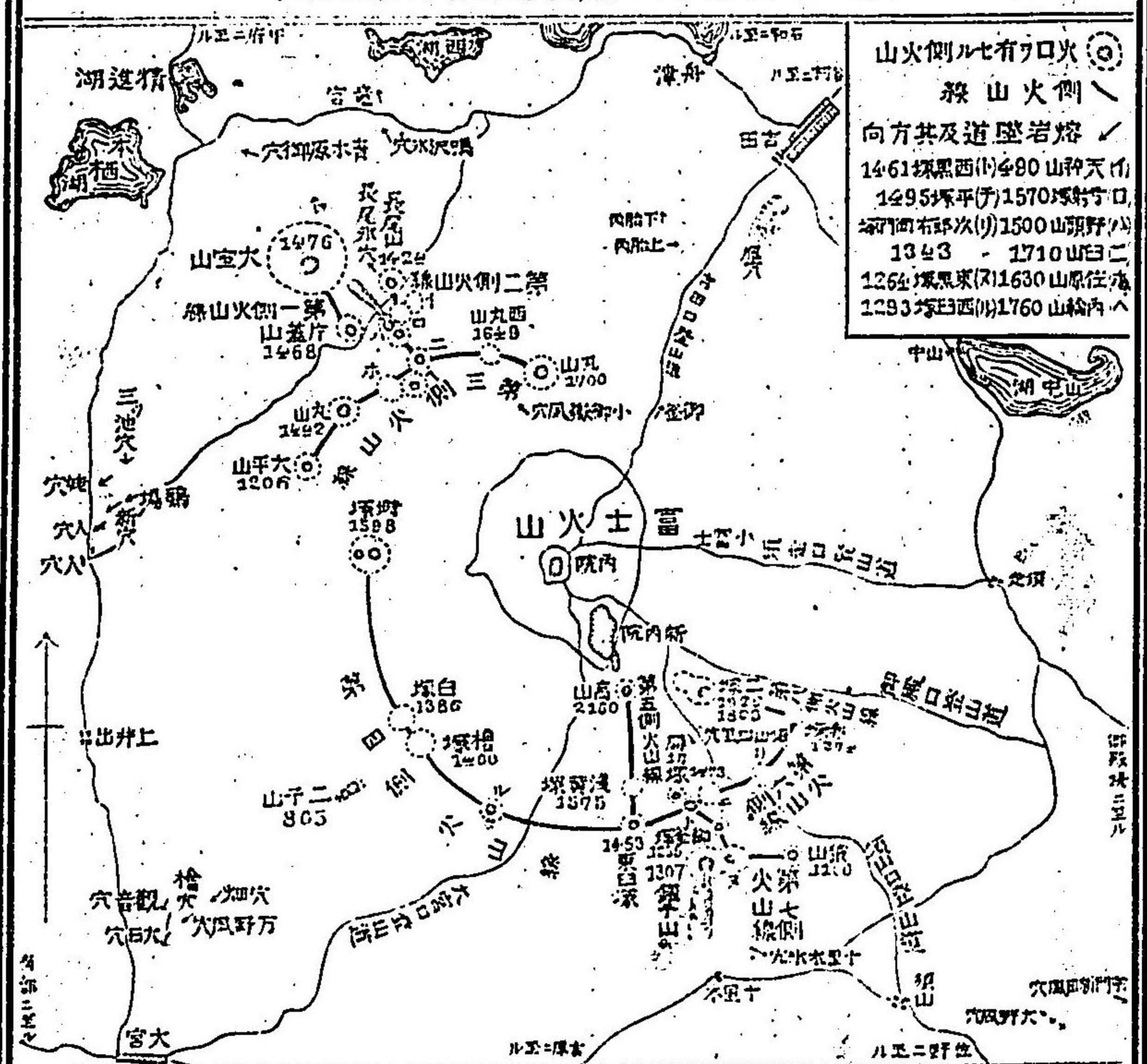


泉噴歌間海熱國豆伊(乙)

(第十六圖)

第三側火山線

圖之布分道墜岩熔及山火側士富



山火側七有口火  
 山火側  
 向方共及道墜岩熔  
 1461 標黒西山(高80) 山神天  
 1495 標平(高1570) 標對守口  
 標南有(高1500) 山野野  
 1343 1710 山三  
 1254 標黒東(高1630) 山原往  
 1283 標三西(高1760) 山林内

一之分万十三尺縮

蓋山に類似せる美麗の圓錐丘にして二十度内外の傾斜を有せり。火口は山頂に在りて圓形をなし、直径二百米、深さ六十米に達す。其の西北麓に一個の熔岩墜道あり、之れを長尾氷穴といふ。

第三側火山線其心圓狀は西北側に在りて、東方丸山に起り、弧狀をなして西方に

第一編 第一章 地形

延び、西丸山(白山既記)佐原山丸山太平山等を連ぬるものなり。而してこれ等の諸丘は何れも海拔千五百五十乃至千六百五十米の地盤より隆起せるものにして、多くは甲斐の地内に在り。

丸山

丸山。富士火口より西北に方りて存し、完全なる圓錐形をなし、高さ二百

西丸山

米、海拔千七百米を有し、火口は山頂にありて稍北に向つて開き、深さ二十米に及ぶ。蓋し一個の噴石丘(Cinder cone)なり。西丸山は丸山の西西北約二

佐原山

の地に在る乳房山にして又東剣といふ。高さ約百米、山頂には火口址を存せず。佐原山は白山を隔つること西南約一軒、富士火口より西北に方り、一小

丸山

圓錐丘にして火口址を存せず。丸山は佐原山の西南一軒半の所に在りて高さ

太平山

七十米。其の火口は山頂に在りて稍大に、直徑百五十米、深さ二十米に及ぶ。太平山は又俗にタカガンドといふ。丸山の西南にありて約二軒を隔つ。高さ

第四側火山線

四十米に過ぎざる緩傾斜の小乳房山にして、頂上には直徑五十米に達する圓形の火口を有せり。

第四側火山線(共心圓狀)は富士火山の南側を劃して海拔千三百乃至千五百米

壱塚

の地に半圓形をなして排列せるものにして、壱塚(檜塚)西白塚東白塚西黒塚平塚次郎右衛門塚及び赤塚の九圓錐丘より成る。

壱塚は富士火口より西方に當り、森林中に突出せる噴石丘にして、高さ二百三十米。其の火口は山頂に在り、蹄鐵狀をなして西方に開き、直徑百三十米、深さ三十米に及ぶ。西方の山腹には又一小火口址あり。其の形圓くして直徑五十米、深さ二十米に達し、土人これを小壱と稱す。

白塚(檜塚)

白塚(檜塚)。相並びて壱塚の南方に在り、高さ何れも百米に過ぎず。滿山深く樹林の蔽ふ所となれり。

西白塚

西白塚。檜塚の東南三軒の所に在り。高さ三十米に過ぎざる小丘にして、全く森林の中に没せり。頂上に小火口を有す。

東白塚

東白塚。前者の東方約四軒の地に隆起し、樹木鬱蒼たる小圓錐丘にして、高さ僅かに四十米、其の火口は楕圓狀をなし、直徑三十米、深さ十餘米に達せり。

西黒塚

西黒塚。東白塚の東方凡そ二軒に在りて、高さ約四十米。傾斜頗る緩慢に

平塚

次郎右衛門塚

赤塚

第五側火山線

して、山頂には圓形の火口を存し、直徑四十米に達す。蓋し一乳房山なり。  
平塚。西黒塚に接して其の東方にある突兀たる圓錐丘にして、高さ百五十  
餘米、海拔千四百九十五米にして火口址を存せず。傾斜は西方急にして、三  
十度を超ゆれども、東面は緩にして二十度に達せず。巨木鬱蒼として滿山を  
蔽へり。

次郎右衛門塚。平塚の東々北にありて富士火口より東南に方り、須山口の  
登山道其の西を過ぐ。高さ僅かに四五十米にして火口址を存せず。

赤塚。前者の東北々約二軒の地に起り、御殿口の登山道其の北方を過ぐ。  
高さ凡そ百二十米に過ぎざれども、富士東麓の裾野よりはよく之れを望見す  
るを得べし。

第五側火山線。輻射状は富士火山の南側にありて、寶永爆裂火口の南方にあ  
る高山に起り、南十度東に走れる火山線にして、高山淺黄塚及び東白塚(既記)  
の三側火山より成る。而して東白塚は本火山線と第四側火山線との會點にあ  
るものとす。

高山

淺黄塚

第六側火山線

腰切塚

御釜塚

東黒塚

高山。寶永爆裂火口の南方、大宮口登山道一合目の東に隆起せる小圓錐丘  
にして火口址を存せり。

淺黄塚。高山の南方約三軒の地に起り、南北に長さ楕圓形の小丘にして、  
高さ僅かに十米を出でず。

第六側火山線。輻射状は富士の東南麓にありて、富士火口より畧南四十度東  
の方向を有し、腰切塚・西黒塚(既記)・御釜塚及び東黒塚等は即ち此の線上に噴出  
せるものなり。

腰切塚。西黒塚の西北に接して起り、深林中に伏在し、山頂には深さ僅か  
に數米の圓形なる火口址を有せり。

御釜塚。西黒塚の東南一軒の所に在る扁平なる一小丘にして、高さ僅かに  
二十米に及ばず。山頂は平坦にして此處に深さ五米許の火口址あり。山側の  
傾斜は緩にして概ね十度を出でず。側火山中最も小なるものなり。

東黒塚。本火山線と第七側火山線との會點に起りたるものにして、御釜塚  
の南方一軒の所に在り。西隣の一側火山鑷子山と癒合して恰も双子火山の狀



をなし、其の間に小鞍状谷を作れり。山頂は稍扁平にして楕圓形の火口を有す。其の長徑凡そ百二十米、短徑約八十米、深さ二十餘米あり。全山樹木密生して岩石の露出甚だ稀なり。

第七側火山線

第七側火山線其心圓狀は富士火山の東南麓に於て東西に走る一線をなし、

鎌子山

海抜千〇五十乃至千百米の所に在り。鎌子山東赤塚(既記)及び猿山之れに屬す。

猿山

高點は海抜千三百〇七米に達す。傾斜は稍急峻にして、二十五度内外を保ち、

火口は直徑百五十米、深さ五十米に及べり。火口の南壁は壊缺してこゝより多孔質鑛鏝狀の熔岩磊々として南方に延布すること約一軒半、其の末端は十里木の北方に達せり。此の熔岩流中には火口近傍に於て一の熔岩墜道あり。里人之れを稱して雷穴といふ。南方に向つて長さ十米、其の断面は圓くして直徑四米を有す。

猿山、鎌子山の東方二軒の地に在り。海抜千百米、山側の傾斜は二十度内外にして、山頂には完全なる圓形の火口を存し、其の直徑八十米、深さ二十

第八側火山線

米あり。第八側火山線輻射狀は東南麓に在りて、西北西—東南東の方向を有し、二

二つ塚

つ塚及び赤塚(既記)の三丘此の線上に在り。

雁穴

二つ塚。寶永爆裂火口の東南に位し、御殿場口の登山路は其の北を過ぎ

り。二丘の相癒合せるものにして所謂双子火山に屬し、位置比較的が高く、且つ火山礫砂の荒野中に起てるを以て頗る人目を惹くに足れり。二丘の中西北に在るものは稍峻峻にして登攀し難く、山頂は平坦にして火口址を留めざれども、東南にあるものは一小火口を存せり。何れも寶永爆裂當時の噴石を以て被覆せらる。

其他の側火山

此の他尙ほ富士の北麓、吉田(甲斐)の西南一軒半の所に於て茫漠たる荒野の中に雁穴と稱する所あり。累々たる熔岩塊の堆積より成り、數多の小孔を有するを以て里人又之れを蟹穴と呼ぶ。蓋し此れ乳房山に屬する側火山相接して成れるものにして、三個の完全せるもの及び二個の崩壊せるもの東北北に走れる一線上に羅列せるものなり。其の最南にあるものは完美なる圓錐丘を

二子山

なし、鑛鏢狀の熔岩は葱皮狀に累積せるを見る。高さ五米餘にして傾斜は四十度乃至五十度に達し、頂上には圓形の小火口を存せり。其の北隣にあるものは高さ畧前者と等しく、山頂には圓形の小火口を存し、東方に向へる長さ十米許の一熔岩墜道あり。其の北即ち群中の中央にあるものは形完全にして緩傾斜をなし、高さ五米に過ぎざるも山頂及び山腹に小火口を存す。之れに接して其の北に在るものは扁平なる丘狀をなして、前者より稍大に、高さ十米、其の頂上には長徑四十米短徑三十米に及べる火口址ありて東方に向つて開き、鑛鏢狀の熔岩を東北に流出したる狀頗る明なりとす。最北に在るは著るしく崩壊して現今は熔岩の堆積一條の溝狀をなして東方に布けるのみ。其の幅八米、深さ二米、長さ八十米ありて、或は熔岩溝の址なるが如し。

富士の西南麓大宮町の東北約九村の所即ち第四側火山線に屬する白塚檜塚の西南に方りて二子山あり。二個の小丘相並立して成れるものにして、其の東方にあるものは高さ二十米、山頂に小火口址を有し、西にあるものは山跡少しく前者より小なりと雖も、直徑三十五米、深さ四米に達する圓形の火口

小富士

熔岩墜道

址を存す。此の兩火山は普通の側火山と其の成因を異にし、平林理學士の研究によれば熔岩中に鬱積せる瓦斯體の爆發に因り生ぜるものにして、恐らくベスツイオ火山の熔岩上に見るボツカ(Bocca)式のものならむといふ。

又東方の中腹、須走口登山道に近く小富士と稱する一小瘤起あり。これ亦一の側火山なるべしといふ。

富士山麓の熔岩中には又屢、熔岩墜道(Lava-tunnel)といふものあり。これ俗に風穴或は胎内潜りと稱する洞窟にして、其の成生は熔岩が流出して凝固するに際し、上流よりの壓力の爲め内部に於ける半固半液の狀態にある一部分が已に凝固せる表皮を破りて脱出し去り、空洞を遺したるに因るものなり。若し此の時に方り其の天井陥落して長溝の狀をなすときは之れを熔岩溝(Lava-sink)といふ。平林學士に従へば富士山麓に於ける熔岩墜道は總て二十餘個の多さに及び、其の長さ短きも十數米、長きは數百米或は稀に一杆に達するものあり。而して其の終端は次第に盛まりて人之れに入るべからず。其の方向は概ね一直線をなして熔岩流の方向と一致すれども稀には彎曲或は分岐せる



もの無きを以て、其の内部の構造稍明ならざるの憾ありと雖も、其の基磐は第三紀層より成れること疑を容れざる所にして、第四紀の初に方り至大至厚なる集塊質泥流は之れを破り噴出して山麓の大部を形成し、次いで種々の熔岩を迸流したるものなり。熔岩は其の種類多からず、緻密堅實にして灰青色をなせる橄欖輝石富士岩及び純黒若しくは濃灰色をなして多孔質なる斜長石玄武岩は其の主なるものにして、後者は實に頂上に於ける八采の峯を形成し、其の南流せしものは愛鷹山の山麓を圍繞し、西流せしものは第三紀層の丘陵に衝突し、更に一部は之れを越えて富士川の溪谷に達し、北走せしものは本栖湖西湖附近に至れり。又東北麓桂川に沿うたる熔岩流は延長三十餘軒に達して遠く猿橋近傍に及び、所謂延暦十八年の噴出に係るものにして、同じく斜長石玄武岩に屬せり。

富士火山は有史時代に於ても屢活動を逞しうし、熔岩を流し、灰砂を降らし、或は爆裂作用等をなせしこと之れを記録に徴するに、凡そ二十七回に及びべり。然れども現今は全く静謐に歸し、山頂の噴汽洞僅かに其の餘喘を示し、

愛鷹山

巍々たる其の英姿は長へに東海の天に屹立せり。

富士火山の東南々に方りて又一個の火山あり、愛鷹山といふ。頂上數峯に分れて北方より之れを望むときは火山たるの形態明ならざれども、東南方よりは裾野の發達頗る著るしきを認め得べし。頂上の主峯越前嶽(千五百〇四米)呼子嶽(千三百十三米)大嶽(千二百五十三米)は南北に連なりて西北部に聳え、位牌嶽(千四百五十七米)愛鷹山(千八百八十七米)は東南部に在りて又南北に並列せり。而して平均の高距千四百米内外を有せる鋸嶽の奇峰東西に走りて、此の二連嶽を結ぶ。其の峯頭は犬牙削立恰も鋸齒の如く、左右の溪谷亦頗る深くして、南方にある熊ヶ谷、北方にある大澤の如きは殊に最も深刻なるものなり。

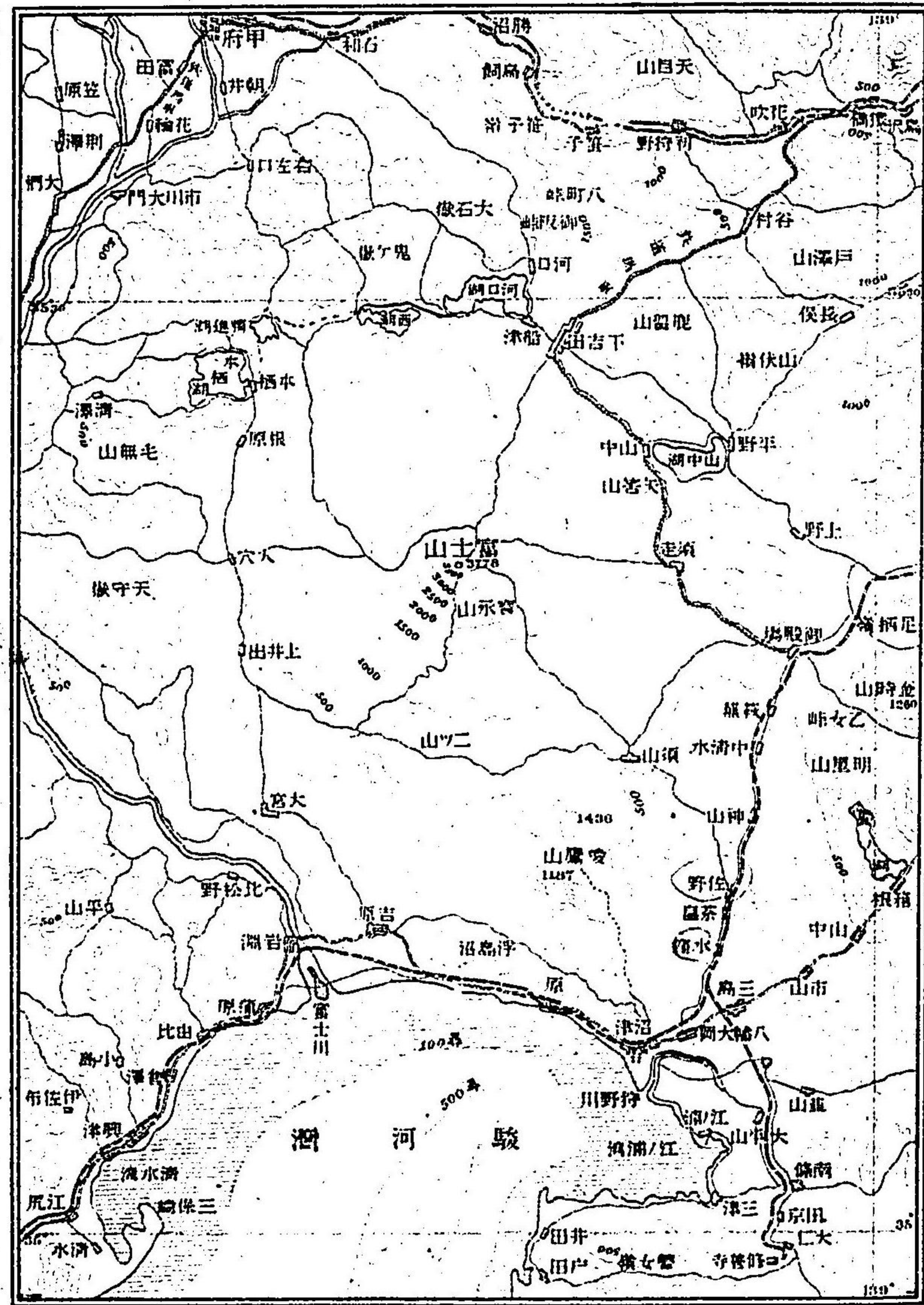
熊ヶ谷の源頭は即愛鷹火山の火口にして、楕圓形の一大窪地をなし、東北より西南に長く、長徑二軒短徑約一軒半を有す。大嶽呼子嶽鋸嶽位牌嶽等其の周壁をなし、何れも其の内壁は六十度以上の懸崖をなし、火口底は四壁より低きこと平均五百米に及び、矮樹密生して岩石の露出甚だ少なく、僅かに其の東壁に於て熔岩灰砂等の成層せるを窺知し得べきのみ。火口内には一の

火口

火口丘をも有せざれども巨大なる岩脈ありて其の中に突起し、周囲の岩石より比較的浸蝕の作用に堪え不規則に起伏せる數多の小丘となりて存するを見る。而して口内の水は相合して神谷澤となり、西南壁を破りて南走し遂に浮島沼に入る。此の噴火口に接して其の北に大澤爆裂火口あり。稍、長き蹄鐵形を呈し、東北に向つて開口し、内壁は急峻にして傾斜四十五度以上に達し、四周の主峰は黒嶽越前嶽呼子嶽鋸嶽位牌嶽等にして、其大いさ略、前者と相如けり。此の爆裂作用は蓋し愛鷹山の山體成生以後に起りたるものにして、現今埋木若しくは神代杉と稱し屢、大澤入口及び黒嶽の北麓に於て採掘するものは實に當時山側に繁茂したる樹木にして、爆裂に際し、岩塊泥土の下に埋没したるものなり。

愛鷹火山の山頂は浸蝕及び爆裂の兩作用により、著るしく其の山貌を損ぜられしと雖も、其の裾野は頗るよく發達し、殊に東南西の三方に於て遠く曳けるを見る。而して此の間を開截せる幅射谷の數甚だ多く、土人之れを稱して百澤といひ、水量甚だ乏しきに係はらず、谷は頗る深刻なるを常とす。こ

富士山附近地形圖



富士山附近地形圖 一之五十分五厘尺

第三版

れ恐らく單に浸蝕の作用に基づくにあらずして、大澤爆裂に伴ひ、輻射状の裂罅を生じ、水之れに沿うて流下し、現今の溪谷となりたるに因るなるべし。其の輻射谷の主なるものは神谷澤・大澤・本澤・門澤・赤淵川等にして、神谷澤は南流して本火山の大火山口瀨をなし、大澤は大澤爆裂火口内の水を集め北流して遂に黄瀬川に入るものなり。

本火山は所謂層状火山に屬し、集塊質泥流其の基部を作り、之れを被覆する熔岩流に凡そ二種の別あり。一は複輝石富士岩に屬し、淡青色緻密にして板状節理著るしく、一は橄欖輝石富士岩にして青灰乃至藍灰色を呈し、概ね塊状をなせるものなり。

足柄山脈

富士山の東方黄瀬川の溪谷を隔て、國の東境をなせる足柄山脈は道志山脈の南方に分岐せるものにして、箱根火山其の中央に起り、國境をなせる金時山(千二百十三米)・丸嶽(千百米)・三國山(千百〇二米)等は其の外輪山にして、其の裾野は緩るく本國內に入れり。而して湖尻峠(千〇五十米)・乙女峠(千〇二十米)等此の連嶺を横斷して駿相の連絡をなし、又金時山の北方には足柄峠(七百四十六

平原

米あり、其の北更に須川酒匂川の上流を隔て、天神山(七百米)あり。主として所謂御坂層と稱する凝灰岩及び層狀輝綠玢岩より成り、之れより山脈西方に延びて、國の東北境を劃し、駿相甲の境に三國山(千三百七十二米)を起し、遂に富士東麓の籠坂峠(千百十八米)に終る。籠坂峠は駿甲の連絡を保つ重要な交通線路にして、馬車鐵道は南方御殿場須走より來り、此處を過ぎて甲斐國吉田谷村に至れり。

國內山嶽多くして平原甚だ少なく、海岸少許の地僅かに平坦なる原野をなせるに過ぎず。大井川下流の北方に開ける平原は第四紀新層よりなり、扇狀をなして稍東西に長く、面積九十餘平方料を占め大井川の支流及び瀬戸川の灌漑する所にして、藤枝燒津の二名邑此の中に在り。静岡附近の平原は安倍川及び瀬名川の灌漑所にして、廣袤百十餘平方料を有し、第三紀層より成る草薙山の小丘其の東南隅にあり。富士南麓の平原は東は沼津の附近より西は富士川の岸に達し、東西の長さ二十五料、南北の幅凡そ四乃至七料、面積凡そ百三十平方料を有し、富士火山より噴出せる火山砂礫の堆積より成る。其

水系

田代川

安倍川

の中央に浮島沼ありて四近卑濕の地多く、又此の平原の東南隅には香貫山徳倉山鷲頭山等の小丘あり。

國內の地勢北に山を負ひ南海に瀕するを以て、河川は概ね源を北方に發し南方若しくは東南に流走して駿河灣に朝宗するを常とす。而して其の著るしきは大井川・安倍川・富士川等にして、其の他尙ほ瀬戸川・興津川・潤井川及び黄瀬川等の小流あり。

大井川は既に遠江國の部に於て詳記する所ありたれば茲には單に其の上流にして國內にある田代川に就いて述べんとす。田代川は源を駿甲の境なる白峰山附近に發し、白峯山脈及び赤石山脈の間に狹隘なる縦谷をなし、古生層に屬する砂岩粘板岩輝綠凝灰岩等の地を貫きて南流すること凡そ六十料、梅地村附近より以下駿遠の國境を流れて大井川と稱せらる。川は概ね急流激湍をなし、兩岸殆んど平地なく、人煙頗る稀疎にして殊に其の上流地の如きは群山相重疊し、交通最も困難にして人跡未達の地亦少なからずとす。

安倍川(第十二圖乙)は上流を大河内川といふ。源を甲駿の界なる安倍嶺(千四百

瀬戸川

四十四米近傍に發し、安倍郡の東部を南方に流るゝこと二十餘軒、中澤村に於て西北より來る西河内川を容れ、之れより以下安倍川と稱せらる。かくて又更に南流すること約十八軒、静岡の近傍に於て西北々より來る一大支流、龍科川を併せ、之れより東南流して駿河灣に注ぐ。全長凡そ四十五軒あり。下流静岡附近に於ては其の左右に多少の平地を存すれども、兩岸多くは峻峻なる山嶽より成り、川は其の間を迂回曲折して流れ、流勢駛くして水淺く、殆んど舟楫の便を缺く。加ふるに溪谷甚だ狹隘なるを以て、屢洪水を起して水害を及ぼすことあり。河身三角洲の發達著るしく、殊に静岡附近及び河口近傍に於て其の甚だしきを見る。

大井川安倍川の間瀬戸川の支流あり。源を御坂層の丘陵地檜嶺朝日奈山近傍に發し、東南流して藤枝町の南方を過ぎ、之れより東北東に轉じ燒津の北方に於て海に注ぐ。長さ凡そ二十餘軒に過ぎず。安倍川の東方に興津川あり、甲斐の界なる徳間嶺八百十九米附近に發し、東南流すること約十八軒、興津の東方に於て海に入る。

富士川

富士川は遠く甲斐國より來るものにして、國內を流るゝこと僅かに十八軒に過ぎず。富士庵原兩郡界を東南に流れ、富士の西麓を南流する芝川の水を合はせ岩淵の南約四軒の所に於て海に注ぐ。水流の急なること安倍川に劣らずと雖も、上流甲斐の鵜澤より岩淵に至るまで約六十軒の間舟楫の便あり。其の河口には數個の三角洲を作り、川は二三の支流を分岐し、河床の幅三軒に及ぶ。支流芝川の上流、白絲村宇原の北方には富士山麓の勝景と稱せらるゝ白絲の瀧(第九圖)あり。數千條の白絲を懸けたるが如く、其の中大なるを雄瀧雌瀧といひ、小なるものは其の數甚だ多く、恰も小管より噴出するが如し。これ粗鬆なる富士火山礫中に滲透したる水が集塊岩の空隙を通じて隨所浸出するに由るなり。尙ほ富士川の上流に就いては甲斐の部を参照すべし。

潤井川

潤井川は富士の西麓なる上井出村附近に發源し、裾野の諸水を集めて南流し、大宮町に至り、こゝに神田川を容れ、之れより東南に轉じて富士西南麓の溪流を合し、吉原町を過ぎ、浮島沼の排水路沼川の水を併せて後直ちに海に入る。高潮若しくは激浪の際には海水逆流して内地に入り、害を及ぼすこ



黄瀬川

と少なからざるを以て、河口に閘門を設けて之れを防げり。長さ僅かに二十五軒に過ぎざれども、灌溉の利最も多く、殊に神田川の流域地は農産物特に饒多なる所あり。又大宮及び入山瀬村に於ては其水力を利用して紡績製紙等の工業を營める所あり、潤井川は往時大宮町より直ちに南方に向ひ富士川に注ぎたるものにして、其の水路は今日礮礮よりなれる一條の低地となりて存し、明かに河流の遺跡たるを示せり。

黄瀬川は富士愛鷹の兩火山と箱根火山との間を南流するものにして、愛鷹火山の爆裂火口より發する大澤、富士山東南裾野の諸水及び箱根火山の西北外輪山の溪流を合して成るものなり。愛鷹火山の集塊泥流及び富士火山の熔岩噴石上を流れて浸蝕作用を逞しうし、激湍急瀬を作り、或は碧潭をなし、佐野瀑圍、鮎壺瀧、屏風岩等の奇勝を生ぜり。長さ凡そ二十五軒、沼津の東方に於て狩野川に合す。狩野川は伊豆國より來り、國內を流るゝこと僅かに十軒、沼津の近傍に於て海に朝す(第十四圖中)。

酒匂川(相模)の上流をなせる須川は黄瀬川と相對して御殿場近傍を其の分水

須川

湖沼

界とし、富士の東麓及び箱根外輪山西北側の細流を合し、藤山村附近より流れ少しく大となり、奔湍急流をなし、第三紀層の山間を開鑿して東流遂に相模國に入る。國內を流るゝこと僅かに十餘軒とす。

浮島沼は愛鷹山の南麓に在りて、東西三軒、南北一軒餘。四近沼澤卑濕の地多く、又泥炭を出す所あり。これ蓋し往時は湖面尙ほ廣大なりしも、水は次第に減退し沈積物は愈増加して今日の狀をなせるに因るなり。小藤博士の説に據れば沼津より鈴川田子の浦を経て岩淵に至る白沙青松の長汀は曾て浮島沼の砂嘴たりしものにして、浮島沼は之れに依りて外海と隔絶し、愛鷹山南麓の諸溪流皆此の處に滯溜せしなりと。沼中には男鹿島、女鹿島の二小島あり。細砂より成りて草根之れを膠結し、松樹其上を點綴す。これ即ち浮砂(Feibe-sand)と稱するものにして、浮島沼の名蓋し之れに基づけり。四近の水田亦多くは浮漂せるものにして、若し大雨に際するときは轉移する恐あるを以て、竹棍を立て、之れを繫留することあり。湖水は遂に西に流れて鈴川村

の北を過ぎ、南に折れ酒井川と合して海に入る。淺畑沼は安倍郡に在りて、静岡の北四村の所に位す。多少三角形をなし。周圍僅かに三村に過ぎず。

甲斐國

甲斐國

- 總 説…103頁。 山 嶽…105頁。 西部の山嶽…105頁。 北部及び東部の山嶽…105頁。
- 御坂山脈…105頁。 毛無山脈…112頁。 富士川沿岸の丘陵…110頁。 茅ヶ嶽火山…113頁。
- 茅ヶ嶽岩火山…113頁。 茅ヶ嶽新火山…114頁。 鎗峯火山…114頁。 平 原…115頁。
- 甲府盆地…115頁。 水 系…116頁。 釜無川…116頁。 笛吹川…117頁。 富士川…116頁。
- 大柳川…117頁。 早 川…117頁。 桂 川…118頁。 湖 沼…118頁。 山中湖…118頁。
- 河口湖…118頁。 西 湖…118頁。 精進湖…118頁。 木西湖…118頁。

甲斐國は駿河の北に位し、西は駿河信濃に接し、北は信濃及び武藏と界し、東は武藏相模の二國に對し、毫も海岸線を有せず。東西凡そ八十二村、南北約六十乃至八十村にして廣袤四千三百六十平方村を占め、其の全部山梨縣に屬す。山巒重疊して四境を繞り、平坦の地は僅かに國の中央なる甲府近傍の盆地に限れるを以て、國の地形概して四方に高く、中央低窪して其の状恰も

總説

播鉢に類せり。而して此の間を流走する諸川は其の上流の大部は何れも甚だ急流にして、狹隘なる溪谷を奔下し、中流以下稍緩となれり。是れ即ち國號の因つて來る所にして、蓋し甲斐は峽の意に基づけるものなり。今山脈起伏の趨勢を大觀するに、國の西境には一條の山脈北方信濃諏訪郡の南方にある諸山嶽より延亘し來り、南走して平均二千米以上の高距を有せる一連の屏障を作り、仙丈嶽白根山等の高峯を起し、其餘脈は北中南巨摩三郡に蜿蜒して、嶮嶽峻峰相接して隆起し、國內最も高峻なる山嶽に富める地をなせり。更に翻て北方を顧みれば、國境をなして東西に連なれる山脈は西は八ヶ嶽鎗峯山に起り、金峯山甲武信嶽を起し、常に二千米以上の高距を保ちて益、東し、更に東南に轉じて少しく低くなり、遂に甲武相の國境に聳ゆる三國山に至る。この山脈より岐出せる山嶽は南北に連亘して東山梨北都留兩郡の山地をなせるを見る。

國の南方には雄大なる富士火山を聳起せるありて、其の火山脈は西北々に延びて、甲府の北方に茅ヶ嶽火山を起し、更に甲信の國境に鎗峯山八ヶ嶽嶽等

の諸火山あり。富士火山の西方には毛無山脈の一部蜿蜒し、東方には道志山脈東西に連亘し、更に其の北方には御坂山脈東西に連なれり。かくの如く山嶽其の四周を圍繞して、中には所謂甲府盆地を控ゆるを以て、國內の細川溪流は概ね一旦内に向つて流れ、釜無川笛吹川の二川によりて甲府盆地に集まり、更に統一して富士川の巨浸を作り、南走して毛無山脈と赤石山脈との間を過ぎ、駿河國に入りて遂に駿河灣に注ぐ。唯、國の東部南北都留郡の諸水は相集りて桂川となり、東走して相模國に入り、相模川となる。

國內地形の大勢は以上略叙せしが如し。これより其の各部に就きて、少しく詳記する所あらんとす。

甲府盆地の西縁に當り、略南北の方向に流る、釜無川及び其の下流なる富士川の西方に連亘する一帯の山嶽は、主として秩父古生層に屬する輝岩珪岩輝綠凝灰岩綠石英板岩石灰岩粘板岩及び砂岩等によりて其の山骨を作り、其の東部に於ては所謂御坂層に屬する凝灰岩凝灰質砂岩礫岩及び層狀珪岩等の累層を戴き、又所々に花崗岩の露出せるあり。岩層の走向は概ね南北にし

山嶽  
西部の山嶽

て山脈の趨勢と略一致せるを見る。地勢一般に高峻にして、略二千米以上の高距を保ち、嶮嶮峻峯相接して起り、其の間毫も平坦の地を存せず。是れ等の中、國の西境に連亘するものは赤石山脈の一部なる所謂白峯山脈と稱するものにして、秩父古生層より成り、北方信濃の入笠山千八百〇七米釜無山二千五百五十一米等に起り、國境に來りてこゝに白崩山仙丈嶽二千六百九十九米三峯嶽等を起し、更に最も高峻を極むる北嶽三千五百五十一米となり、益南して荒川嶽三千百二十九米農鳥山三千〇四十二米等を生ず。之れより連嶺尙ほ二千米内外の高距を保ちて南方に延び、再び南嶽七面山千七百七十三米等の嶮峯を起し、遂に駿河國に入る。此の間溪谷の大なるものなく、交通嶮惡にして、人跡の達せざる所あり。

白峯山脈の北部にある白崩山仙丈嶽の東方には、粗粒の閃雲花崗岩より成れる一山塊あり。秩父古生層を貫きて噴出したるものにして、駒ヶ嶽鳳凰山地藏嶽等の諸峯を隆起せり。駒ヶ嶽は即ち群中の最高峯にして、仙丈嶽の東北に聳え、北巨摩郡に屬す。海拔三千一米、東北釜無川の溪谷を隔て、八ヶ

嶽火山と對峙し、其の高峻を競ふもの、如し。鳳凰山は駒ヶ嶽の東南に在りて北巨摩中巨摩の兩郡に跨り、高さ二千九百十二米。地藏嶽は之れに接して其の南に聳ゆ。又駒ヶ嶽の北方には鞍掛山千四百八十三米の小隆起あり。是れ等の諸峯何れも山勢巍峨として高く天に聳え、登路絶えてなく、殆んど登臨するを得ず。

白峯山脈の東方にある山嶽は、白峯山脈に比して高距小に、千五百米内外の高距なれども、其峻峻の度は殆んど彼れに劣らず。之れを構成せる御坂層は概して南北に走り、其西部に於て一の向斜軸を有し、西縁早川附近に於ては、斷層によりて古生層の白峯山脈と分たれたり。山嶽の稍、著るしきものを舉ぐれば北方釜無河畔圓井驛附近の圓井山千〇六十四米、荒倉山等あり。其の南方には藥師嶽、甘利山等ありて、地藏嶽の東方に連なり、北巨摩中巨摩の郡界をなす。藥師嶽の南方には奈良田嶺千五百六十米を隔て、大丸山二千二百米の峻峯中巨摩南巨摩の郡界に聳え、其の南方七つ嶺千八百八十八米附近には十谷林山を起し、更に其の南には御殿山あり。御殿山の南方は山勢次第に

北部及び東部の山嶽

低夷し、一旦早川の溪谷に絶たると雖も、其の南方には身延山千九百九十米、鷹取山千百〇七米等を隆起せり。身延山は富士川岸に聳え、其の南麓に日蓮宗の巨刹久遠寺のあるを以て其の名世に著はる。

國の北部及び東部に群起せる山嶽は秩父山塊の一部にして、秩父古生層に屬する砂岩粘板岩及び之れ等を貫きて噴出せる花崗岩石英閃綠岩等より成る。更に此地方を細説せんに、國の西北隅信濃との界には八ヶ嶽火山、其の東方には鎗峯山の舊火山ありて、其の東には横尾山あり。其の東方には南方甲府盆地より釜無川の大支流鹽川に沿ひて北方千曲川上流地方に通ずる黒森嶺千四百七十七米あり。黒森嶺の東には黒雲母花崗岩及び石英閃綠岩より成れる一大山塊ありて、大雙里山二千四百米、八丁山二千二百二十八米及び金峯山二千五百五十一米等あり。其の東方には奥仙丈山二千四百九十七米、國司嶽二千五百七十二米あり。前者は花崗岩閃綠岩其の西半部をなし、東半部は粘板岩にて成り、後者は全く粘板岩より成る。金峯山地方は古來水晶の産出を以て有名なるものにして、其の著るしきは金峯山の南方にある八幡山及び黒平附近

とす。又此の近傍に重石を産する所あり。金峯山よりは一支脈西南に分れて八幡山・木賊山(千九百二十九米)鳥井嶺となり、遂に茅ヶ嶽火山に接す。國司嶽の東北には甲武信三州に跨る甲武信嶽(二千四百五十八米ありて、之れより山脈東南東に走り、甲武の境をなして大洞山(二千〇四十八米)雲取山(二千〇一米)等を起す。之れより東南に走れる山脈は馬背状をなして連亘し、七石嶽・ミト嶽等を生じ、遂に甲武相の境に隆起せる三國山に盡く。甲武信嶽大洞山の間には雁坂嶺二千〇八十二米あり。これ秩父甲府の兩盆地を連絡する唯一の交通線路の衝に當り、路は頗る峻難を極む。雁坂嶺の南方には石英閃綠岩より成れる山塊弧状をなして、南方遠く甲府の東南邊に延び、東山梨郡の略中央に高芝御殿山・竹森山等を生じ、北都留東山梨兩郡の界には雁ヶ腹摺山(千九百九十八米)木賊山(千八百三十八米)田野山・京戸山等を起し、更に東八代郡の北部には駒ヶ嶽(千三百五十四米)釋迦ヶ嶽(千五百九十六米)等を生ず。而して田野山・京戸山間には西方甲府盆地と東方柱川流域地との交通を連絡するに最も重要な笹子嶺(千〇五十八米)あり。此の附近石英閃綠岩及び角岩等より成り、山

道は曲折紆回して羊腸の如し。今は甲武鐵道此の地を過ぎり、本邦第一の大隧道之れを貫けり。この山塊の東方には小佛古生層より成れる山群ありて北都留郡の大部を占め、其の著るしきものは郡の西境にある大菩薩嶽(二千〇二十六米)初鹿野山及び大峯山・桃栗山(千〇十五米)雨降山等とす。

この山群の南方桂川の溪谷を隔て、南都留郡に起伏する山嶽は高峻の度大に減じて、高距離概ね千米内外に過ぎず。主として御坂層に屬する凝灰岩及び凝灰質砂岩より成り、小澤山(九百八十二米)島野山(九百七十七米)戸澤山(千四百九十七米)等稍著るしく、尙ほ甲駿相の國境に明神山(千二百二十九米)三國山(千三百七十二米)等あり。三國山の西方には籠坂嶺(千百十八米)あり。甲駿を連絡する重要な交通路をなせり。

富士の山陰にある河口湖・西湖の北方には御坂山脈蜿蜒として東西に延亘し、西湖の盆地桂川上流の流域地方と甲府盆地との分水嶺をなす。主として御坂層に屬する岩層より成り、御坂層の名稱は此の山脈の名に基づけるなり。此の山脈中稍著るしき隆起點を三峯山・毛無山・御坂山・笹ヶ峯・鬼ヶ嶽・大嶽等とす。

御坂山脈

毛無山脈

富士川沿岸の丘陵

山勢稍急峻にして、概ね千五百米内外の高距を有すれども、數條の道路此の間を通じ、南北の交通敢て甚だしく不便なるにはあらず。其の嶺の重もなるものは之れを東方より數ふれば谷村より北方藤野木に通ずる八町嶺千四百六十九米、南方河口より藤野木に至る御坂嶺千五百七十米及び大石嶺懸嶺等にして、其の中御坂嶺最も著るしく、河口湖其の下に横はりて一碧鏡の如く、富嶽は其の南方に聳えて影を湖心に投じ、風景亦絶佳なりとす。

富士山の西に接し甲駿の界をなして南北に走れる毛無山脈中に於て、稍高きは毛無山千〇四十五米天子嶽等にして、既に駿河の部に於て記述したり。

富士川の西岸にある丘陵地は第三紀層に屬する砂岩泥板岩礫岩及び凝灰岩等より成り、岩層の走向は南北を指すもの多けれども、或は西南若しくは東西に偏し、傾斜亦必しも一定せず。小丘低巒相接して起り、些少の平地を留めざれども、高距何れも小にして千米を超ゆるもの殆んどなく、唯其の南隅にある篠井山(千五百米)の殊に聳立せるを見るのみ。

富士火山脈は略國の中央を貫きて、東南々より西北々に走り、富士山茅ヶ

茅ヶ嶽火山

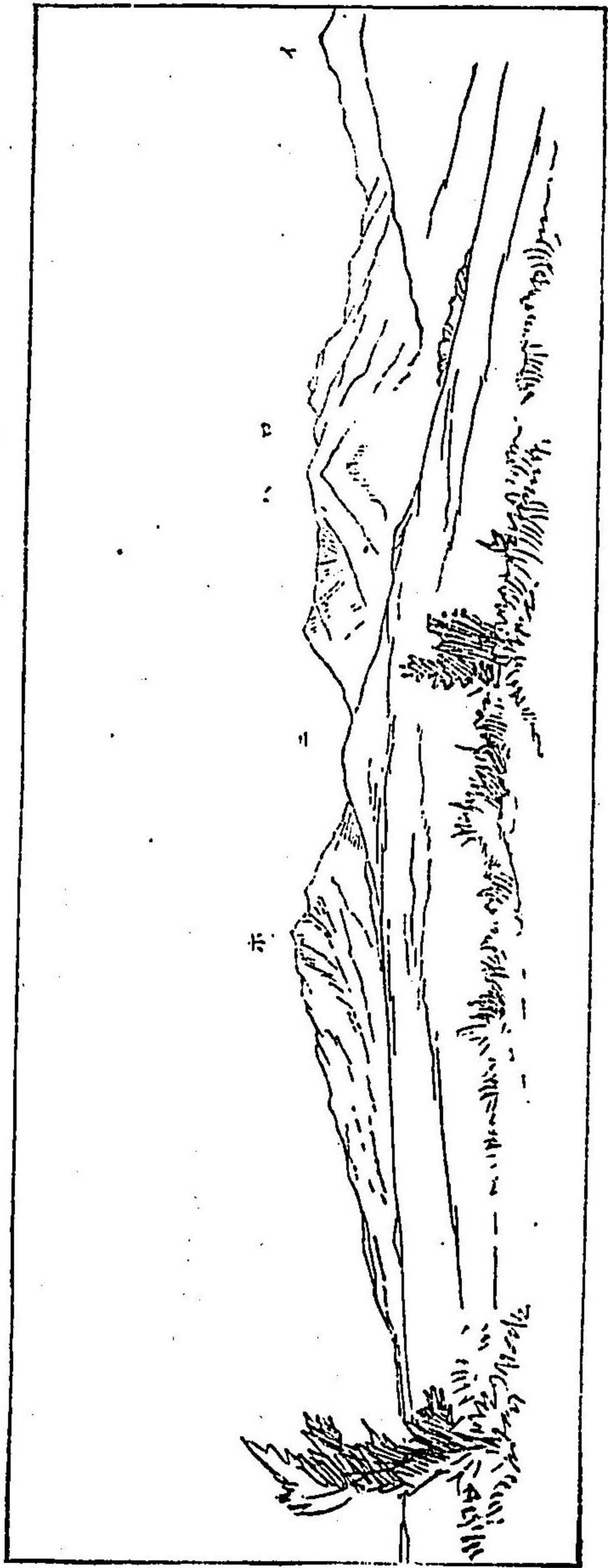
舊火山

嶽鎗峯山及び八ヶ嶽等の諸火山之れに屬す。是れ等の諸火山中富士火山は甲駿の境に在りて、既に駿河の部に於て詳記せしが如し。而して八ヶ嶽火山は其の大部信濃國に屬するを以て、之を後に譲り、今こゝには茅ヶ嶽及び鎗峯山の兩火山に就いて述ぶべし。

茅ヶ嶽火山は甲府盆地の北隅に方り、古生層の粘板岩を破りて聳起せる火山にして、北巨摩中巨摩の兩郡に跨る。甲信の界に蟠踞して花崗岩より成れる金峯山山塊の西南縁邊に噴出したるものなるを以て、其の裾野の發達は四方に於て均一ならず。加ふるに一火山體成れるの後、更に其の東部に偏して新火山の噴出ありたるにより、東西兩部各其の相貌を異にし、東半は地形錯雜せりと雖も、西半は廣大なる裾野展延して、遠く鹽川の齋谷に及び八ヶ嶽火山の裾野と相接し、甲府盆地に終れり。

西部の舊火山は山頂茅ヶ嶽金ヶ嶽烏帽子嶽等に分たれ、茅ヶ嶽は西北に、烏帽子嶽は南方に、金ヶ嶽は其の東北に在り。其の最高點は金ヶ嶽にして、海拔千六百六十米に達す。以上の諸峯は總てもとこれ一火口壁を構成せしも

茅ヶ嶽火山南方の野裾より金ヶ嶽黒富士等を望む  
金ヶ嶽 (イ) 金峯山 (ロ) 黒富士 (ハ) 御嶽 (ニ) 大嶽 (ホ) 金ヶ嶽



のなれども、多年削磨作用の結果、今や全く舊態を留めざるに至れり。加之  
溪谷の源頭は所々に彎形の絶壁を作りて、宛然火口壁の觀を呈し、又金ヶ嶽  
烏帽子嶽の間には一大溪谷ありて、瞥見すれば茅ヶ嶽烏帽子嶽は外輪山にし  
て、金ヶ嶽は其の中央火口丘たるやの趣あり。本火山は其の東方は新火山の  
被ふ所となり、北は鹽川を隔て、古生層の山脈に擁せられ、南は甲府以北に  
發達せる花崗岩の山塊によりて限られ、唯、西南の一部甲府盆地に面して、こ  
ゝに緩慢なる裾野を曳き、淺尾原を作れり。本火山を構成する岩石には、輝  
石富士岩及び角閃富士岩の別あり。前者は黝色或は褐色にして、粗面質石理  
を有し、主として本火山の山骨を作り、金ヶ嶽烏帽子嶽等皆之れより成り、  
後者は消、後れて噴出したるものにして、灰白色を呈し、石理粗鬆にして多少  
浮石質を帯べるものなり。

側火山

舊火山の西北麓には二個の側火山を噴出し、共に完全なる圓錐丘にして、  
茅ヶ嶽の西北麓なる根小屋村附近に在り。一を行人山ギョウジンヤマといひ、一を城山とい  
ふ。二者相隣りて起り、何れも塊狀火山に屬し、其の熔岩は往々板狀若しく

新火山

は柱狀節理を呈せる輝石富士岩なり。  
 東部新火山は舊火山の東腹を破りて、噴出したるものにして、黒富士大嶺御嶽等の諸峯に分る。黒富士は東北に在りて其の北麓に長窪嶺千五百四十八米あり。大嶺は西方に在りて、其の西金ヶ嶽との間には御嶽より信州地方に至る間道を通ず。御嶽(第十二圖)は大嶺の南方に在りて、山麓に金櫻神社あり。古來甲斐の勝區として稱せらる。本火山の噴火口は全く破壊し盡して、今や其の原形を捕捉するに由なしと雖も、黒富士大嶺間は想ふに其の遺址にして、黒富士の西方著るしく凹入せる溪谷の如きは、蓋し火口の一部たりしものなり。御嶽の如きは其の實黒富士より南方に延亘せる山脊の一部に過ぎざりしものなれども、浸蝕の爲め全く隔絶して、突兀たる一孤峯をなし、恰も側火山の如き觀をなせり。所謂御嶽の名勝昇仙峽は本火山の南方荒川の上流にありて、此の新火山とは地形上の關係なく、之れに就いては後章絮説する所あるべし。

鎗峯火山

甲信の界にある横尾山鎗峯山(千七百八十二米)平澤峠近傍は古生層に屬する

平原

砂岩粘板岩の累層を破りて噴出せる輝石富士岩より成り、往時は儼然たる一火山たりしものにして、其の噴出物は東は黒森峠より西は平澤峠に及び、南は遠く鹽川の溪谷に及び。然れども今は其の形態大に破壊して、火口の遺址更に知るべからず。

國內平野甚だ少なく、唯、甲府四近に於て僅小なる平地を開くに過ぎず。これ即ち甲府盆地と稱するものにして、四周山嶽によりて圍繞せられ、海拔高距二百五十米内外を有し、面積約二百平方料を占む。第四紀層の塩礫砂礫等より成り、釜無川笛吹川及び其れ等の支流によりて灌漑せられ、地味豊沃にして田園よく開け、國內第一の名市甲府及び勝沼垂崎市川大門嶽澤等の名邑此の中に横はり、人口の密度最も大にして、實に甲斐國の中心をなせり。此の地山嶽丘陵によりて其の四圍を閉され、地質は水中の沈積物より成り、又地下一米内外を穿てば腐蝕せる蘆荻の類を出だし、加ふるに周圍の山腹には段丘所々に存するを以て稽ふるに、此の地往時は曾て湖底たりしものなり。甲斐國誌亦此の事を記し、養老年間僧行基が湖水の南岸を鑿ちて、水を富士



水系

釜無川

川の溪谷に放下し、以て乾土を得たるなりとせり。  
 又國の西北隅、釜無川及び其の支流鹽川の間には、甲信の境上に聳ゆる八ヶ嶽火山の裾野廣く延亘して、一大廣野をなせり。主として破片的噴出物より成り、溪流の兩側に於て、好く其の露出を認むるを得べし。此の廣野の西南縁即ち釜無川の東岸に於ては、西北風來附近より東北韭崎に至るまで、凡そ二十餘軒の間、高さ六七十米の絶壁をなして河水に臨む。是れ所謂七里巖と稱するものにして、總て凝灰質集塊岩より成り、塊片の大いさ一米立方を越ゆるもの少なからず。これ蓋し八ヶ嶽火山の溢流したる泥流に外ならざるなり。  
 國內の河流其の大なるものは、釜無川、笛吹川及び桂川等にして、釜無川は遂に相合して富士川となり、南流して駿河國に入る。  
 釜無川は源を國の西北隅に蟠踞せる駒ヶ嶽の西北麓に發し、甲信の界を東北々に流れ、八ヶ嶽火山の火口瀨なる立場川を容れて後急に東南に折れ、八ヶ嶽火山裾野の末端と駒ヶ嶽山塊との間を流れ、韭崎町に至りて始めて甲府

笛吹川

盆地に出で、こゝに鹽川を合す。鹽川は八ヶ嶽火山東南側の諸水及び鉦ヶ峯火山茅ヶ嶽火山等の諸溪流を併せ、東南々に走るものなり。之れより釜無川は韭崎の南方數軒の所に於て、更に西方急峻なる大丸山藥師嶽附近より奔下し來る御勅使川を合して南流し、市川大門町附近に於て笛吹川と合す。長さ凡そ五十五軒。水勢頗る急にして、土砂を流すこと夥だしく、積洲多く存し、河床四近の平地よりも高きを常とす。従つて平時は水量甚だ少なきも、一朝大雨に會すれば、濁流滔々として、川は忽ち數百米の廣さとなり、堤防を潰決して田園に氾濫すること少なからず。殊に一支流御勅使川の如きは、其の害特に甚だしく、古へ屢、勅使を遣はし、治水の事を司らしめたるを以て此の名ありといふ。御勅使川の下流地方には標式的なる扇狀の平地を開けり。  
 笛吹川は源を遠く甲武の界なる雁坂嶺近傍に發し、花崗岩石英閃綠岩等より成れる山嶽の間に狹隘なる谷を作り、下釜口上釜口等の瀧をなし、東山梨郡の略中央を西南々に流下し、石和村の東北方に於て甲府盆地に出で、こゝ

富士川

に東方大菩薩嶽に發源して、東山梨東八代の兩郡界に沿ひ、西流する日川を合す。之れより河流稍緩となり、甲府盆地の南端を西南に流れ、田園を灌溉し沃土を穰生す。之れより更に甲府の南數村の地に於て、北方金峯山に發源し、西山梨中巨摩の郡界に沿ひ南流する荒川を合し、益西南流して、遂に釜無川に合す。長さ凡そ四十五村あり。釜無川に比すれば流勢稍緩にして暴溢の患少なく、且つ釜無川が浸蝕作用を逞しうして、土砂を流すこと夥だしきに反し、此れは土砂を冲積して積極的作用を營めり。然れども支流多く、受水區域も廣大なるを以て、若し大雨に際して水量を増すときは、其の減水釜無川に比して遙に遅しといふ。

富士川(第十三圖)は釜無川笛吹川二流の市川大門町の北方に於て相合してより以南、駿河灣に朝する間の名稱にして、白峯山脈と毛無山脈との間に起伏せる第三紀層の丘陵地を流れ、其の兩岸に平地甚だ少なし。略、岩層の層向に平行して流るゝを以て、其の流路局部に於て多少の彎曲屈折ありと雖も、概ね一直線をなし、西八代南巨摩の兩郡界を劃して正南に走り、遂に駿河國に入

大柳川

早川

る。市川大門より河口に至るまで長さ凡そ六十三村、其の中國内に屬する約四十五村とす。水勢頗る急にして、河床の傾斜二百分の一に達し、又夥だしく礫洲の發達せるを見る。市川大門の西南五村を隔つる鵜澤町より、河口駿河の岩淵に至るまで舟楫を通ずべし(第十四圖)。此の間水路約五十五村、僅かに六時間を出て下るを得べく、其の急流なること以て想ふべし。然れども川を溯るに方りては、舟夫は舟に綱し、岸に沿ひ之れを挽き上げざるべからずして、煩勞甚だしとす。されど甲駿を連絡する重要交通線の一たるを失はず。

富士川に收容せらるゝ支流の大なるものは、概ね西方に在りて、大柳川早川大城川等稍著るしきものなるべく、東方には蘆川あり。大柳川は十谷林山附近の水を集め、鵜澤の南三村の所に於て本流に合するものにして、其の沿岸十谷村五開村に於ては、會て土地の陥落崩壊を來たして田園を害したることあり。早川は甲信駿の國境に聳立せる仙丈嶽三峯嶽等に發源し、白峯山北嶽荒川嶽農鳥山等の總稱と駒ヶ嶽山塊との間を東南に流れ、更に南に轉じて、

桂川

秩父古生層及び御坂層より成れる山嶽の間を奔流し、大島村近傍より水路東に折れ、第三紀層地を貫き、飯富邑に於て富士川に入る。長さ凡そ四十五軒。流勢頗る駛く、巒巒岸に逼りて急に起ち、兩岸些少の平地を貽さず。殊に其の上流地方の如きは峻嶽群起して交通頗る嶮難を極め、榛蕪蕪穢人跡未達の地少なからず。此れ等の諸支流は何れも山間の溪水にして、谷甚だ狭きを以て、大雨の際は水暴かに漲溢して橋梁を流し、屢兩岸の交通を杜絶す。加ふるに浸蝕作用甚だしく、砂礫を流出すること頗る夥だし。

平林學士の説に據れば、富士川溪谷の西方に聳立して南北に走れる峻嶺嶽は一の斷層面なれども、富士川沿岸の第三紀層に於て之れを見るに、其の流路は決して斷層線と認むべからず。而して往時甲府盆地の湖水たりし時の排水路たりしを以て考ふるに、是れ蓋し水蝕谷ならむといふ。

桂川は國の東部に於ける諸溪流を合して東流する者にして、源を富士山東麓の山中湖に發し、富士東北の裾野を西北に流れ、吉田町に於て東北に轉じ、急瀬をなし、延暦十八年(?)の噴出に係ると稱する猿橋熔岩斜長石玄武岩を穿

湖沼

ちて奔流す。其の浸蝕最も著るしく、所々に岨々たる絶壁を作り、豪宕の趣をなせり。十日市場田原の瀧の如き即是れなり。川は郡内の主邑谷村を過ぎ、大月驛に於て、西方笹子嶺より發する笹子川及び西北木賊山近傍より來る眞木川を容れ、東方に折れ、葛野川を合して猿橋に至る。川は此處に來りて幅最も窄く、兩岸相逼りて斷崖壁立、一峡谷をなし、所謂猿橋の奇勝を作れり。川はこれより次第に其の水量を増し、更に北方より來る都留川を併せて後遂に相模に入り、相模川となる。國內を流走すること凡そ五十軒。其の水源山中湖にあるを以て、流水の干涸することなく、沿岸の田園灌漑の利を受くること少なからず。唯、谷村以下に於ては河床大に低くして、其の用をなすこと少なしとす。

國內湖沼の稍大なるものは、山中湖河口湖西湖精進湖本栖湖等にして、國の東南部にありて富士山麓を環れり。此れ等の諸湖は往時相連續して、半環形の一大湖をなせしものなれども、水量の次第に減ぜしと且つは富士熔岩の流下し來りたるにより、遂に隔絶したるものなり。これ等の中、山中湖河

山中湖

口湖は南都留郡に屬し、西湖は東八代郡に、精進本栖の二湖は西八代郡に屬せり。  
山中湖は以上五湖の中最も東方に位し、其の形の似たるを以て又三日月湖或は臥牛湖と稱せらる。東西の長さ五軒弱、南北の最も廣き所約二軒餘にして、周圍凡そ十三軒、面積約十五平方軒を有し、其の水準は海拔九百八十二米に達す。湖岸屈曲少なく、緩なる弧線を畫ける一條の砂濱にて相連なり、唯湖の東北端に於て北岸より東北に向ひ突出せる一條の長岬あり。長さ約六百米にして附近の湖底は稍、淺しといふ。其の北岸には熔岩を隔て、御坂層より成れる丘陵起伏すれども、南西岸は緩慢なる富士の裾野にして、美麗なる廣野をなし、又湖東には卑濕なる平野ありて、往時の湖底たりし形跡を存せる所あり。湖の四近には平野山中等の寒村あるに過ぎずして、境頗る幽邃、風光亦明媚なり。殊に南方籠坂嶺より之れを瞰下すれば、湖面波靜かにして明鏡の如く、御殿場吉田間の鐵道馬車は湖畔の裾野を往復せるを見るべし。水流の此の湖に注入するものは主に其の東岸にありて、何れも細流に過ぎず。

河口湖

其の排水口は西端に在りて、ヤナ尻と稱し、北に流れて桂川の水源をなす。又ヤナ尻の東方約一軒の所に起り、背後の山を貫きて内野村に至る長さ四軒餘の疏水暗渠ありたれども、今は大に破壊して排水量甚だ少なしといふ。湖底は頗る淺き單純なる盆地にして、四周の水際より深部に移る間も頗る緩慢なる傾斜を以てし、中央の大部分は深さ僅かに十四米内外にして、湖の南岸に近き最深點と雖も二十米に過ぎず。此の湖冬期は全く堅氷に鎖さると雖も、湖心及び山中村に近き所に於ては、湖底より温水の湧出あるにより、又排水口附近に於ては水の流動するに因り、結氷を見ざる所あり。  
河口湖(第十五圖甲)は國內の湖沼中最大のものにして、湖岸甚だ屈曲出入に富む。東西の長さ産屋崎より長濱に至る四軒半にして、南北の幅二乃至三軒を有し、周圍約十九軒に達し、湖面の海拔高距は八百三十米に及ぶ。湖の南岸は即ち富士の裾野にして、北方には御坂山笹ヶ峯等東西に連なれり。湖底の最深所は東部に在りて約二十米に達し、概して北岸第三紀層の水際に深く、南岸は淺きを常とす。これ其の南岸には富士熔岩の流れ來りしに因るなり。

西湖

湖の中心には第三紀層より成れる一小島鷓鴣島あり。此の湖もと排水口を東方に有し、湖水は東流して桂川に合したりしも、貞觀年中熔岩流の爲め閉塞せられて、今は之れを有せず。近時湖の東南岸船津の近傍に一疏水を設け、水田灌漑の用に供し、餘水を桂川に放流するに至れり。

西湖は河口湖の西方に在りて、東西の長さ三軒、南北の幅一軒餘、周圍約十軒を有し、周邊には屈曲凹凸甚だ多し。此の湖もと精進湖と相連なりて、剡海或は脊地の湖と稱せられたりしが、貞觀年中富士の熔岩流れ來りて隔離せられたるものにして、今日精進湖の東方にある赤池と稱する小池の如きは其の遺物に外ならず。北岸は御坂層より成れる鬼ヶ嶽の山麓これに枕み、東南岸は第三紀層の小丘之れを圍繞し、西南岸には熔岩流廣く亘りて、青木原の荒野を控えたり。湖底概ね急深にして、最深點は畧中央部に在りて長く東西に亘り、深さ九十米に達すといふ。此の湖排水口を飲くを以て、大雨の際は往々湖水氾濫して附近の地を浸すことあり。

精進湖

精進湖は西湖本栖湖の中間に在りて、五湖の中最も小なるものなり。東南

本栖湖

岸は峨々たる熔岩より成り、北東西岸は第三紀層の丘陵之れを繞る。湖面の海拔高距は約九百十米にして、畧西湖と等しく、湖底の最深所は三十米に及ぶ。上人の言に據るに、西精進の兩湖水は地下に於て連絡を有するもの、如く、常に同一の水準を保つといふ。蓋し是れ二湖を隔絶せる熔岩は多孔質鑛質のものを以て、水の滲透甚だ容易なるに因るなり。冬期は湖面堅水を結び、人其の上を歩行し得るに至る。

本栖湖は精進湖の西南一軒餘の所にあり。諸湖の中最深のものにして、最深點は百二十餘米に達すといふ。東西約三軒、南北亦之れに等しく、周圍十二軒を有し、南北西岸は第三紀層及び御坂層の丘陵之れを圍繞し、東岸には富士の熔岩より成れる青木原ありて、湖岸の風景甚だ佳なりとす。湖水清澄、附近の民は之れを飲料に供せり。此の湖亦排水口を飲く。

以上記述せし五湖は和模の蘆湖駿河の浮島沼及び信濃の諏訪湖と共に所謂富士の八湖と稱せらる。蓋し何れも富士山頂より瞰下し得るを以てに因るなり。然れども其の成因は敢て同一なるにあらずして、甲斐の五湖は富士熔岩

に隔離せられて成り、蘆湖は箱根火山の火口原湖に属し、浮島沼は所謂潟湖なり。而して諏訪湖は唯、山間の窪地に停溜せし湖水なりとす。

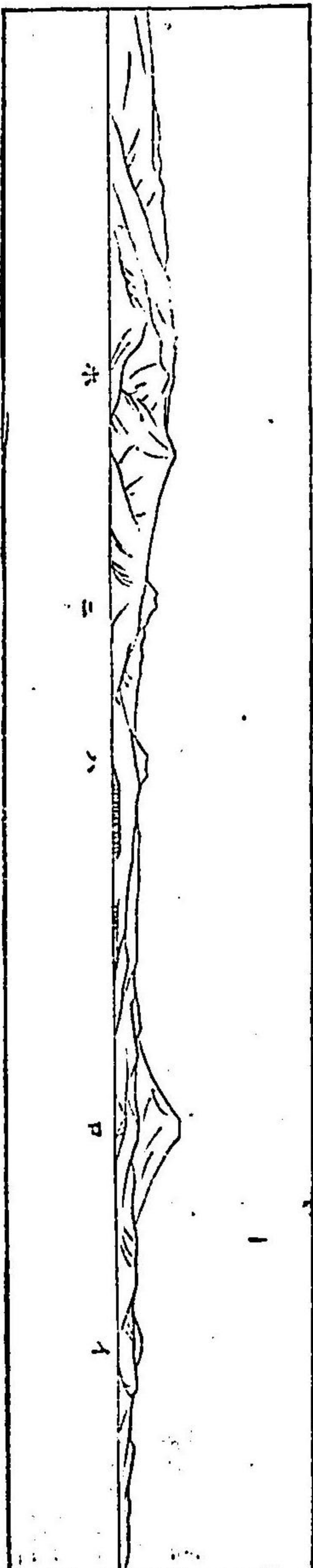
伊豆國

伊豆國

- 伊豆半島總説：二六頁。 天城火山麓：三六頁。 中央火口：三三頁。 側火山：三三頁。
- 逆笠山：三三頁。 カツギ平火口：三三頁。 入町池火口：三三頁。 鉢窪山：三三頁。 登り尾山：三三頁。
- 鉢の山：三三頁。 丸野山：三四頁。 岩の山孔の山矢筈山：三五頁。 大窪山小室山：三六頁。
- 熱海火山：三六頁。 網代火口：三六頁。 猫越火山：三六頁。 逆勝火山：四〇頁。 半島南部の地形：四四頁。
- 蛇石山：四三頁。 平原：四四頁。 水系：四四頁。 狩野川：四四頁。 川津川：四四頁。
- 稻生澤川：四四頁。 海岸：四四頁。 伊豆七島總説：四四頁。 大島：四四頁。 大島火山の外輪山：四四頁。
- 火口丘三原山：四六頁。 火口原：四五頁。 二子山：四五頁。 岳の平山：三五頁。 愛宕山：三五頁。
- 波浮火口：四五頁。 シクホ：四五頁。 千ヶ崎：四六頁。 大島に於ける石器時代人類の遺跡：四五頁。
- 利島：一五頁。 鷓吐根島：一五頁。 新島：一五頁。 式根島：一五頁。 神津島：一五頁。
- 三宅島：一五頁。 御蔵島：一五頁。 八丈島：一五頁。 八丈富士：一五頁。 トンブ：一五頁。
- 三原山：一六頁。 海岸：一六頁。 小島：一六頁。 青ヶ島：一六頁。 島：一六頁。
- 鳥島の爆裂：一六頁。 小笠原群島：一六頁。 小笠原群島總説：一六頁。 父島：一七頁。
- 父島の海岸：一七頁。 兄島：一七頁。 弟島：一七頁。 東島：一七頁。 西島：一七頁。

- 南島：一七頁。 北島：一七頁。 母島列島：一七頁。 母島：一七頁。 姉島：一七頁。
- 妹島：一七頁。 姪島：一七頁。 向島：一七頁。 智島列島：一七頁。 蟹島：一七頁。
- 蝶島：一七頁。 嶋島：一八頁。 北の島：一八頁。 小笠原群島の地質：一八頁。
- ロサリオ島：一八頁。 火山列島：一八頁。 南島島：一八頁。

伊豆國は相模駿河の兩灣の間に介在する伊豆半島及び伊豆七島より成れるものにして、行政上半島の地は静岡縣に属すれども、七島の地は東京府の所管たり。廣袤總て約千六百八十平方軒、其の中二百九十五平方軒は島嶼之れを占む。今先づ半島の地より説き、次いで各島に及ばんとす。



大島より天城山 富士根箱根城天り島大 山根箱 (イ) 山根箱 (ロ) 山根箱 (ハ) 山根箱 (ニ) 山根箱 (ホ) 山根箱 (ヘ) 山根箱 (ヘ)

伊豆半島概説

伊豆半島は鑿状をなして相模駿河二灣の間に突出せるものにして、南北に長く、東西の幅は川奈戸田の間最も廣くして約三十五軒に及び、半島の南端石廊岬より北端佐野に至る南北の長さ凡そ六十軒を有す。半島の地たる處山嶽丘陵蜿蜒起伏して、河流の沿岸にも平地甚だ少なく、沿海の地亦多くは危岩削立して懸崖をなせり。天城群山路、半島の中央部に蟠踞して、萬三郎嶽萬二郎嶽等の諸峯を起し、之れより山脈東北に延びて遠笠山矢筈山等を生じ、更に半島の東岸に沿うて北走し、所謂箱根山脈となり、巢雲山玄嶽等に連なる。天城群山の西方にも亦一脈西方に延びて猫越根古群山を起し、其の間に天城峠(八百米あり)。これ即ち半島を縦断する下田街道の通ずる所にして、北は狩野川の流路に沿うて三島町に到るべく、南は川津川及び逆川の溪谷に從つて下田港に出づべし。之れより山脈は更に北方に連亘して達磨山に及ぶ。從つて箱根山脈、天城猫越の兩群山及び達磨山は相連なりて蹄鐵狀の連嶺をなし、北方に向つて開放し、其の中に半島最大の狩野川の流域を涵養せり。猫越山群の一峯三蓋ヶ嶽(三方ヶ嶽)より一山脈又南に岐れ天城猿山に至りて

山嶽

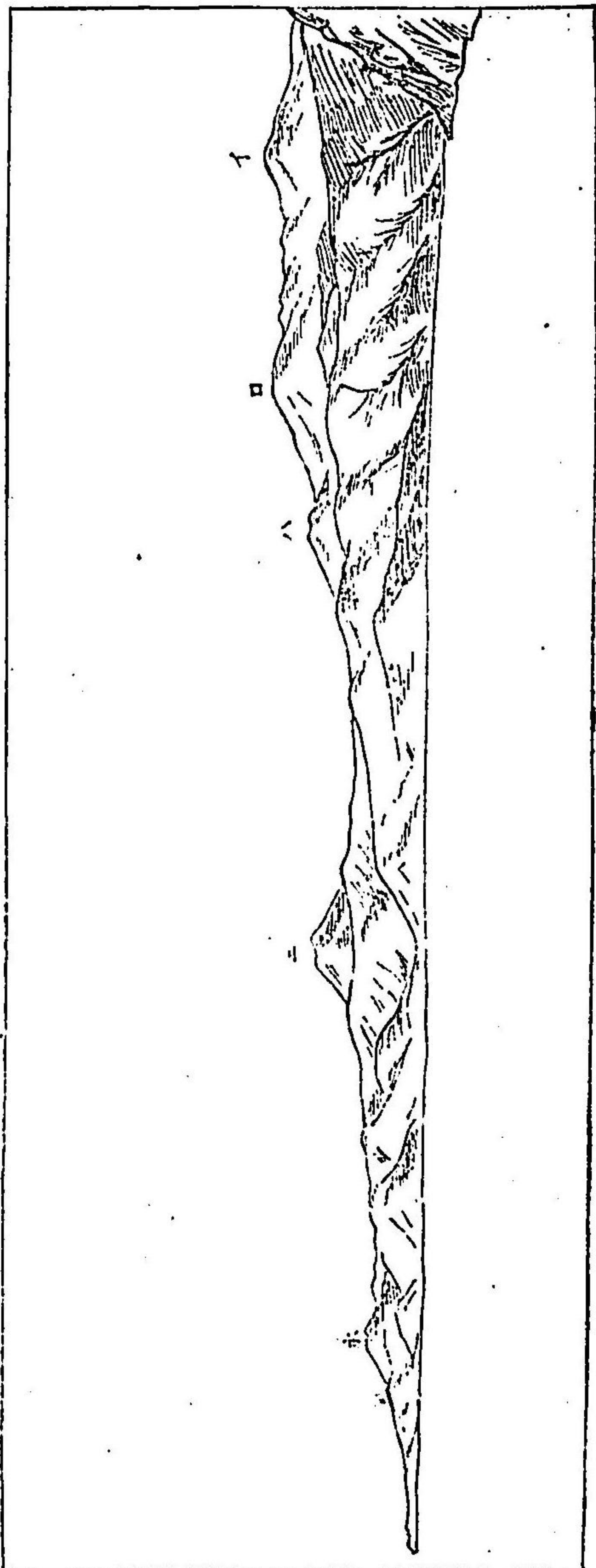
更に二分し、一は西南に向ひて小杉原峠に及び、一は東走して逆川の近傍に亘れり。

伊豆半島の地は所謂富士火山脈の衝路に當れるを以て、火山の噴出夥だし、上述の天城猫越の兩群山及び達磨山等何れも休火山にして、尙ほ半島の東北隅には熱海火山及び網代の爆裂火口址あり。從つて半島全部は火山噴出物より成り、基底の第三紀層と雖も、其の物質は等しく火山より導かれたるものなり。今主として石原理學士の調査報文に基づき半島中最大なる天城火山彙に就いて詳述し、更に他の諸火山に及ぶべし。

天城火山彙  
中央火口

天城火山彙は略半島の中部に於て相模洋に近く蟠踞せる一大火山群にして、中央火口は現時甚しく破壊せられて、其の北壁及び西南壁の一部を存するのみ。其の最高點は北壁にありて萬三郎嶽と稱せられ、高さ千四百五十米を有す。其の東に萬二郎嶽(千三百米稍低)連なりて相共に弧状をなし、更に東南に延びて筈木山(千〇二十八米)に及び、次第に低夷して白田川の火口瀨に盡く。火口の西壁はカワゴ平及び八町池の二側火口によりて破壊せられ、稍明なら

和模國吉濱近傍より天城火山を望む  
（イ）天城山 （ロ）遠笠山 （ハ）天城山 （ニ）大室山 （ホ）小室山



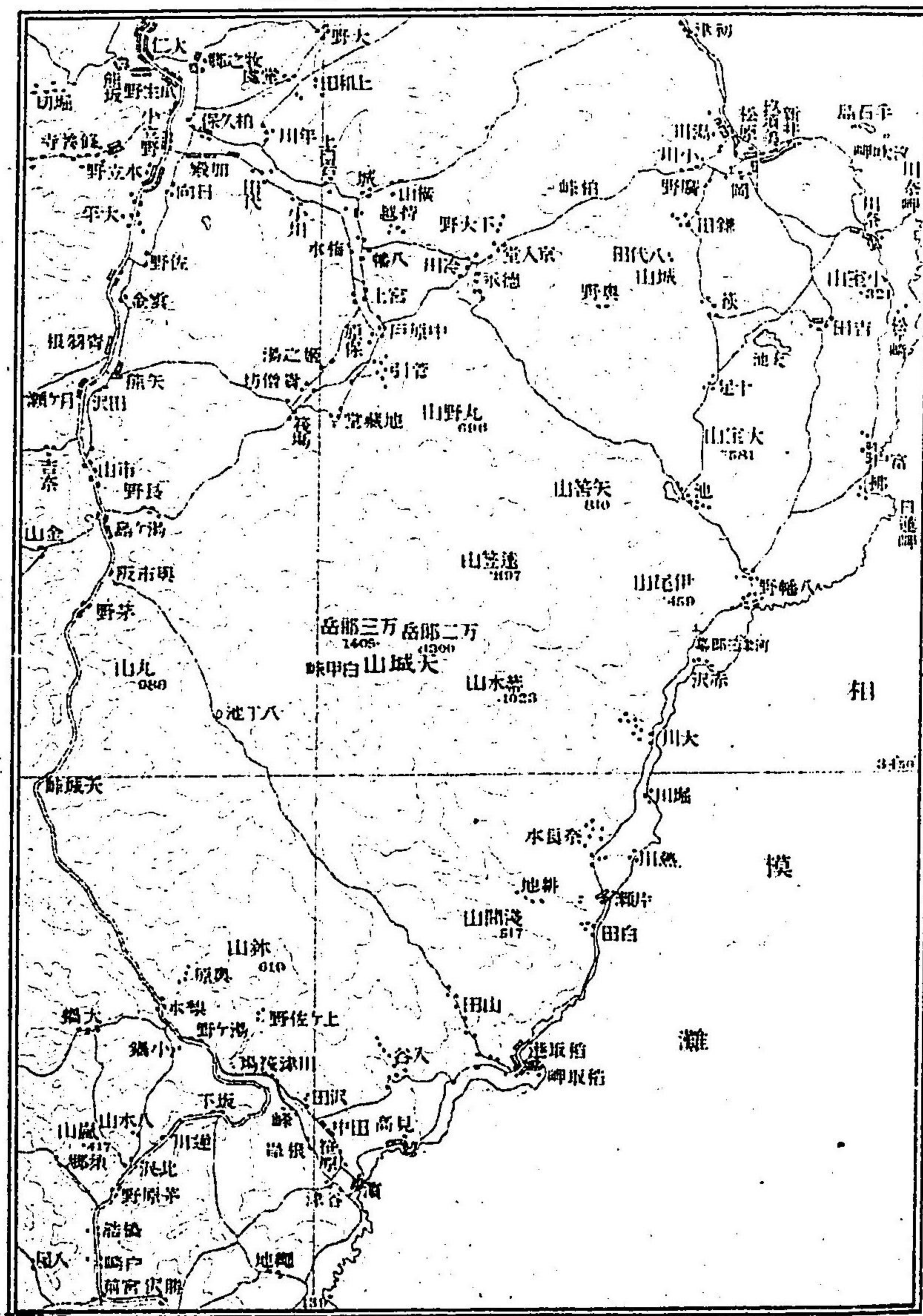
ざれども、其の南方にある三筋山（八百二十二米）は火口の西南壁を示すものに外ならず。火口の直徑凡そ六千四百米、内側は急峻にして殆んど攀登すべからざれども、外側は極めて緩なり。裾野は其の西方に於ては、比較的古成に係る猫越火山の妨ぐる所となりて著るしからざれども、他の三方に於ては好く發達し、其の北側は樹木鬱鬱尙ほ暗く、我國有名の美林をなせり。

側火山  
天城火山の山側には數多の側火山を生じ、石原理學士の研究に據れば其の數總て十五ありといふ。其の中遠笠山、カワゴ平火口、八町池火口は中央火口に近く生じて石原氏は之れを第一次側火山と稱し、鉢窪山、登り尾山、鉢の山、小池、大池等は天城火山の西南麓を環擁して第二次側火山西南線と稱せられ、丸野山、岩の山、孔の山、矢筈山、松室山は之れ等に對して東北麓を擁し、第二次側火山東北線と稱せられ、更に大室小室の兩側火山は遙に東北麓に噴出せり。

遠笠山  
第一次側火山は天城火山の山頂に近き所に於て噴出したるものなるを以て、其の山體は敢て大なるにあらざれども、其の地盤高さを以て、海拔高距は何れも千米以上に達せり。遠笠山（洞笠山）は天城火山彙の最高峯萬三郎嶽の東北



天城山附近地形圖



八段高止五十二米二五〇年九月二日測量  
 尺二寸五分一之

第四版

入町池火口  
 カワゴ平火口

に聳ゆる層状休火山にして、海拔千百九十七米なれども、比較高距は二百餘米に過ぎず。美麗なる圓錐丘にして、其の山頂は甚しく浸蝕作用を被りて噴火口址を留めず。其の裾野は東南北の三方に著るしく發達し、北は冷川の溪谷に延きて遂に熱海火山と相對し、東方は矢筈松室等の第二次側火山に及び、南は即ち遠笠野にして赤澤に至り、遂に海に没す。然れども其の西は直ちに天城火山の山腹に接して裾野狭く、此處に標式的鞍状谷を作れり。此の山海岸に屹立せるを以て、山頂よりの眺望頗る開豁にして、伊豆七島の如きは悉く指呼の間に在り。カワゴ平火口は萬三郎嶽の西側にありて、北方地藏堂村より南方白田村に通ずる徑路火口内を過ぐ。其の西は深谷を以て限られ、口底の直徑約百五十米を有し、其の内壁は頗る急傾斜をなし、其の噴出せる浮石及び黒曜岩片は北方三千五百米を隔つる地藏堂村に達せり。此の西南二千五百米を隔て、更に入町池火口あり。現時水を湛へて所謂火口湖をなす。東西の直徑畧百五十米、南北凡そ二百米にして、其の周囲は低夷にして毫も懸崖を認めず。

鉢の山

登り尾山

鉢窪山

第二次側火山西南線とは天城火山の西南麓を擁し、弧状をなして西北より東南に並立せる側火山群と稱するものにして、鉢窪山登り尾山鉢の山大池小池等より成る。而して其の外方には此の弧線に平行せる狩野川及び川津川の溪谷ありて、其の沿岸に數多の温泉を湧出するを以て見れば、本側火山群は蓋し天城火山の西南側にある弧状の斷層線に沿うて噴出したるものなるべし。鉢窪山は狩野川畔なる湯ヶ島温泉の南方約三軒、下田街道に沿うて起てる美麗の一圓錐山にして、高さ六百七十四米、比較高距は凡二百五十米なり、其の頂上には火口の遺址たる鉢状の窪地を存し、南側には二個の輻射谷を有すれども、岩石の露出一般に良好らず、其の裾野の基礎は全く往々柱状節理を呈せる灰長石玄武岩より成り、之れを被ふに浮石及び黒曜岩片等の噴出物を以てせり。登り尾山は天城峠の南麓なる梨本村の北端に在り。浸蝕作用の爲めに甚しく其の原形を失ひ、噴火口址を欠き、又圓錐状をも呈せざれども、其の近傍には火山噴出物著るしく堆積せるを見る。鉢の山は湯ヶ野村の東北に在りて完美の圓錐形をなし、海拔六百十九米、比較高距は三百米にして、

大池小池

頂上には噴火口址を存せり。其の四周には山巒圍繞して盆狀の平地を開き、石原理學士の説に據れば、本側火山は天城山側に生ぜる槽狀陷落地に噴出せるものなりといふ。而して其の熔岩は主に灰長石玄武岩にして、南流して川津川の溪谷に及べり。鉢の山の東方約二軒にして又大池小池の二噴火口相並びて東西に列なれるを見る。小池は畧圓形にして四周絶壁をなし、口底の直徑凡そ百二十米、大池は橢圓形をなして稍大なり。往時は兩者に水を湛へて所謂火口湖たりしも、今は全く乾涸せり。

丸野山

第二次側火山東北線は天城火山の東北を擁せる一連の側火山群にして、丸野山岩の山孔の山矢筈山及び松室山等より成る。蓋し亦一の裂線に沿うて噴出せしものなるべし。丸野山は遠笠山の北側に寄生せる一小火山にして、比較高距は僅に九十餘米に過ぎざれども、其の頂上には稍大なる火口あり。北に向つて潰決し、所謂カルデラをなし、北方大見村附近より明かに之れを窺ふを得べし、岩の山は丸野山の東南約八百米の所に存し、四近の地より隆起すること僅に十數米に過ぎざれども、其の火口は比較的大にして、其の山側

岩の山

孔の山

矢筈山

松室山

大室山

には玻璃質富士岩の堆積あり。岩塊犬牙の如く削立して登るべからず。蓋し此れ岩の山火山の側噴出に外ならざるべし。岩の山の南方數百米の所に於て又一噴火口あり。之れを孔の山と稱す。西北冷川村より東南八幡村に至る徑路其の口底を過ぐ。矢筈山は遠笠山の東北數軒の所に在り。峯頭分れて大矢筈(八)百(十)米、小矢筈(六)百(七)十(米)の二となり矢筈形をなす。山勢急峻にして奇岩屹立し。玻璃質の輝石富士岩より成る。其の西北側には五個の側火口を有せり。松室山は又伊尾山と稱す。矢筈山の東南に在りて海岸に近く、高さ四百五十九米。赤澤附近より之れを望見するときは完全なる圓錐形をなせども、其の火口の東壁は破壊せられて火口瀬をなせり。  
大室山は矢筈山の東方に在りて、側火山群中最も完全なる截頭圓錐形をなし、海拔凡そ五百八十一米、比較高距約三百米にして、頂上には圓形の噴火口址を存す。山側は概して平滑にして、輻射谷を缺ぐも、南腹には一爆裂火口を存せり。大室山の西北麓に穴の原と稱する所あり。深さ十米、直徑約二十米を有せる槽狀の穴にして、北麓なる字十足よりの登路此處を過ぐ。蓋し

## 小室山

これ熔岩流の外部冷却せる際、其の内部流れ去りて空洞を作り、其の後上部陥落して成れるものなり。小室山は大室山の東北に方り、海岸に接して起れる小圓錐丘にして高さ凡そ三百二十一米を有し、頂上には小火口址を存せり。天城火山麓の北方には尙ほ一脈蜿蜒として北に走り、半島の中部を縦貫して、遂に箱根火山に盡く。此れ即ち箱根山麓と稱するものにして、東側は比較的急斜して直ちに海に没すれども、西方は稍緩にして遠く狩野川溪谷に及べり。其の南端には小川澤山(六十米)及び巢雲山(五百八十米)あり。北方には玄嶽(金山等相聳立す。巢雲山箱根火山中の巢雲山とは別物なり)は伊東の西北約四料の所に聳え、其の四周は高原性を帯び、西側には長者ヶ原と稱する一曠野あり。頂上は扁平にして火口址を存せざれども、附近に熔岩の塊片夥だしく堆積せるを以て見れば、蓋し亦一の火山なるべしといふ。

## 熱海火山

玄嶽(七百六十九米)及び日金山は瀧地山岩戸山及び伊豆山西方の丘陵と相連なり、熱海町を中心として、東方に開ける蹄鐵狀の熱海火山口壁を形成するものにして、熱海火山は實に一個の單純なる層狀火山に屬し、火口の直徑凡そ

五千米、其の東方の大部は爆裂作用により破壊せられ、加ふるに強風怒濤を捲きて其の岸を浸蝕し、遂に現今見る如き地貌を呈するに至りしなり。彼の有名なる熱海間歇噴泉(第十六圖)は實に其の火口底に於て湧出するものにして、當時活劇の餘勢を留むるものなり。火口の西壁瀧地山(六百七十二米)に於ては成層の狀最も著るしく、内側は三十五度乃至四十度の懸崖を示せども外側は二十度内外の緩斜を有せり。其の南方にある玄嶽は火口壁中最も高くして、約八百米に及び、之れより火口壁は東方に彎曲して次第に低くなり、遂に魚見崎に盡く。熱海町より南方網代に通ずる道路其の西側を過ぎ、稱して和田峠(二百九十米)といふ。瀧地山の北方は稍低くなり。此處に熱海より田代に至る輕井澤峠(六百三十米)を通ず。日金山岩戸山(七百三十四米)は相共に火口壁の北部を作り、岩戸山に於ては峨々たる熔岩流の南下せるを認め得べく、其の東方は漸く低夷し、伊豆山附近に於て海に没す。熱海火山の北側は雄大なる箱根火山の噴出物によりて其大部を被はれ、裾野の狀態明ならず。東方の裾野も今や全く崩壊して、僅に東南海中の一島初島に其の面影を留むるに過ぎ

ざれども、西方に於ては頗る著るしく發達し、五六度の緩傾斜を以て遠く山平井附近に及べり。而して其西側丹那田代の兩村に於ては略圓形の盆地ありて、四周山を繞らし、一見火口址の如き地形を呈すれども、平林理學士に據れば、これ蓋し削磨作用によりて生ぜしものにして、往時は曾て湖底たりしものなり。

熱海火山を構成するものは層灰岩集塊熔岩及び熔岩にして、熔岩には玻璃質石英富士岩淡青若しくは淡白色にして粗鬆なる複輝石富士岩及び暗黒乃至紫灰色なる橄欖輝石富士岩の別あり。

熱海の南方約六軒の所に網代灣あり。半圓形をなして外洋に向ひ、灣内の水深五十米に及び、灣口の徑約二千米あり。連嶺其の周りを圍繞し、灣に向つて急斜し、石原理學士の説によれば蓋し一の爆裂火口址ならむといふ。

更に眼を轉じて天城火山の西方を顧みれば、茲に又猫越根古火山の聳ゆるあり。其の脈一は北走して達磨火山に連なり、一は南に延びて天城嶺山に及ぶ。猫越火山は其の成生比較的舊きを以て、外部の構造今や頗る明ならざれ

網代火口

猫越火山

ども、最高峯三蓋嶽千〇十二米と猫越峠九百九十六米とを結べる一條の連嶺は、一方東北に彎曲して鉢窪山近傍に向ひ、他方北に延びて千米内外の高距を保ち、更に東北に向ひ猫越村を擁して弧狀をなすを以て見れば、蓋し此れ猫越火山の外輪山たるべきものにして、其の火口の東北壁は全く破壊せられて此處に猫越川の火口瀨を開きたるものなり。従つて猫越峠の南北に於て坂路の傾斜大に異なるも、一は火山の外側に於て、一は火口の内壁を通ずるに因るなり。山體の東部は天城火山に被覆せられて其の間に天城峠(八百米)の鞍狀谷を存するに過ぎざれども、西南の兩部は明にして、山側は宇久須川仁科川稻生澤川及び川津川等の輻射谷によりて刻鑿せられ、二三の支脈を生じたり。其の中西に向ふものは再び岐れて、一は西北に走り松坂町の北方なる大原峠附近に盡き、一は西南に延びて濱村の北方に及ぶ。又三蓋嶽より南に向ふものは天城嶺山或は本の嶽と稱し、高さ九百九十八米に至り、分れて二峯となり、一は西南の方婆娑羅山及び小杉峠(三百二十一米近傍)に連なり、一は南に進みて遂に下田の東邊に及び遂に海に没す。本火山を構成する岩石は種

達磨火山

々ありと雖も、其の主なるものは變朽富士岩、輝石富士岩等にして、其の基底は層灰岩、凝灰礫岩、集塊岩等より成る。蓋し猫越火山は第三紀の末葉に於て太平洋中に噴出したる半島最古の火山にして、最新世の當時に於ては其の山頂僅に水面上に露はるゝに過ぎざりしも、其の噴出せる岩石は先づ半島の根底を作り、次いで土地の隆起及び天城達磨兩火山の噴出と相俟つて本土と接続するに至りしものなり。

達磨火山は猫越火山の北方にある一火山にして、駿河灣の東岸に聳立し、北方沼津附近より之れを望むときは明かに火山たるの相貌を呈すれども、其の西半部は全く海波の浸蝕破壊する所となり、火口は蹄鐵狀をなして西方戸田灣に向つて開放し所謂破壊圓錐丘の觀をなせり。火口壁は其の東南に於て最も高く海拔九百八十一米、其の北少しく低くなり、此處に東方修善寺より西方戸田に至る磐女峠七百八十五米を通じ、之れより少しく西北に彎曲して眞城山となる。而して其の南北兩壁は平均七百米の高距を有し、西方に至るに従ひ次第に低くなり、戸田村の南北に於ては僅に四百米を出でず。戸田灣は

眞城池

實に海水火口の西壁を破りて侵入し成れるものにして、戸田は蓋し火口港と稱すべきものなるべし。戸田灣の門口を扼して御濱の礫洲あり。南より北に向つて海中に斗出し、其の幅二三百米、長さ約七百米にして、巨大の礫片及び細沙より成り、松樟等の大木其の上に生じ、西北は駿河灣を隔て、富士愛鷹の秀峯を仰ぐべく、東は直ちに戸田灣の彼方達磨火山に對し、風光頗る明媚なりとす。

達磨火山の裾野は其の發達著るしからざれども、東方に於ては稍明かにして、狩野川の溪谷に布き、此處に二三の輻射谷ありて、其の中大なるを修善寺川とし、河畔に角閃富士岩の岩脈ありて修善寺の温泉之れに沿うて湧出す。達磨火山の山體を構成する主要の岩石は輝石富士岩、複輝石富士岩の熔岩及び集塊熔岩等にして、磐女峠近傍に於ては明かに二層の熔岩流を認むべく、其の基底は前述の諸火山と同じく層灰岩及び凝灰集塊岩等より成る。

達磨火山の北部火口壁なる眞城山頂に眞城池あり。僅に雨水を貯へて一小池塘の狀をなす。蓋し達磨火山の側火口なるべきか。

半島南部の地

蛇石山

半島の南部は峻嶒高峯の記すべきものなく、概ね丘陵起伏の地たるに過ぎず。中川及び稻生澤川上流の南に接して、一帯の山脈東西に連亘せるを見る。東は下田町の北方に起り、蜿蜒として西走し、平均四五百米の高距を保ち、遂に西海岸に至りて蛇石山及び烏帽子山を起す、蛇石山は高さ僅に五百米に過ぎざれども、輝石富士岩より成る一小火山にして、頂上には噴火口址たる一大窪地あり。東西四百米、南北五百米を有し、往時は水を湛へて火口湖たりしも今は乾涸して稻田となれり。北方松崎より南方子浦に通ずる蛇石峠又大峠といふ。高さ四百七十米其の西約一の山側を通ず。尙ほ其の南麓には天神原長者原等の曠野あり。其の他下田の西方には第三紀層より成る下田富士二百〇六米(相山)二百五十二米あり。西海岸には朝日山(五百三十六米あり)下田富士は高さ甚だ大ならざれども、其の形の美なると海岸に聳えて頂上の眺望佳なるとにより稍著るし。

半島の地山嶽重疊相接して起り、長流大河に乏しく、諸水概ね奔放急下して直ちに海に朝するを以て、其の間に平野を開くこと殆んどなく、僅に河口

平原

水系  
狩野川

に於て少許の平地を有するに過ぎずして、特に記するに足るものを見ず。其中狩野川下流の沿岸にある狭長の平地は稍大にして、葦山三島の名邑此の中に横はれり。

半島中河流の最大なるを狩野川とす。狩野川は上流を湯ヶ島川と云ふ。源を天城猫越兩火山の裾合谷なる天城峠附近に發し、猫越火山の火口瀨なる猫越川を併せ、湯ヶ島温泉を過ぎて北流し、更に西方達磨火山より發源する船原川修善寺川(又桂川といふ)(第十五圖乙、第十六圖甲)及び東南遠笠山より來る冷川等を容れ、箱根山脈の西麓を劃して益北し、遂に西に折れて駿河國に入り、沼津町に到りて海に注ぐ。長さ凡そ四十料、其の中本國內にあるもの約二十八料とす。河岸概ね山巒急に逼りて平地少なく、流勢亦急なれども、大仁以下は谷稍開け、河口より十數料の間舟楫の便あり。

箱根山麓天城火山麓及び猫越達磨の兩火山等にて成れる蹄鐵狀連峯の外部は流域狭小なるを以て大河なく、急流奔下して直ちに海に入るを常とし、其中稍大なるを川津川稻生澤川手石川中川等とす。川津川は源を天城峠の南

川津川

稻生澤川

側に發し、天城猫越兩火山の間を東南流すること約十軒にして谷津村に於て海に入る。河岸梨本村鎌乘瀧大鍋湯ヶ野及び下河津の諸處に於ては温泉を湧出し、又狩野川の上流にも湯ヶ島吉奈等の温泉ありて、此の二川は天城火山彙の西南縁を圍繞し、天城火山の第二側火山西南縁と略、其の方向を一にするを以て見れば、蓋し此の山側には弧狀の一裂線存在するなるべし。稻生澤川は婆娑羅山小杉峠附近に發し、第三紀凝灰岩地方を東流し、宇箕作に於て俄然流路を南に轉じ、下田港に於て海に注ぐ。手石川は半島南端の諸水を集めて東南に流下し、中川は猫越火山の兩南側を流れ、小杉峠より來る一水を合して後西に折れ、松崎附近に於て海に注ぐ。流路何れも十軒内外を有するのみ。

海岸

海岸線は比較的長くして小出入に乏しからずと雖も、海岸概ね峭壁多くして良港少なく、東岸の熱海網代伊東稻取及び西岸の戸田松坂松崎等僅に船を寄するに留まり、獨り南岸の下田港灣稍大にして碇泊に便なるあるのみ。而して沿岸島嶼岩礁に富み、殊に南西岸に於て最も甚だしと雖も、何れも小に

伊豆七島  
總説

して特に記するに足らず。其の中熱海の東南十一軒の初島、下田の南方十一

にある神子元島は稍大なるものなり。  
伊豆七島は伊豆半島の東南海上に羅列する群島の總稱にして、七個の大島と數個の小嶼岩礁とより成り、其の主要なるものを大島利島トシマ鶴根島ツルネ新島ニジマ式根島シキネ神津島カミヅ三宅島ミヤケ御藏島ミクラジマ八丈島及び青ヶ島等とす。今試みに下田灣頭に起ち遙に東南海上を望めば、幾多の島嶼は漂渺たる太平洋中に碁布散點し、配列の狀地貌の如何は略之れを察知するを得べし。絶えず白煙を噴ける大島は二重の扁平圓錐形をなして東方に横はり、其の右方には高き圓錐形をなせる利島及び海面上に突起せる一群の岩塊に過ぎざる鶴根島あり。眸を次第に東南に轉ずれば次ぎに數個の臺狀をなして低く横はれるは即ち新島にして、其の右方僅に水平線上に極めて低き臺狀を顯はすものは式根島なり。而して神津島は最も右方に伏臥せり。天氣晴朗なる時は新島と式根島との間に當り、三宅御藏の二島圓錐形をなして遙に横はれるを認むべし。而して以上の諸島中大島利島三宅御藏の四島は皆圓錐形をなし西北々より東南々に走れる一線



上に排列せられて、主に富士岩類より成り、之れ等と全く地貌を異にし、臺状をなせる新島式根島神津島は更に一列をなして、其の西方に位し、流紋岩及び其の灰砂層より成る。前者の方向は天城箱根愛鷹富士八ヶ嶽等を連ぬる一線と略一致して相共に所謂富士火山脈を作り、後者は其の西に位して富士火山脈よりも古期の噴出に屬する一の火山脈をなすものゝ如し。今先づ七島中の最北端にある大島に就いて述べ、次ぎに他の諸島に及ぶべし。

## 大島

大島は伊豆國伊東の東南海上約四十軒の所に在る一火山島にして、島の形錘子状をなし、中央稍膨大して南北に長く、西北々の岬端千ヶ崎より東南々の波浮港口に至るまで約十五軒、東西の幅最も廣き所に於て八軒半に及び、周圍凡そ四十二軒、面積凡そ八十八平方軒に達す。實に標式的の層狀複火山にして、外輪山及び火口丘を有し、其の山側には數多の側火山及び爆裂火口を生じ、其の最高點は火口丘三原山の東部にありて海拔七百五十五米を有す。其の最近の噴出は明治九年十二月にして、今尚ほ絶えず汽烟を噴き、曾て活動の盛なりし時に方りては、熱灼せる熔岩常に噴騰せる蒸氣に映射して光芒

## 大島火山の外輪山

普ねく四近の海を照らし、恰かも地中海に於けるストロンボリ火山の如く相模洋の燈明臺を以て稱せられしも、現時は其の勢大に衰へて稀に火光の映ずるを見るに過ぎず。島の東半は地形稍錯綜せりと雖も、西半は概ね單簡にして、傾斜に變化なく、殊に其の西北麓は緩慢の裾野遠く延亘せるを見る。海岸は山麓急に海に没して、一帯の岩壁峙立せる所多く、南方間伏村及び西岸新島村附近に於て少許の沙濱を有するのみ。

大島火山の外輪山は火口丘三原山を圍繞し、最高點を三原白石と稱し、其の東南部にありて、高さ七百三十六米なり。一帯の岩壁之れより左右に延びて多少の高低あれども、西壁は殊に完全にして、西北の一崖頭三原鏡端六百〇四米より東北は峯頂略同高を保ち、絶壁急に火口原に臨みて屏風を列ねたるが如き觀あり。火口壁の東北部は全く崩壞して火口丘より噴出せる熔岩此の部を衝いて溢流し、従つて火口壁は恰かも蹄鐵状をなせり。而して火口原よりの高さは比較的小にして、最も高き所に於て百二十米、低所は二十米に過ぎず。壁面に於ける噴出物累層の露出は頗る明かにして、三原鏡端に於て



百五十五米、實に大島火山の最秀點とす。噴火口は圓形をなし、其の直徑約七百五十米及び、四壁の懸崖削れるが如く、山側の傾斜は頂部に於て二十八度、中腹に於ては十八度内外を有せり。今若し其の頂上に踞して大觀すれば、西北遙に芙蓉の峯秀然として天外に聳立し、箱根天城の諸火山低く其の前に侍し、大室矢等等の側火山又近く起り、更に南方烟波漂渺の間には卓狀の新島、鈍圓錐狀の三宅島御藏島等何れも指呼の間において、默想の間富士火山脈の趨勢は自ら腦裏に映すべく、近くは不斷綿々たる噴烟脚下の火口より起りて蒸々天に沖し、熔岩石礫灰砂の累層は火口壁に好截斷面を露はして、轉た自然力の偉大なるを感ずべし。この火口丘の火口壁上部に露はるゝ熔岩は甚だ厚く、一方は南に流れて外輪山三原白石との間なる火口原中に止まり、又一方は東北に流走して遠く東海岸に達し、大島東部の一大燒野を作る。其の熔岩は表面甚だ不規則にして、其の形或は樹根の蟠屈するが如く、或は細を束ねたるが如く、其の終端の部分にありては餘瀝徐々に流れ來り、一條又一條網狀をなして次第に相重なれる様眞に繩狀熔岩の好適例たるを示す。又

其の噴出物の累層は強固ならざるを以て、裂罅を生じ、岩漿此の間に迸出して岩脈を作ることありて、火口壁の西部に其の好露出を存す。而して火口丘は一面噴灰を以て被はれ、大小種々の噴石累々として樹木更になく、往々其中より紡錘状の石礫を發見すべし。

明治九年十年の交にありては火口丘火口の活動盛んにして、熱灼せる熔岩片を噴騰して、約九十米の高さに致すことありて、頗る壯觀を極めたりしも、今日に至りては絶えてかくの如きことなく、噴口の内外諸處より水蒸氣硫化水素亞硫酸瓦斯等を噴出するに過ぎずして、稀に噴口の底部に於て熱熾紅色を呈せる熔岩を見ることあるのみ。

火口原は即ち前記外輪山と火口丘三原山との間にある平坦なる燒原にして細微なる噴灰を以て被覆せられ、其の東北部には火口丘より溢流せし熔岩が噴灰中に其の頭角を露はし、累々として遠く連なり、甚だ奇觀を呈す。されど其の東南面は全く灰砂のみより成り、土人稱して砂漠といふ。長さ四料、幅凡そ二料、其の間樹木絶えてなく、飛禽も其の影をひそめ、若し一朝烈風

火口原

側火山

の起るときは、砂塵天に漲りて頗る荒涼の光景を呈すといふ。大島火山の山體略成れる後、噴出作用は尙ほ相次いで起り、山の東南側に二子山岳の平山の側火山及び波浮爆裂火口ヒクボ爆裂火口等を生じ、西北側には愛宕山等の側火山を噴起したり。

二子山

二子山は外輪山の東南腹を破りて噴出せるものにして、三原白石の東南約一料の所に在り。山頂二峯に分る、これ蓋し其の名の依て來る所なり。火口址は完全ならずと雖も、二峯間の窪地は思ふに其の遺跡なるべし。山の高さ六百十七米、形圓錐状にして東南波浮附近より之れを望むときは其の山體は全く三原山を蔽ひ、三原の噴烟は恰かも其の峯頭より出づるが如き觀あり。山は全く熔岩を缺き、各種の碎片的噴出物の堆積して成れるものにして、所謂噴石丘 (Yonder cone) と稱すべきものなり。

岳の平山

二子山の南方約二料の地に又一側火山あり、岳の平山といふ、樹木鬱蒼たる圓錐状の小丘にして、高さ二百三十一米、山頂には噴火口址たる杯状の窪地あり。粗大なる噴灰岩片等より成りて、前者と成因を同じうするものなり。